

18-24

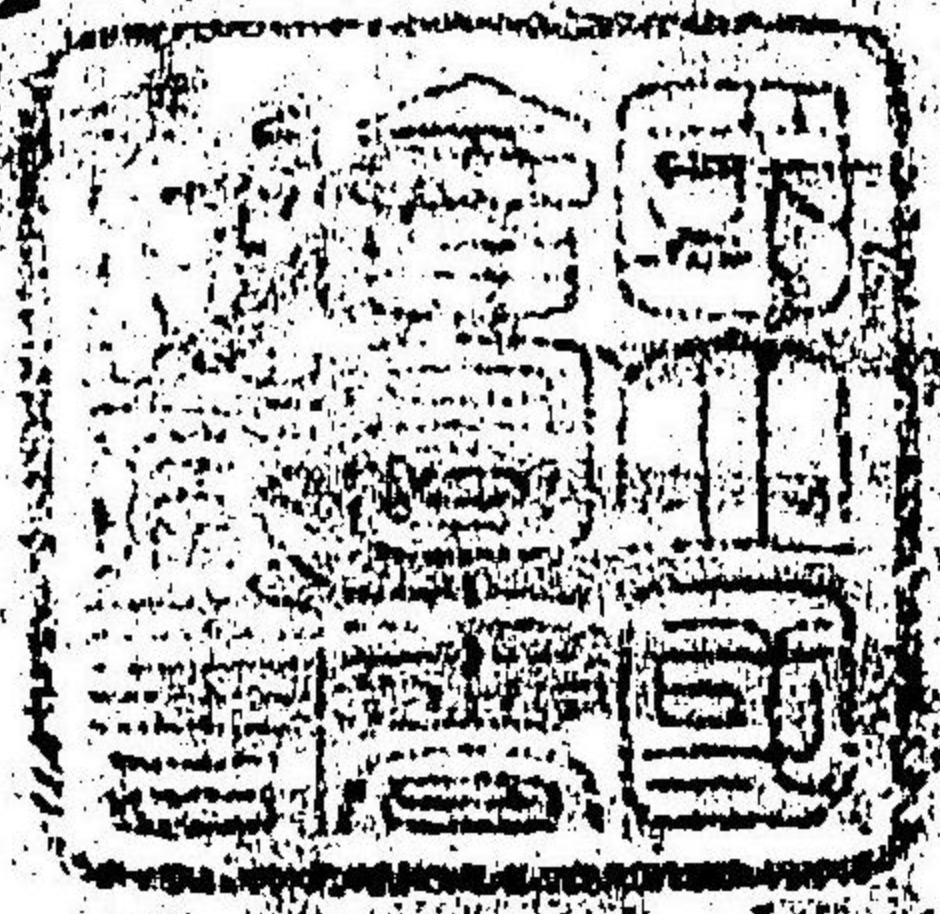
明治十九年六月印行

# 改正河漢記

下卷

東京書肆 金松堂藏版

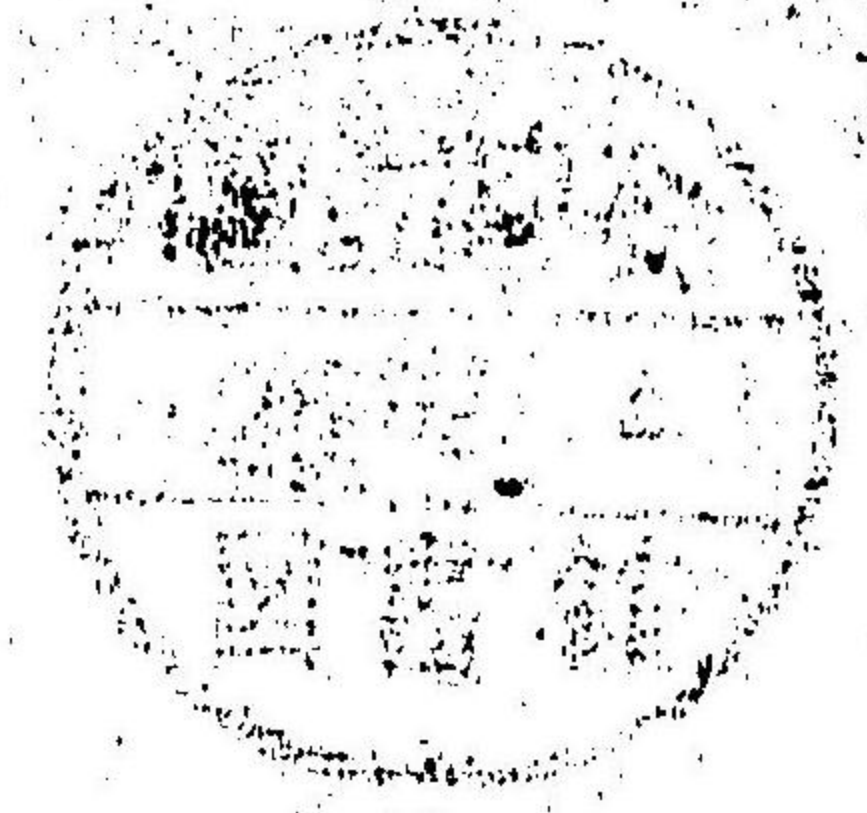
2155  
M465  
N



219480

天  
地  
人  
三  
才  
圖

天  
地  
人  
三  
才  
圖



天

地

可  
見  
文  
成  
者

以  
中  
生  
也

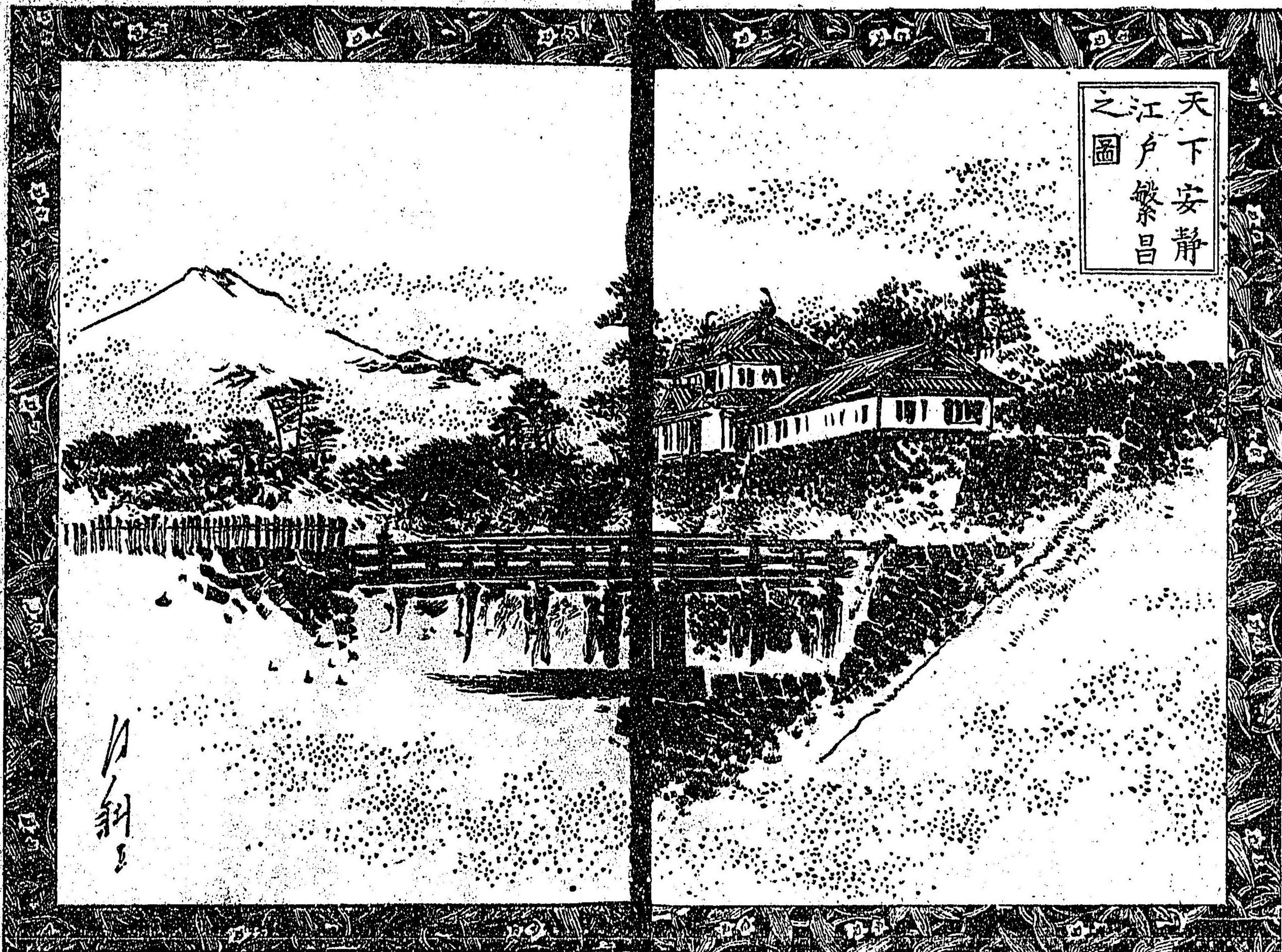






徳川  
秀忠  
公





天下安靜  
江戸繁昌  
之圖

月斜





大久保彦左衛門



校三河後風土記卷第廿二

勢州戸木城軍付木造左衛門佐の事

其頃織田上野介信包は勢州安濃津の城にあり蒲生忠三郎氏郷は松が島に入部して國法を沙汰と松が島と安濃津との間に戸木新美といふ兩城ありて此城には木造左衛門佐長政織田信雄の味方にて猶義操を守り猛勇をふるい少も屈せず籠城せり抑木造といへるは北畠大納言俊通の子大納言俊康より別て今に於て七代國司家庶流勢州までは肩を並ぶる者なき貴族ありまし今の長政が父中將具政は國司晴具郷二男にて木造の遺跡となればかたく國司家の因み淺からねば無二に信雄方に一味して義心を立しかり(諸書長政を具康に作る系圖によるに具康といふは俊義の子にて父の爲にいかなる罪ありしにや誅せらる其後俊義は具政を養子とす具政の子長政あり)是に依て上野介信包は小森上野に分部左京亮光嘉半田神戶に長尾内藏允淨土寺に寺岡金助連部に家所の一族林の城に信包嫡子三十郎信重(後よ民部大輔)を籠置蒲生が方は葛原に上坂左文須賀に小坂源次郎畑に生駒彌五左衛門小河に谷崎忠右衛門を籠置て木造を押へしむると云ども木造は猛勇の者なれば折ふと織田蒲生兩家

の領内へ或時は夜討をかけ或時は新田をさせ轉化弱りなく劫す事度々之木造勢地理によ  
く熟したり武勇は殊に勝れ其中にも畑作兵衛生年十九歳強弓大刀打の妙を得弟勘太郎生年  
十八歳是も力量衆を超て劍法の妙兄におどらず兄は十四五にて初陣せしより今迄首を取る  
事二十級弟も十九級年も一ツ劣り首も一少く取たり時の八字して首取畑とぞ予ける其外堀  
金右衛門田中仁左衛門金子十助中川少藏天華寺勘太郎畑千次郎大塚彌三郎等各一騎當千の  
勇士共あれば毎度織田蒲生の番兵共かけ勝る依て蒲生よりは田丸中務少輔柳原刑部家所  
三河其外澤秋山芳野等織田よりは分部左京亮膝合せて三方より戸木城に押寄るといへど  
も此城南は雲出川岸堀て淵深し西は伊奈白川水たゞへ谷暗く北は深田東は渺たる廣野  
なるを所堀切て柵を組は寄手力攻にせめ抜がたくいつも功なくして退ける蒲生氏郷は  
野邊河原高野日置風早宮山所々に番兵を遣き敵襲ひ来らば早く鉄炮を三ツ放べしと相圖を  
定め置にけり爰に八月十四日葛原の上坂左文が方へ戸木より使を送り互に君の爲身命おし  
むべきにはあらぬとも承るの籠城將卒ほとんど氣疲れたり若者共が體氣を散じすべき爲今  
日夜をかけ雲出川にて鶴を遣ひ慰めやたしと申送る氏郷聞て何か苦しかるべき其意にまか

せられよと返答し氏郷は猶忍びの者をして其虚實を伺はしむ然るに戸木城よりは若者百餘  
人雲出川に鶴二三十羽携出て川狩して深夜迄慰みたり翌十五日の朝戸木城より松が鳴へ  
使を立て船數籠りける其口上には昨日雲出川にて得たる品數少くはし得共今宵は名にあ  
ふ名月あれば御酒宴の御一興にもとて進上するよし之氏郷大に感じ昨日若殿原の漁り給ひ  
し船贈り下され情ふかく覺へいいかさま今宵は三五の良夜二千里の外故人の心吾輩も詠は  
同じくいへし御情を肴酒香て軍中のうさども散しいあん厚く謝し其使をば返しけり今  
宵最中の月殊に晴光にて万里一點の雲もなし氏郷は葛川の樂に酒宴を催し月を賞して和歌  
を詠じ漸く軍慮の勞をなぐさめける木造方には流石の氏郷も今宵は由断して有べきぞと計  
をめぐらし田中仁左衛門畑作兵衛金子十助堀金右衛門中川少藏天華寺勘太郎畑千次郎等の  
勇銳をすぐり立小川邊に出し十分に討田させ引取所近邊の番兵をせうてと馳合すといへど  
も散々に追散らされ敗走すされども兼ての命令嚴されば合圖の鉄砲三度放つ氏郷の歌詠ん  
て居られしがすはや敵の出たるぞやと鎧一縮し兼て愛する名馬小雀稻妻とて二疋あり其小  
雀に打乗り稻妻を早く引來れと云あから鎗捉て乗出す岩田市左衛門次の間も脇を枕とし

轉寐して居たりしが夫といふがら具足引け走り出今夜の我こそ一番ならんと思へば遙  
 先に銀の鯨尾の兜月にかいやくひらめく扱の大將に越されたりと彌馳ていそぎける木造  
 方にハ氏郷いつせ銳氣の大將諸卒に先だち馳出さるゝをばかり菅瀬橋庄村邊愛りしに伏  
 兵を設け置き氏郷一騎がけに馳來らば取籠て討取んとはうりし事なれば鯨尾の兜の光見る  
 よりも爰うしこの伏兵共嵐の木葉を吹立るが如く一而に群り起て鉄砲を打くる其玉氏郷  
 の背に三あたるといへども背うたければ裏うす氏郷の中堀流鎗の妙手大坪流馬藝の達者  
 敵を八方に蹴散らし左右を突たてはたらく家臣深田六兵衛勿体なしと制すといへども氏郷  
 ちつとも聞入れず益進みはげみて奮戦す初菊田に出し中川少藏當年まさには十八歳壯勇無双  
 の若者大薙刀を打振て馳來り既に氏郷の馬の平首を切らんとす氏郷の家人田中新平かけ塞  
 り少藏と戦て討れたり其ひまに氏郷馬をうけ抜け菅瀬の高橋を渡らんとす少藏退り進寄  
 る氏郷鎗にて打なぐる少藏其鎗下をくゞり氏郷に切てかゝる氏郷家人黒川主を打たせじと  
 立塞ぐる少藏黒川々首を切て猶氏郷を目がけ追討んとすれども氏郷馬藝の達者馬の殊更喚  
 足ゆへ追付得ず引返す浦生方岩田市左衛門野田龜之進岡平藏吉村彌五兵衛外池長吉等奮戦

して討死し外池孫左衛門の組討の高名す菅沼助左衛門結解孫之丞赤座四郎兵衛は首を取る  
 岡源八郎組討し既に討るべき所弟半七馳來り其敵に切付て敵よはる所を源八郎刻返し其首  
 を取る此敵は則首取砌と呼れし作兵衛之此時兄源八郎は十八才弟半七は十六才とぞ木造  
 方は天華寺勘太郎大塚彌三郎をはじめ究竟の者四十餘人討れ残兵よふく城へ引返す翌十  
 六日氏郷は首ども改るに中川少藏昨夜浦生方田中黒川二人が首取て堀金左衛門が從者に持  
 せしに此從者生捕れ浦生方に來りしかば氏郷田中黒川が首をもたせ城中へ送り昨夜少藏少  
 年の勇功を稱美しければ木造方にも氏郷が情を厚く感じたり此後は雙方とも足輕せり合の  
 みにてはかしく合戦もなかりしに程なく信雄秀吉和睦と、のひしかば木造左衛門佐長  
 政も戸木城を開渡し尾張へ引取しが後に長政は岐阜中納言秀信卿(三法師九事)よ仕へ其後  
 終に福嶋左衛門太夫正則が家人とありしとぞ(柏崎物語浦生軍記氏郷記北畠系圖)  
 信雄秀吉和睦付於義丸君上洛の事  
 羽柴幸相秀吉卿濃州大垣の城に日數を重ねられしが富田平左衛門知信津田隼人信重兩人を  
 召て秀吉寒微の身を以て今かく天下兵馬の權を掌に取りし事全く藩主右大臣家の御恩に

よる所各兼て知れる所あり依て叛賊明智光秀を誅し舊主の讐を報ひ舊主の黄泉の幽憤を  
 安じ奉れり然るに信雄信孝の御兄弟ともに讒臣の詞を信用有てや、ともすれば無罪の秀吉  
 を讐とし討亡さんと結構せらるゝ事尤不慮の至りて秀吉舊主の御子孫に弓引心なしとい  
 へども一日の災難を避んが爲不得止事幸猶に及ぶ事實に本意にわらず汝等兩人信雄方へ参  
 り秀吉さらく不忠不義の思慮なき旨説諭して和睦を斗らふべしと命じければ平右衛門も  
 隼人も大に感じ涙を流し相公の寛仁大度天下泰平の基此上やいべきと大に驚き悦びいそぎ  
 信雄の方へ参り土方勘兵衛足達清左衛門に其趣を申入ける信雄此頃軍事に倦怠して心煩  
 いしける折うら故徳川家へ議せらるゝにも不及早速同意の返答あり神君の此事さらにも  
 し召さぬべ十一月九日再び信雄を援け給へんと清洲迄御出馬有りし時酒井左衛門尉忠次清  
 洲にありて此事聞付大に驚き神君へかくと申上る信雄よりも秀吉より請により和睦の返答  
 せし趣を告らる神君夫の重疊の事天下万民の悦えと答給ひて直に岡崎へ御馬を納られ石  
 川伯耆守敷正を御使にて信雄へも秀吉へも賀詞を仰遣ひさる同十一日桑名の西矢田河原に  
 於て信雄秀吉和睦の對面あり秀吉砂上に膝を屈し平伏し今日再度天日を拜して此恩を忘る

べからずと謝して真劍を献じ其上信雄頻りに懇望により犬山の城を返し秀吉の尾張表の國  
 務軍政どもを堀尾茂介吉晴一柳市助直末等に下知ありて大坂に歸られたり其十二日秀吉の  
 從三位權大納言に昇られけり秀吉既に信雄との和睦をどのへられしが徳川家と和睦せん  
 事を懇望し津田隼人富田左近將監を以て信雄方へ申されしに秀吉徳川家へ對し聊遺憾な  
 し信雄の計らひを以て徳川と和睦わらば尤大慶たるべしとの事あれば信雄よりも瀧川三  
 郎兵衛を津田富田に備へて濱松へ参らせ和睦の事を請れける神君御一門譜代の重臣等を召  
 て此事如何と議せられたり諸人いまだ一言も詞を發せざる所に石川伯耆守内々秀吉へ志  
 を通じけれり一番に進み出常時秀吉武威天下を并呑せんと其上北に上杉東に北條皆大敵  
 之三面に敵を受られん事危といふべし秀吉より和睦を申入るゝころ大幸あれ速に御和  
 睦ありていはい御家長久の基たるべしと申神君大に怒らせ給ひ我秀吉が猛威を恐れて汝等  
 ど願するにはわらずと宣ひ返事もわらざれば津田富田瀧川三人の空しく立歸る秀吉の信雄  
 どわらたに和睦し夫より徳川家をも直に旗下を引付んと思ひしに思ひ外の事にて甚心を  
 惱し種々ど工夫をこらされけるが其後又信雄へ申送かれしに秀吉事今に於て一子なし願ひ

く徳川殿の子一人才兩家縁を結ば、永く天下の爲ならん。此事厚く斗らひ給へど、けり信雄領掌して十二月十四日みづから濱松へ参り秀吉の御子一人養君として兩家の親を結び、あつて天下泰平の爲ならんと願ふ信雄が身に於ても何事か是にまかんとこころも、事尤も神君も天下の爲とあらんに、いかでいなみすへきと仰有て異父同母の御弟三郎四郎定勝をのほせ給ふべしと仰られしに御母君(佛通院殿の事)さきに定勝か兄源三郎康俊を人質として今川家へ遣りされ甲州のさらはれとあり、僅にまぬかれて歸りしかども夫より廣人となり世を早ふしぬ今の定勝のみの樂しみあり他國へ遣りさん事思ひもよらずとゆるし給ひぬ。がせん方多く於義丸殿をのほせらるべきに定り給ふ今年御歸國に十二にあらせ給ふ御送り石川伯耆守参り御供に、伯耆守子勝千代本多作左衛門子仙千代(後後守成重)成瀬康六小栗大六高力與三郎牧野主殿等をつかはし給ふ秀吉大方あらす十二月の末於義丸殿元服の式行はれ羽柴三河守秀康と名のらせ河内國にて賄料一万石まいらせ深く奔走せられける(柏崎物備藩譜編年)

佐々成政雪中渡松懸橋の事

越中の佐々内藏助成政の兼て秀吉其中快からずさきにも信孝柴田勝家等に一味せしが今度も又無三の信雄方にて秀吉と敵の色を顯し前田又左衛門利家と取あひ末森島越前共利伽羅今石動河尻荒山等に於て合戦止時なし成政心に思ひける信雄關將にして軍議するも益有べからず遠州濱松へ立越て徳川殿へ参り軍事を議せばやと思ひ立霜月十六日北國筋は雪深く雙方弓矢も取難し此際を伺ひ立越ばやと思雪をも厭はず越中富山の城を出て更々越といへる險難の山路を踏分け急ぎたり從者共は是は何方へ思ひ立給ふにや覺束なことを問ければ成政聞て我は遠州に立越へて徳川家に對面し軍議を定め秀吉を誅し信雄を天下の武將と仰がせ故右大臣家の厚恩に報ひ奉らんと思ふ。此事汝等にとくより知らせ度思ひしかども、謀のめれん事を恐るも前田利家聞付は早速兵を出し妨をなすならん今富山を出しより十日餘りも隔たれば利家が方へ渡聞ゆべき様もあし夫故かぬて我病のよしを披露し置たれば利家も聞ども其虚實を伺はんとするに五六日は歴へしよや其實を探り得たりとも夫より軍勢催促に又五六日も過べし兎角する間廿日斗かゝるべし我遠州へ往還廿日の間には歸國すべしと斗り廿日の間は病氣と稱し伽の者五六人給仕の小姓十人のみに此

謀を告て起請を書せ朝夕常の如く配膳せしむかく密々斗りたる事なれば一刻も早く急げ  
 やとて雪にあつまぬ若者共百人に櫓を押させ大山の峯に登り彼方此方とたどりて冬の日程  
 むく暮ぬれば一夜を明さん宿もあく木の玉岩の淵に立よりても袖打拂ひ兼じ大雪に火はな  
 し手足かゝまり四体凍て其艱難詞に述難も南方を見やがたれば山麓に里ありと覺へて火影  
 はのかに打焼柴の煙絶くに見へければ其煙を自わてに足にまかせて下りける麓の里にいた  
 り柴人の家に立入りければ家の主は大に驚き喚ぐ建部兵庫詞を和らげ少しも驚ぐべからず  
 是は越中より信州深志へ通ふ旅人あるががゝる大雪に道踏迷ひ此所に至りし宿をかき道  
 をも案内頼むとて金銀をあたへぬれば柴人大に悦び何かあそ食物を供給し道案内をなさに  
 ける高山せば十一月の十六日に立出師走の朔日上諏訪へ着す此所の領主諏訪安藝守頼忠驛  
 書を馳て濱松へ其由注進すれば濱松より早速乗馬五十疋駄馬百疋を駿州へ遣はし迎へ給へ  
 ば成政主従大に悦び遠州へ赴き四日濱松に着ければ大久保七郎右衛門忠世が家に迎入て饗  
 應あり翌五日に城中に召て御對面あり成政予けるは今度齋君信長の舊好を思召捨給はず聞  
 弱の信雄を救はせ給ふ事天下擧て感じ奉る所之猶此上織田家天下統一統いたしは様願ひ參り

するとの旨なれば神君聞給ひ道路大雪を分てよくころ來られたれ我秀吉と 聊怨みし信雄  
 の願みもたしがたく我命を忘れて加勢せしといへどもはや信雄秀吉和睦有りの上は我より  
 軍をもこと秀吉と干才を動すべきにわらず其方事思ひ立事あらば随分加勢すべしと仰けれ  
 ば成政 本しと謝し奉る其後徳川殿は三邊の外駿甲信を領し給へば信玄が勢に倍せらる成  
 政越中を領すれば謙信に似たり公成政と御同意あるに於ては信玄謙信一味せしに同じ天下  
 を横行せん忍るゝに足らずと高言吐て辭謝し夫より尾州滑洲に赴き信雄に賜て今度秀吉  
 と和睦し給ふ事以外の外然るべからず全く彼が姦計に陥り給ふといふべし來春は徳川殿を御  
 頼み大坂へ打て上らせ給ふべし御一左右次第成政事も北國を攻登るべしと諫けれども信雄  
 さらに諫を用ひらるゝ様にもあらざれば然らば春を待て重ねて議し決べしと暇請じ又深山  
 の大雪を分て越中へ歸るとて  
 何事もかはりはてたる世の中を  
 知らずや雪のじろくふるらん  
 かく口吟けるぞやされど信雄は秀吉と和睦ありてさらば他慮なかりし成政が苦心もむさ

しくなりぬ(柏崎物語編年)

秀吉根來雜賀四國征伐の事

天正十三年乙酉三月十日秀吉ハ從三位權大納言より正二位内大臣に昇らる是ハ仙洞造營の賞と聞へける(公卿補任)其頃北畠中將信雄も權大納言に昇進せられ羽柴の威名の益々海内にかいやり去年長湫合戦の始より神君ハ紀州雜賀の者共同畠山左衛門佐貞政(左衛門督昭高子實同政尙子爲昭高子)四國の長曾我部土佐守元親に牒し合せ小牧山對陣最中大坂へ亂入せしめんと計らはせ給ひければ畠山の紀州雜賀并根來傳法院衆徒をかたむひ長曾我部の四國の海賊を引具して既に大坂を襲んとせしを其旨渡邊和泉江島太左衛門使者とし徳川家へ長曾我部より告奉る其時秀吉信雄の和睦ありし後されハ神君聞召秀吉鬼神かりとも東西よりさしはさみ討つ時の攻下べき物を和睦の後されハ残念あり今少し早ければよかりしよ今と成りてハせん方さとして元親ハ御書を賜り兩人の便を歸されければ畠山も長曾我部も大に望を失ひけり秀吉徳川家御和睦も思ふ儘にあらす然らば今年紀州根來雜賀の者どもを踏潰し四國を平均して後又はからざる旨有べしと計を決し三月廿一日紀州發向せんと大

軍を催して三月廿二日出軍せられ平押に紀州へ亂入せられけり根來山の衆徒にハあらかじめ是を防がんと漢澤田中畑積善寺赤堀寺といふ所に駐をかまへて雜賀の者共をかたむひ中にも積善寺には二重三重に堀をほりまはし山原右京山田天知坊根來大膳三位坊太夫坊長橋の小地坊智明院西藏院長壽院正徳院近來忠次郎熊取坊をはじめ屈竟の壯士三百六十人根來より來る者を合せて九千五百人其外高井に二百人畑中に千五百人澤村に六千人橋籠り防禦の用意せり秀吉公は三月廿三日舍弟秀長並三好秀次をして千石堀にむかはせ長岡興一郎忠興稻葉彦六典通筒井大谷等を積善寺に向はせ油生忠三郎氏郷中川藤兵衛秀政高山南坊友禰等を漢澤へ向はせ長谷川藤五郎秀一堀久太郎秀政一万五千の人数にて根來にむかはせらる秀一秀政諸勢を下知し根來寺に攻め入る所千石堀に籠りし愛染院福永院等五百餘人を引つれ横を打んとす秀次田中久兵衛をして秀政を救はしむ筒井長谷川同く馳來て敵を追拂ひつゝいて千石堀積善寺を短兵急に攻立る孰も堀は深し城中の矢炮はしげし奇手大に攻めあみしに筒井火箭をしきりに城中へ打入る其火箭橋の上の火藥箱に燃へ付城中忽に火になれば城内の僧侶防禦の術を失ひ思ひくりに逃出る千石堀積善寺陥りければ其餘皆々の兵士



共皆落失たり秀吉公は思ふまゝに諸所枝城を攻落され廿三日根來山を燒拂ひさしる一乘山根來寺は覺鑿上人開山このかた四百四十餘年の福地一朝の煙と化し堂塔伽藍悉く焦土となる傳法院のみ不思議に火煙の中に残りしをば此後秀吉京へ引取て南禪寺へ寄附せられしとぞ一山の衆徒たゞく討殘されしは伊勢の祠官を頼み立廻しもあり其中にも愛染院等は遠州濱松へ逃來り成瀬吉右衛門に便りて御扶助を得たり後に此徒を根來組として御先手又加へらる今御旗本に根來の氏族あるは皆此輩の後葉なりとぞさて秀吉公は直に大軍をすめめ雜賀へ向はれければ其威に恐れ雜賀孫一重秀はじめ悉く降人に出しかば本領を安堵せしむ廿四日白檜より北雜賀太田といふ者嶮阻に地の要害をまめて四國へ内通するよし注進すれば數萬の人数を命じ堤を急に築りせ水攻にせらる北雜賀の徒うなひがたく是も降參すれば其酋長五十人太田の郷にて磔にかけて其餘の皆ゆるさる又中村孫平次一氏仙石權兵衛秀久九鬼大隅守嘉隆等を大将として熊野を征伐せしむ湯川庄司山木庄司等皆誅せられ玉置庄司神保式部堀内安房氏房等のゆるされ本宮新宮那知千津川湯川等皆平均しければ秀長に紀伊和泉兩國を授け紀州の岡山を以て居城とせしめんとて新に城を築りしめらる高野山

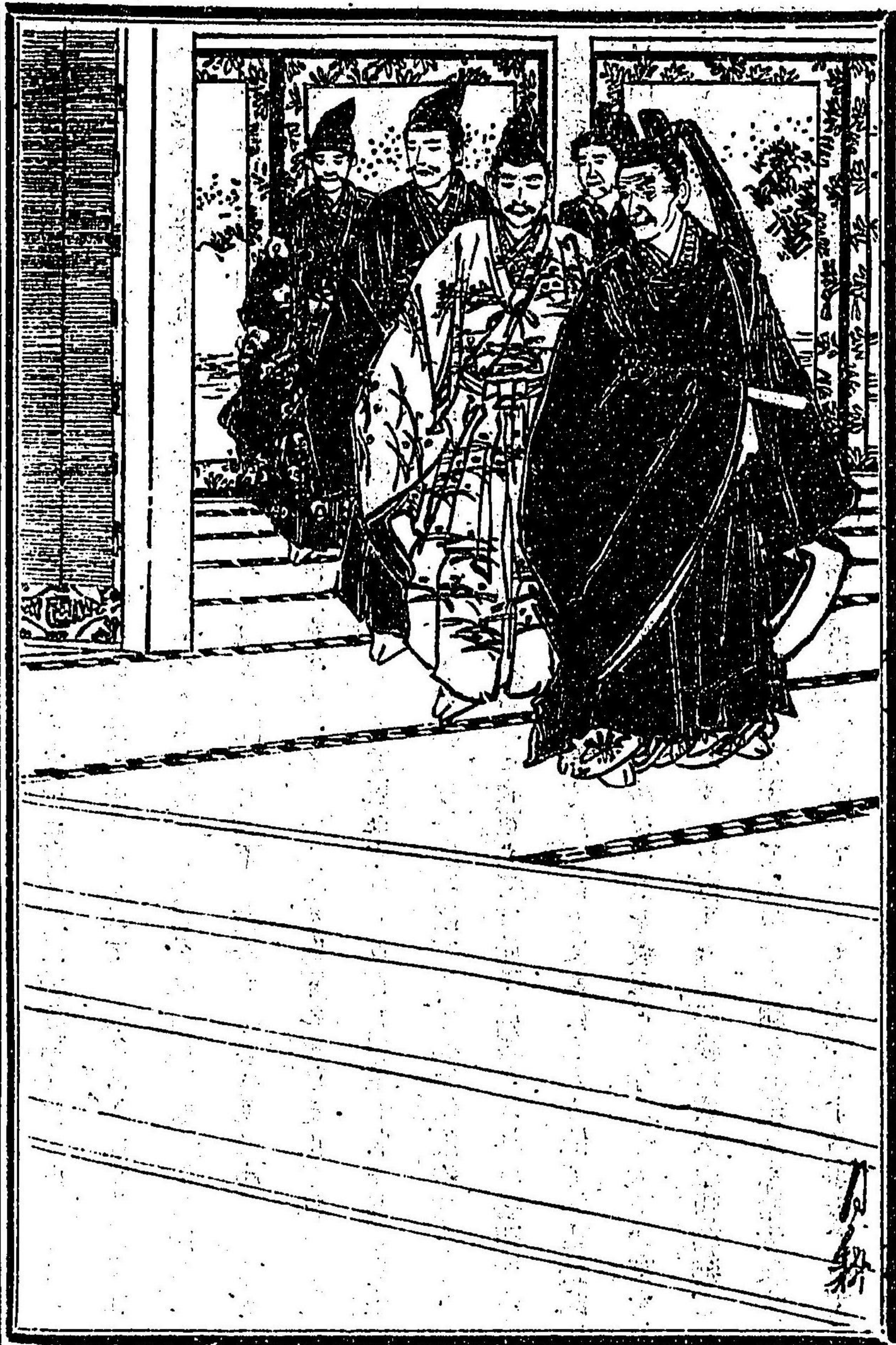
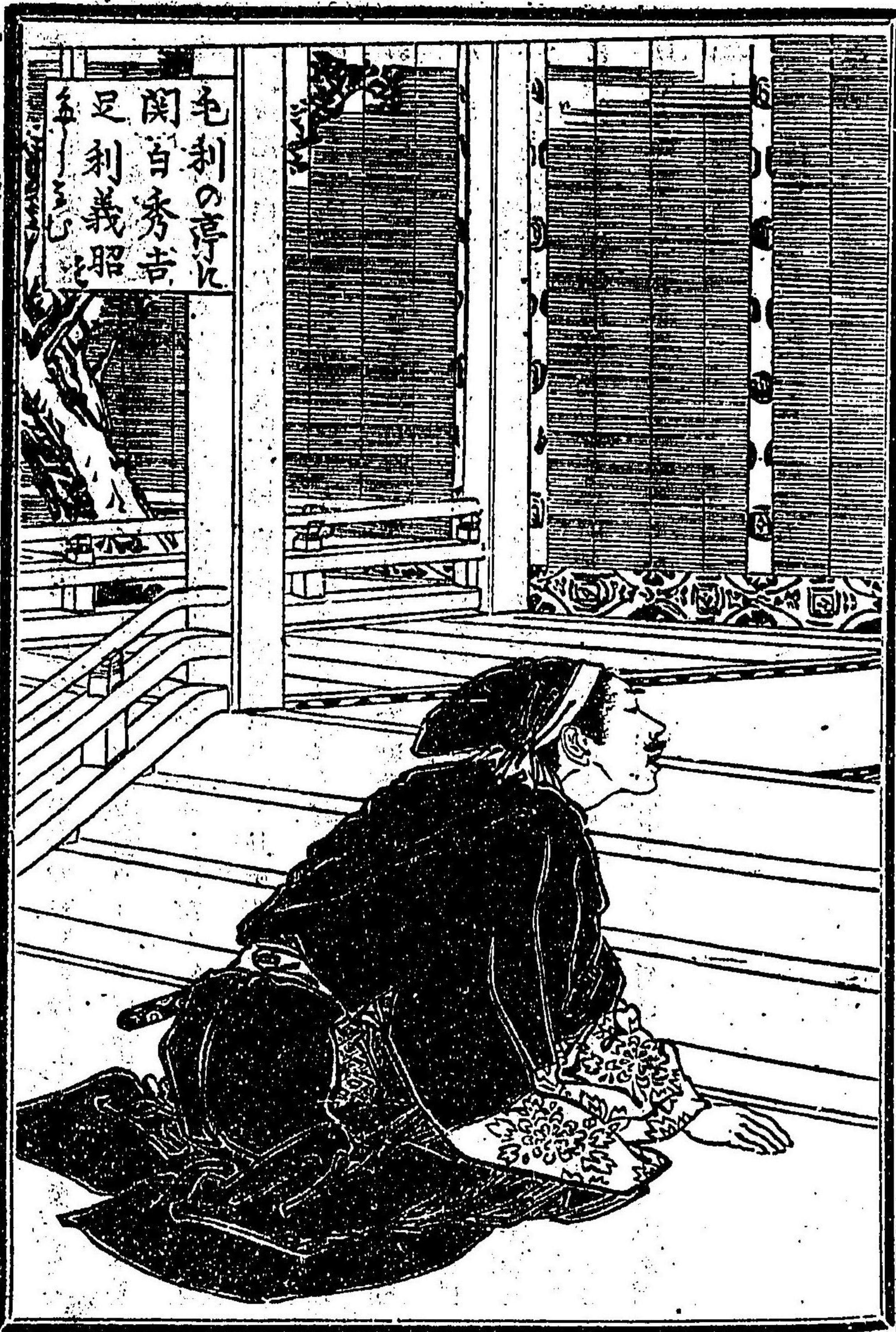
の衆徒根來寺と不快され根來の徒とい一味せず秀吉公使を以て昔よりの舊領の其儘たるべし近來押領せし地の返納すべし高野衆徒兵杖を帶し亂妨を事とす尤釋徒の所行にあらざ速に改革せざらんといふ僧辨才あれ此僧を參らせ種々愁訴しけるに秀吉公の旨にうなひ是怖し幸に興山といふ僧辨才あれ此僧を參らせ種々愁訴しけるに秀吉公の旨にうなひ是より寺領一萬石を安堵せしめられ高野の彌富饒布金の福田と繁榮と興山上人への別に寺を營造し興山寺と稱し寵遇限りなし此後秀吉公の四國を征伐せしめかなふまじと五月秀長秀次を大将として六万餘騎を發向せしむ先阿波の國へ押渡り長曾我部新右衛門が精籠りたる和氣の城に攻り入る新右衛門防かねて降參しければ長曾我部元親が弟香曾我部親安が籠りたる一宮の城をかこみ攻るゝ親安もうなひ難く城をすて、土州へ引取れば京勢益進んで桑名左衛門が籠りたる木津の城に攻よする左衛門防戰術を盡すといへども大軍よかこまれ終にかまらず風雨烈き夜に紛れ落去ぬ長曾我部元親防戰かなふべからずと降參しければ四國も一圓平均す依て勘賞行われ土佐の長曾我部が本國なれば安堵せしめられ阿波の蜂須賀修理太夫正勝同小六家政父子内一萬石十河民部大輔政保(一説に三好正安)伊豫の福島

左衛門太夫正則戸田民部少輔内一万四千石久留島助兵衛に授けらる豫州阿野をいじめ近  
來長曾我部がために攻劫され降参せし徒は皆追放たる今の秀吉公の威勢四國迄もあびく  
所徳川家のみ和睦の事も沙汰なれば定めて此上の秀吉怒り給ひ駿遠三へ戈子を動かし給  
へんと皆人思ひの外更に其沙汰もなし却て北國を攻給へんと川意あればいつれも秀吉公  
の大度濶達凡慮の及ばざる所不思議ありと世の中に沙汰しける(豊臣家譜編年柏崎物語土  
佐軍記)

秀吉公將軍職懸留付關白宣下の事

古今治亂興廢の天運のしからしむる所といへども應仁文明の頃足利將軍天下の兵權を失  
れしよりこのかた王威全く地に墜ち武命又衰絶し強弱を併せ衆寡を吞み臣の君を弑し  
子の父を害し人倫の大綱荒敗して天道なきにひとし東西南北の諸大名各其國々を割據し更  
に朝憲を恐れず地を争ひ國を侵し攻戰日々止時なし壞亂の甚じき事爰に極りぬ然るも當時  
内大臣秀吉公草間英雄を生し其身草履手に取し奴僕より出て舊主織田殿の讐を報じ忽に飛  
龍の雲を得たる猛威四方にかいやく山城大和河内和泉より東海道へ伊賀伊勢志摩尾張東山

の近江美濃山陽の播磨北陸の加賀越前若狹能登南海の紀伊淡路阿波讃岐伊豫土佐迄も切な  
びけ西の因幡伯耆備中安藝周防長門隱岐出雲石見に攝津をかけて毛利の所領備前備後美作  
の宇喜多八郎秀家九州の大友管領するといへども是等の皆秀吉公威名に衣服して歸陣せし  
上の陸州の嶋津和州の北條越中の佐々成政等を征伐し天下一統の大功を成就せんと計策を  
めぐらさる今其身内大臣正二位の高位高官にのぼるといへども將軍の重任を得ざれば武門  
の模範とするに足らずいづて將軍の宣旨蒙らばやと思ひ立れしうと其頃足利將軍義昭卿衰  
微せしといへどもいまた世にながらへ毛利家を頼み今一度歸洛有て足利家恢復の功をなさ  
ばやと思慮をめぐらされければ近年毛利も秀吉公と和親して其旗下に属しければ義昭卿の  
本意を達し難く落髮して建陽院昌山と改め猶ほ毛利方に寄宿しておはしたり依て秀吉公此  
昌山をかたらし其を養子として將軍職を譲り給へらんに公を義父とし今より天下の富を  
以て養ひ参らせなんぞ請れたるに昌山領掌せられず抑征夷將軍の職の右大臣頼朝卿と  
のかた頼家實朝をへて頼經頼朝二代宗尊親王以下親王にて此職を繼給ひ其後當家贈太政大  
臣尊氏公より義昭にいたつて十五代清和源氏正統と傳へてあへて他家競望する事あたはず



いうに足利家衰廢の時いたりても義昭一身の安富を求めたため數世傳へし重職をもつて氏も姓名なき卑賤の奴隸に譲り先祖の芳躰を汚さんやと返答ありしうへ秀吉公盛を失ひ本意なく思ひれ此事いかいすべきと判亭右大臣晴季公に議せられたり判亭殿の無二の知音なりければ凡關白といへる人臣の極官にして尊貴あへて比肩すべき者あし二天の倚頼四海の景仰する所將軍より遙に越たり幸に今此職其人なし關白は身て四向を統御せられなば誰か其命に違ふべきとて勤められしうへ秀吉大に悦給ひやきて七月十一日に關白宣下あり今の舍弟秀長も大納言稻子の秀次も中納言にのぼり秀康も從四位下左近衛少將に叙任せられ一門の月卿雲客引具して拜賀の參内あり京極黃門定家卿の御前も今集を通訳し給ふ敵威とに淺からず其後關白殿毛利が亭へ應駕ありし時昌山を能く呼上せを對面あり上殿より遙に見やり將軍く我を如何とやされしかば昌山の庭上に稽顙してぞ附せられける(豊臣家譜編年柏崎物語)

佐々降參丹羽削封付關白家五奉行の事

今年八月六日關白秀吉公越前加賀能登の軍勢を先鋒として佐々内藏助成政を攻亡せと越中

富山に發向せらる先鋒の大將の前田又左衛門利家其子利長之佐々が方にも兼て期したる事故俱利伽羅峠の左右に卅六ヶ所の砦を築き越中富山其外木船森山益山等にも城堅固に築き防戦せんと用意をすされども關白家の惣勢の十方餘騎高山深谷の隔もあく平押にあし入て成政が本城富山を攻めこむ事稻麻竹草の如く其餘枝城砦も大勢を分て攻立る城兵矢炮をばけしく放ち或り切て出突て出寄手若干討取といへども寄手の大軍にて新手を入替ふひた攻にこそせめにけれ成政心剛あれども援兵の頼みありし枝城砦も皆陥り本城の晝夜の苦戦に將卒皆疲れ勢力盡果詮方なく成政剃髮して關白の本陣へ降人に出る秀吉忽ち是を赦し成政をばく叛くといへども舊主信長公へ年頃忠勤し其上今度も信雄へ志を立し所の罪すべからずとて富山其外領地の没入すといへども猶越中の内新川一郡を授らるこれより先に丹羽五郎左衛門長秀の當年五十一歳年來積聚の病に悩み苦痛に堪兼しかかてり世にながらへん事詮なしとて看侍の者の隙をうかひ短刀にて腹を突て死たり依て火葬せんと茶吽したるに彼積聚と見へ大きき拳程にて其かたち石龜に類して喙の尖り曲て鷹のとき怪物灰の中より出たり其背の上に彼刀痕あり秀吉公此沙汰聞給ひ召寄で見給ふ所人の詞に少し

も進ず是の賊に奇物之醫家に傳て後に考證ともあるべしとて其怪物を竹田法印に授られしといへり長秀が子長重時に十五歳父が名を襲て五郎左衛門と稱す今度富山の寄手の中に加へらる然るに長重が家人に成田八郎と云者あり傍輩を集め織けるの故長秀殿の織田家隨一の宿老にわたらせられ武功世に隠なき御方成し秀吉といふ無道人にかたられ其姦計に陥て秀吉實に三法師殿を輔佐する事と思ひ給ひしが秀吉三法師殿の御爲かりと偽り三七殿失ひ参らせ又信雄卿を亡し奉らんとし終に天下の權をみづから執事殘念に思ひ給ひ自殺し給ひし事長秀殿一生の不覺にはあらずされ天の時失ひやすし丹羽家の勢散失さらん内に今度秀吉が越中に攻入ん頃をりり常家義兵をわけ佐々成政と謀を合せ前後よりさしはさみ討んに難き事あらじと首離々も尤どの聞かざら是以の外大事なれば長詮議に日數を送る間に丹羽が家人ども關白の本陣に返忠の者有て此隱謀露顯し成田の速に死刑に處せられ返り忠せし丹羽が家人長東大藏大輔村口周防守瀧口伯耆守青山修理亮青木民部少輔戸田武藏守寺田下野守上田左太郎奥山雅樂助等のみも關白の御家人に召出されぬ程あく佐々も降参しければ丹羽五郎左衛門長重も父長秀の遺領越前加賀の國々奪ひ取てわづかに若狹

一國を給ふ關白の石田治部少輔三成木村彌一右衛門秀俊只二騎雜兵わづかに三十八人を具し越後國落水の城にいたり上杉景勝に對面せんと宣ふ景勝が家人須賀修理等秀吉を討取ん事難かるべからずとやけるを景勝いや秀吉事景勝がまさき舉動すまじきを知て天下の權掌る大切の身を持て愛に来る彼を今やみくと討ん事景勝が年頃正路に取たる弓矢を汚るに似たりいでて參會せんと其時の越後越中の境厭川に陣したるが直江山城守藤田能登守泉澤河内守安田筑前守を始とし待合せて十二騎雜兵六十餘人にて落水の城に來り觸見し戦し合せらるゝ事二時計り其時關白の方には石田一人景勝が側に入り直江一人侍座しける(後年關ヶ原一亂石田と直江が結構は是を張本とす)密議終て關白は直に富山の城を歸り給ふ(藩譜に外山の軍を四月とし景勝と會盟を五月十三日とし其他の皆八月とす)前田利家父子今度先鋒の功を賞し越中國三郡割て給ひ一兩年の後には子息利長の所領にすべしと仰下さる又金森五郎八長近に飛騨國を攻させ國司柿小路左京大夫頼綱を亡しければ飛騨を長近に給ふかくて關白降洛せられこの頃の關白家に五人の奉行を定めらる淺野彈正少將長政増田右衛門尉長盛石田治部少輔三成長東大藏大輔政家大谷刑部少輔吉繼是を五奉行と號し夫

下大小の政務を沙汰せしめ前田徳善院を以て所司代とし洛中洛外の雜事神社佛閣の事を掌らしむ(豐臣家譜繪)

眞田叛逆上田軍の事

眞田安房守昌幸の彈正幸隆が子にて兄源太左衛門信綱の天正三年長篠の軍に戦死す昌幸其始武藤喜兵衛と稱せしが兄が家繼て安房守と改む幼稚の其昔より武田信玄勝頼三代に仕へ合戦の間に年をかさぬ尤謀略に長じたり然れども其人となり權謀詐謀を是として仁義の道ある事を知らず武田亡て後織田家に志たがひ織田殿横死の後の上杉に屬し又北條にたより又徳川家に降参しひそかに志を秀吉公に通ず其反覆常なき事是より甚しきなり且中州の危険なる事孟門太行の艱難に超たり徳川家の北條氏直と和睦の時上州の北條の所領とし信州佐久郡の徳川家へ参らすべしとて盟約ありしかるに北條の既に佐久郡を参らせし上州の中にも沼田の眞田が所領にていまだ北條へ渡されず北條よりの早く上州沼田を請取たしと催促類なき依て眞田へ早々沼田を北條へ渡さるべし替地の後日に賜わらんと言ふに昌幸返答に我等沼田の所領の某が武功にて切取たる地にて徳川殿より賜わらんと言ふに地にあらず前年

氏直と甲州御對陣の時昌幸身命にかへて御味方に参り軍忠を盡せしに僅に上田一城を賜ひりしのみにて恩賞の湖をいぶかる然るを今何の罪ありて沼田を北條へ奪はるべき更に覺悟に及ばざる所とといひ切て頓て大坂へ飛脚を以て其旨を送り永く關白家の被官たらんといふ事を上杉景勝が家人須田相模崎津淡路にたより懇訴しければ關白大に悦給ひ眞田微勢たるべし上杉より加勢を遣はし救はるべき旨密旨を景勝に仰下されたり此事徳川家へ聞へしかるに神君彼が所領替地を賜はるべき旨仰下されしを心うく思ひ幾度も當家へこそ懇訴すべきを捨ち秀吉へ降参する事尤も出事の急き其罪を糾ての置へからずとて大久保七郎有衛門忠世島居彦右衛門元忠平岩七之助親吉を大將とし松平修理亮康國岡部源次郎長盛諏訪小太郎頼永保科越前守正直三枝平右衛門昌吉屋代左衛門勝永城和泉昌茂小笠原掃部太夫松岡刑部下條伊豆會根下野知久與左衛門春日河内遠山兵部大章帶刀駒井右京相川主馬小池筑前今福和泉塚根監物武川兼盛光寺等都合其騎七千余騎に柴田七九郎康忠をも差添へ給ひ眞田が信州上田の城を攻潰せし仰を蒙り閏八月二日信濃上田へ發向す上杉景勝の河田攝津本庄豊前安田上總に川中嶋衆六千五百餘人眞田が加勢として密に上田に参着し先月十七日

り徳川勢寄るを避しと待受安房守昌幸の兼ての軍器智謀をめぐらしける寄手の大将大久保平岩島居柴田等のかゝる事どの夢にも知らず上田へ着陣すると其儘真田方へ使を立てて徳川殿不禮の返答を怒らせ給ひ我々を討手に向給ふ只今にも昌幸先非を悔み罪を謝し無二の忠勤を致さば御宥免あるべしと申送らる昌幸使者に對し謹んで答けるの田舎武士禮法を知らず無禮の返答その罪實に忍入し此土城を各へ渡し差上へし寛仁の御沙汰を以て昌幸御宥免の事偏に希奉ると申て一族海野三郎右衛門を添て使者と共に寄手の陣へ遣りし去るがら三日の間の御待下さるべし城中掃除をして渡し參らせんといひせければ大久保島居平岩等左こそ有べけれ尤なりとて三日の間待けるに真田又使を以て寄手へ申させけるの城内掃除の既に相濟し得共家人共の妻子路頭に迷はせん事安房が生涯の恥辱之何方へ成とも安堵いはん様引取せ度いとも御芳情に又三日御待下さるべしと申送る寄手は是を計畧とも心付ず郎等を愛憐する志尤と承届又三日の間うらくと野陣して待居たり此昌幸武田信玄の方にてても譽を得たる軍慮の老功今の關白秀吉公を後楯とし上杉景勝が加勢を頼み防戦の用意手強く設け徳川勢の鎗先を一當めてんと心に笑を含みしに折しも天少し曇り

夜明ても猶晴やらす凡信州にての里に雨のふらぬ時奥山必雨ふる事あり是を嚴雲と名づく然れば其日の時氣晝時に城下の千曲川の支流加賀川(一本神川)に洪水來るべし天の時を得たりと大に悦び又寄手の陣へ使を遣はしいはせけるの先日申送り如く家中の妻子共安堵させたく方うへ頼み遣はしし得とも徳川殿の御敵なりとて快く請取者更になし今の力なく主從城を枕に討死仕るべく志を決しいへば各方御手柄次第御攻なされ御覽いへど其使者馬に乗ながら高聲に呼はり逃足出し忽に逃歸る正直一遍武勇凝たる大久保島居平岩柴田等真田によく計られて今日の覺たる様にありて大に驚き怒り憎き叛賊真田め其使者討殺せどひしめき罵るといへども更甲斐ぞき諸將大に恥怒りさらば一時に城を乗取んと軍譏の沙汰にも及ばず前後の陣の差別もなく我々とらじと馳出るを見て城内より足輕少く出し鉄砲を打かくるを寄手十分に怒つて物の數どもせず追立追かけ城近くすむ所爰に小河有て急流あるれども寄手何かの猶豫せん真一文字に大手の町口を乗入たり此時城より時田出羽守高月備中四百餘人にて馳出少し戦て逃馳る大久保島居扱こそ敵の騎兵ぞと彌追立て攻入て町口ニヶ所攻破る真田が謀略よ小路のままりよき所に設廠を懸置其邊に色よき小袖

織物帯のるる金銀時給の器物を引ちらし置たり寄手の輕卒ども是を見るより弓鉄砲を捨て其衣類器物を争ひ取る諸將制すといへども更に聞入ず其時喰違の投籠の陰より鉄砲雨の如く打出す寄手の輕卒忽に千人餘打殺さる諸將此町筋を放火せんといふ柴田七九郎火をかけたらば味方途を失ふべしと制す本丸には上杉の加勢を籠置昌幸の二男源三郎幸村ととも軍勢引まどめ二丸の武者屯に床机にかゝり居たお所に追々寄手二丸近く攻込たる注進われ昌幸までまへしと昌幸も源三郎并來福寺と三人湯濱をゆるくまため諸勢よも兵糧つうりせ終り時分の能事と馬引よするといひとくひたくと打乗り昌幸采配取つて城門開かせ突て出首の取に及ばず只驅立よと下知し惣勢圍の聲を發し縦横に突て廻る寄手の諸將もこゝを專途と下知すといへども先手散々突立られ小路の狭し進退途を失ふ所に眞田の相圖の小旗を段々ふるとひとしく砥波の城より嫡子源次郎信幸矢澤の城より長臣矢澤但馬五百人づゝ引つれて海野平に押出し寄手の後を取切らんと備を廻すを見て寄手の勢をわけて前後の敵にあたらんとすれば眞田のかねて謀をめぐらし小野山大間村邊に伏置たる郷人三千計り圍の聲をあけ鉄砲をつるへ懸る寄手心の矢猛にはやれども三方の敵を防兼一同とつ

と川原表へ敗軍す城兵勝に乗じて追討する程に三河士究竟の者どもこゝにて討死する者三百五十余人大久保島居平岩岡部等踏留り苦戦して味方の諸勢引取らんとす大久保が家人本多主水平岩が家人尾崎左門兄弟三人後殿して働し尾崎の兄弟どもに討れたり酒井與九郎重頼取て返し尾崎を討し敵を突殺し首を取る今日味方にて首取し與九郎只一人之平岩が備と甲州先方衆の備のさのみ亂れざりし所に上杉の加勢大岡彌九郎嶋津月下齋五百余騎横より討てうゝれは是も散々に破れ右往左往に散亂する中に小見孫七郎只一人引返し討死す乙部藤吉高木主水の弓畔柳係左衛門今村傳四郎の鉄砲にて敵を防ぐに敵五百人にて高木を突立て既に危く見へしと今村畔柳鉄砲にて其敵を打拂ひやらしく諸勢加賀村まで引取る所に昌幸兼ての察し時刻違はず深山より洪水一面におし來れば三河勢爰に溺死するもの若干され寄手今の通れぬ所と心を決し川岸より取て返す一回打てかゝれば眞田勢追返され味方少し色を直す所眞田が勢の中より望月主水きたなと返せと大音あげて又取て返しもみ立れば寄手又退立られ敗走す大久保忠世の散亂せし殘兵を集んと吉田の岱に馬を留め旗差物を押立る弟平助忠政(彦左衛門の事)一番に馳寄たり黒糸の具足着たる敵一人平助を目掛



て追來るを平助たぢまぢつたは忽たちまち突倒す大久保が兵忠世が旗差物を見て追は馳集る此時忠世兄弟の士卒百人ばかり集り加賀川を隔へたてて陣を取る眞田が家人日置五右衛門味方に紛れ居たるを平助見て其三巻をせざるの味方にあらざる討と下知す足達善一郎政定まさたか（基業大河内善一郎とす今の大成記に従ふ）心得たりと走りかゝり突けるが日置が鞍くらの前輪まわふあたり日置が從者來て足達を突つ平助走りかゝり日置を目掛て突つんとする鎧よろいを日置が從者四五人走隔へたり鎧四五本にて平助が鎧よろいをからみ落おと日置其ひきま虎口こらを遁れ馳は抜はて行所を氣多甚六追おさまに突つしが日置が脇腰わきこしをぬすられ其儘逸足山もて眞田が備に歸りけり岡部彌次郎松平修理亮天野金太夫小笠原越中波切孫七郎等踏留ふみどめりきびしく戰て味方を引取らしむ大久保忠世此時平岩が陣所に馳來り眞田川向の岸に陣取たり手の者共の追討に馳は回り本陣の備まばら之是を討ば皆殺すべしといふ平岩の眞田が謀客はかりやくわれバ猶所々伏兵有べしとて同意せず鳥居保科にすゝめても返答にも及ばず忠世然らば此川を越す迄もまじ川端迄人數をくり出さるべし我等一手にて追拂おとはんといひすて、歸る所へ平助來り鉄炮を川端へ出し給へと云に忠世物もいわず事ら知行かまといひすて、歸る所へ平助來り鉄炮を川端へ出し給へと云に忠世物もいわず事

をふる平助等をふりての分らずといへば忠世皆みなが腰こしを抜ぬて用立もちだすといへば平助せん方なく戰をやめて本道ほんみちを引返す眞田も是迄とや思ひけんおぼ樂たのしを吹ふて城へ引返せば鳥居平岩を始め將卒しやうそ息いきをつぎ手負ておを助けやうく大間村迄引所一村の樹蔭こかげより眞田が伏兵起り立て櫻井備中足輕は下知し鉄砲雨の如く打めくれバ崩れ立つたる寄手の總勢思ひもよらず此所にも敵何千騎あらんうと臆病神おそに誘こひ立られ人なだれを築はて敗北はす是より本の陣所にもころうね山際近く陣取て今夜又夜討にあらんうと用心計りして寐もやらず是の十八日の事（諸書みあ二日の事とす然れども諸將皆二日に上田へ着陣其後眞田の謀にて日數を歴たれば基業説にて十八日とす）翌十九日（諸書に二日とす前にいふが如し）寄手の諸將等軍議して上田の枝城鞠子を攻んと諸勢を押出す此城を守るの眞田が一族海野三郎右衛門あり寄手の昨日敗北の耻はを清よめんと用心専ら軍令を嚴げんにし隊伍を亂みださず筑摩川を越て八重原に押出す安房守父子上杉の加勢一同に八重原の下を押通り手白塚てしろが（基業にの手に代に作）に出張して寄手の先陣松平康國やすくに諏訪頼水岡部長盛の勢と戦ひす、む大久保忠世其時柴田七九郎康忠を使として鳥居平岩が方へ各急いそぎ筑摩川を越て我等が跡より詰つられ敵の中を取切瀬津原に追上

前後よりかくりて討時の敵を一人も洩す事有まじとす、めけれども鳥居も平岩も真田いかなる奇計有べきも計り難し初度の合戦にも卒爾と懸て大に敗北せり今とばかり敵の變を見らるべしとて従わず忠世大に怒りせめて河川端迄出張せられよ我等の是非一戦せんといひせけれども鳥居の聞て今日真田が勢のみならず上杉が加勢も大勢つゞく様子あり無謀に取かへらば又大敗及ふべしとて用ひず忠世のせん方なく小笠原保科兩將へ脱す、むる所兩將の昨日の戦ひに頼切たる手の者多く討せ疵を負はぬ者なし其上鳥居平岩も出陣おければ我まばかりの出勢仕難しと許容せず忠世益憤りて手勢計り引具して岡部諏訪が跡より忠世兄弟おさじく八重原に押出せしが今日の終日足輕鉄砲の迫合に日を暮し翌廿日に真田父子歩卒にまさされ岡部柴田が陣近く来り下知す大久保忠世見て又平岩鳥居兩將へ使を立て真田父子足輕の中へ入て下知す岡部のはや敵に喰付たり急人数を寄らるべしと申送れども鳥居平岩とも返答もせず時うつる間に岡部彌次郎手勢計りにて終に真田が勢を退却し岡部が兵杉山惣藏近藤内千野十助松平康國が兵近藤三郎四郎等鎧を合せて高名す大久保忠世の鳥居平岩と問答の間に時刻うつりよき圖を外す長盛康國と一所に最前より討てかへらば

真田父子のうち一人の討取べき者をど齒がみをなして憤れどもかひぞなき岡部の今日討取首共を濃松へ献じければ神君甚御感有つて御書を下さる此後の城を速巻し隊伍をどくのへ夜討朝込様くくに手立を替て城兵を驅惱しければ真田も大に退屈し次男源三郎幸村を上杉景勝へ人質に送り出馬を請ふ景勝大に悦び幸村には川中島にて一万石をあたへ其上大勢加勢を遣はす此事濃松へ聞へければ徳川家よりも井伊万千代直政松平周防守康重(康親の子)大須賀五郎左衛門康高牧野右馬允康成菅沼小大膳定利に五千餘騎をそへてつかはさる万千代等一責攻て見んと虚を窺ふといへども真田の上杉景勝が出馬を待て堅く守て兵を動りさず廿日余りを過したり其間、關白秀吉公頼りに景勝へ下知し給へば景勝も大軍を引率し近日上田へ被向せんとす此事濃松へ聞へければ九月廿四日濃松より飛脚を以て寄手の諸將へ早々兵を引揚よと仰下さる依て廿六日の東雲に諸將追々陣拂して引うへす真田が家人根津海野等評定して追討せんとしひしを昌幸制して井伊が手に近藤石見康重が手に岡田竹右衛門皆武功の者共ありわざと引をくれて敵を引付大返して功を顯はさんため戦を待たる様子あり手を出すべからざとて士卒一人も城外へ出さず岡部長盛の味方皆々引取し後進も少も

騒々氣色あく厠に入て時刻をうつし士卒等催促すれども更に急がず厠より出て湯漬を食し  
諸將二里も行し頃を考へ陣屋共を皆焼拂ひ静み引取しを敵味方天晴の後殿と感ぜぬ者いな  
かりけり徳川家よりの眞田が押として大久保忠世を信州小諸に在城せしめ松平康國保科謙  
防屋代下條知久松岡小笠原等の面々の城に有て忠世が下知を守らしめられしとあり(大久  
保物語基業大成記編年)

石川數正岡崎退去付大久保平助小諸留守の事

石川伯耆守數正の徳川家普代の功臣酒井左衛門尉忠次と相並び軍國の政務を掌り其威權  
肩を並らぶる者なし其故に岡崎城を守護し人質を預けるが數正いふなる心にや小牧山御在  
陣の頃よりして内々志を關白秀吉公へ通じけり此事神君御耳にも入しむと數正に於て數代  
の重臣其上常に御眷遇を蒙るとなれば異心いなくべき者ならずとて御疑もあうりしに  
數正の毎度大坂と御和睦を進め奉りしうども御許容さらにはければ近年の内關白大軍にて  
攻下られ其節の大合戦有べし我子勝千代の三河守殿御供して大坂にあれば是を捨殺さん事  
心うしと心中大に腦亂せしに關白の例の離間の謀を専とし親て離の術を巧にせらるゝ事

かれは數正徳川家第一の老臣あり是を味方に引付たらんに計畧を施に便りよしと思われ  
數正が武畧を懸望の襟にみてあこもし徳川家を去て大坂へ歸順せば十萬石を授くべしとて  
招うれし故數正子の恩愛と利慾とに忽義操を變じ不義無道の人とありし人心の利に引れ  
安き習ひ程世に恐ろしき者あり(甲鑑に秀吉數正に八萬石を授んと約ありしとぞ)今  
年十一月十三日妻子家人を携て岡崎城を出奔し大坂へ赴くとて松平五左衛門近正へ家臣  
天野又左衛門を以て同道せんと勸めける五左衛門此時宗家源次郎乘勝幼年ゆへ其家政を沙  
汰してゐたりしが數正が使を追退け我嫡子新次郎一生に乘勝が家士二人添て早速濱松へ其  
事注進し其上新次郎を人質にし給へと申上る神君近政が忠を賞し給ひ人質に及ばずとて  
新次郎に御脇差を下され父が方へ歸し給ふ松平傳三郎重勝も早く注進して御感に預る  
(寛永系圖)松平主殿助家忠の深溝より三里の所を馬に鞭て岡崎に馳至る岡崎にいまだ  
三河士一人も參る者なければ家忠家人を分て城門を警衛す十四日酒井忠次初め追々に群參  
す十六日に神君も岡崎へわたらせ給ひ主殿助が速に馳參り城を守りし功を褒賞して歸し  
給ひ是迄數正所屬八十騎の内藤彌次右衛門家長に屬せらる又信州深志の小笠原右近太夫貞

慶も數正に同意せるにや貞慶が人質をバ數正引つれ大坂へ登りしぐバ其旨小田原の北條氏直へ仰遣ひされ又岡崎城修築を命ぜらるかくて信州小諸に在城したる大久保忠世を急に召し遣ひさる忠世其事承へり某只今爰を捨て歸らば此處に乘じ直田の信玄が庶子海野龍寶といふ盲人を主に取立上杉景勝と牒し合せ甲州へ亂入せんとす然れば此所の留守を命ぜられバ某立退難しとて御使を歸し其後に忠世の所屬の保科諏訪下條大草知久等をも呼集め一族兄弟共を會集して予けるの今度無道人石川數正岡崎を山奔するにより忠世の急に召れ岡崎へ參らてかきひがたし然るは當城の守將松平康國若年あり深志の小笠原の異心の聞へあり某此所を去て岡崎へ赴んに一人此所を惣督してたしかに守る者あくては某進退なり難し堅固に當城守護する者への忠世身にかへて地行恩賞莫大に上て施すべし我一族兄弟の人と何人にも某にかへらんと思ふ者へ其旨予べし又信州先手の人とも某にかへらざるを添て給へるべしと予けるに大久保一黨の輩は三州上和田住所なり上和田の岡崎近邊なり今度石川が逆心して大坂へ出奔する程あらは我々の親子眷族等もいかにありぬらんと定めて大坂よりも忍を入置て岡崎の混亂すべし恩賞を貪り此地に留り守る間親も妻子も失ひあ

バ以ての外の不覺ありとて此所の留守せんといふ者なし忠世然らば我一人此城も残るべし各の早く岡崎へ歸り妻子眷族をともかくもはからるべしといへば我故郷を出る時より死をともせんと盟て爰に來り當城にあり然るにいかよ母親妻子が捨て難しとて貴殿一人殘して吾故郷に歸るべき其備思ひも寄らずとて承服せず忠世も大に當惑し末弟平助忠教にむかひ汝爰に留りくれよ褒賞の望のまゝに中行ふべしといふ平助聞ていや我も人とは同意の恩賞も俸祿も時にこそよれ利慾にひくれ武士の道をあやまる事の決してなすべからず伯耆が逆心して大坂へ馳登ほどならは岡崎の大亂あり同じ命を君に捧る同じの御主人御覽の前にて捧ぐべし爰にて死の幕の内の耐死なり母親の事の忠世はじめ兄弟あまたあつとれば我耐死したりとて養育に事のかゝり妻子まで捨て利慾に引られ爰にて大死せん事さらしやにいとといへば忠世聞て尤之地行恩賞をやらんといひしに全く我等誤なり今の只何事もいらず其方命を捨てくれよさなくて忠世君命に應じがたしと涙を流したのめ平助莞爾と打笑ひ俸祿恩賞にうへん事の覺悟に及ばず命をくれよとの仰ならばいふてのなみすべき心得いたと以上杉真田小笠原のあるか秀吉といふ無道人何十方騎を以て

攻寄るども平助命のあらんほどいつて當城を敵の馬蹄に汚すべき此地の事心を煩し給  
 いずとく／＼岡崎へのぼり給へどたのもしく詰合ければ忠世大に悦び城兵并信州先方衆へ  
 もよく／＼頼み岡崎へ参りける神君もよろこばせ給ふ事な／＼めならず忠世を以て岡崎城代  
 とさされ岡崎に群参の將士に響應行のれ濱松へ歸らせ給ふ平助うひ／＼しく死を決し此八  
 月より翌正月迄無難に小諸を守りける尤信州の雪國にて今年も大雪人馬の往來も絶ければ  
 上杉眞田よせ來らず又徳川家にての古老の忠正御家の軍法の熟練せしとなり數正大坂へ降  
 参して謀主となり關白大軍攻下らばゆ／＼しき御大事あらんと家人大に憂ける所神君の例よ  
 りも御氣色うる／＼しく連日御鷹野にわたらせ給ひ其上にて甲州郡代鳥居彦右衛門に仰遣の  
 され信玄の軍法書物武器兵具類甲州に残たる物の悉く召集めらる井伊万千代柳原小平太本  
 多平八郎惣奉行に成り成瀬吉右衛門岡部治郎右衛門二人下奉行とせられ兼て御家人に召出  
 されたる甲州武士を集め信玄の軍法とも遍く穿鑿をどげ給ひ十二月上旬に至り御當家軍法  
 今々後の悉く武田流に改め給ふ御家中末々の者迄其旨心得すべしと觸渡さる石川伯耆守數  
 正の早々大坂へ奔り登て關白家へ参りあべ定て關白大に悦給ひ早速十萬石賜いらんと思ひ

の外十萬石の沙汰もあく居室の賜はりしがさのみ懇遇にも及ばざれば數正も世上を取らし  
 くや思ひけん門をどちて久しく籠居せしが例の口さかなさは世人の習ひ數正が門扉に落首  
 を張おきたり

徳川の家につたふる古帯

落ての後の木の下をはく

家康のはき捨られし古帯

都へ來ての塵ほどもなし

數正是を見て面赤らめて居たりけん此人年若うりし時身をかへり見ず忠義を盡し今川家よ  
 り人質を引うへ若君を肩にのせ岡崎へ歸りし時國中の貴賤涙を流し感ぜぬ者あり三方原の  
 戦に鞆のさし緒結ぶ様老らざるを恥て美濃の淺岡といふ者に習ひしを信玄入道も武士の弓  
 矢の道嗜まん誰もかくこそ有べけれ徳川家の弓矢あなづり難しと感じたりさばうり義を  
 たて道を嗜みし勇士晩年に及んで年頃の志を變じ累代の君に背き汚名を後世に残す事尤い  
 まもむべき事ならずや人の老に及んでの血氣既に衰ふいまむむ事得に有どの格言信なる

かな士たらん人老年迄も心すへきにこそ(太久保物語編年譜讀駿河土産基業)

正校 三河後風土記卷第廿二終

正校 三河後風土記卷第廿三

關白妹君濱松御入興の事

楚人沐猴にして冠すといひし異國の謔此日の本に符合して猿冠者と名に聞へたる織田家の奴僕風雲の機會を得今正二位内大臣秀吉關白の職に昇り百官や大宮人の一座の宣下を蒙り雲霧の袍を身にまとい一天の君を輔佐し奉る凡皇邦に忠臣公(太政大臣藤原良房)はじめて攝政又任ぜられしよりこのうた天兒屋根の命の御末あらして攝政關白又任ぜらるゝ例なきとまれ後の世にも又あるまじき事なりけりこの人生知の雄略大度眼に六韜三畧を見ずといへども勳に孫吳の智計を貯へ幼より不學無術といへども將又將と上衆をなづくる才畧万人に卓越し天下を席の如く燻て四海を合せ眞田昌幸小笠原貞慶を先手とし石川伯耆守敏正が味方又降参を幸に今度三遠へ發向し徳川家を前後よりさしはさみ討ときゆゝしき大事と世上にて思ひの外天正十四年丙戌かきねて織田信雄と度々密議せられ織田源五長益羽柴下總守雄利(もとの瀧川三郎兵衛勝雄)土方勘兵衛雄久を使として遠州濱松城へ参らせらる三使の正月十三日濱松へ参着し去年もすてに参らせ給ひしとく長久手の軍の信雄

の頼みによりて弓矢に及べれしうとも全く秀吉徳川殿と互の遺恨あるにわらず信雄既に秀吉と和睦あるうへに徳川殿さらに恨を殘し給ふと有まじき速に御和睦ありて大坂へおのしまし對面し給んと秀吉が願なりと禮儀を厚く詞を遷譲して申參らせける信雄よりも何ぞぞ御和睦あらまほしき旨を傳へらるされども神君御許容の御返答もあらざれば同月十九日源吾下總守兩人二度參る其時神君の御鷹狩に吉良へ渡らせ給へば兩人御鷹場へ推參す神君の鷹を臂にし給ひ犬を牽給ひながら兩使の方へ向はせられ其方たち又來りたりや我上方に懸しき事もなし何ゆへに上洛し大坂へも參るべきと義丸事の北畠殿天下のためとてすゝめ給へばもだしがたく秀吉の養子に進らせたり人質に遣はしたるにわらず今我等が子にわらず秀吉が子なれば我對面せん様もあし決して上洛のすまじければ其方たちかかねて來ると無用なりと仰らる下總守承り御説御尤にのり得共當時關白殿事のむうしの筑前にのりぬす毛利浮田を始め其外西國北國の諸大名みな歸順し其命に應ぜざるのあくは夫故信雄はじめ我らもあつら妻子女に任せし置かへる猛威にのり得ば只今御手切の然るべうらざと申上れば神君御氣色變じ其方向を申すぞ我上方へ發向し秀吉を討取らんと思へども信雄の

領地を昭荒すを流石氣の毒に思ふゆへ延引す秀吉攻下らんこそ幸あれ大軍なりとて三十万をば過べうらす我三方の人数にて美濃路の平野に出迎へ一戦せば此鷹一据にて踏ちらすに更に難うらざ源吾かならず再び來るべうらざ下總もし又重ねて來らば一命危うらんと仰捨られ直に鳥立もどめて走り出給へば兩人案に相違し立歸り其旨申さば關白の怒りに逢はんと恐れあがら淺野彌兵衛にたより其旨申ければ關白少しも怒り給はず西國北國手に入し事へ申たるうと仰らる其事も委細申しといへば關白聞給ひ當時天下の英雄といふ徳川之我又耐る旨あり汝等明朝來れとて兩使を歸さる丹羽五郎左衛門蒲生飛騨守堀久太郎長谷川藤五郎等どかく徳川殿御手切の御無用なり五年前北條が六七万の軍勢に向ひ一万の人数にて息を繼さずと申す我が家人どもやゝとせむ徳川方にならん覺悟に見へていと疎む關白聞給ひ汝等さのみ恐るゝ事なりれ近年に彼の人を我等が膝の上におけて見せんと仰られ大笑して寢殿へ入給ふ(柏崎物語)其夜關白急に信雄と下總守を召る兩人何事にやと思ひもらけて登關白對面ありて我一計を思ひ得たり今度の徳川を上洛させん事疑あし其故の妹を徳川へ送り婚禮なましむべしと仰らる其御妹と仰らるゝの何の方にやと申せば佐治日向

守に嫁したる妹を佐治の心厚き者之天下の爲とていひし妻を返すべし返させて徳川を鑑と  
 せば彼人も上洛あるべきなりと仰ければ信雄下総守も且驚き且感じて其手段を稱しければ  
 早下総の織田源吾天野佐左衛門富田左近監將等と濱松へ参り織組の事はうらへと命せら  
 る又佐治日向守うたへの堀尾茂助生駒甚助以て其旨仰下さる佐治承り我此事をいなみあ  
 天下人民の苦を思ひざるに似たりされども故もあく妻を取返されて我身人に面を向ふべ  
 りらずとて妻を返し其身の忽に腹切て死ぬ(編年)實に亂世の人の心哀れはうき者あり  
 けれ此妹君とすの關白の母君關白と其妹と二人の子を持つて夫にあくれしう其後織田家の  
 同朋筑阿彌に嫁して秀長と此妹君を生し之此妹君朝日村といふ所にて生れ給ひし故朝日君  
 どの中けるなり(柏崎物語)然れば關白に異父同母の御妹之實の妹君の一洛法印に嫁せら  
 れ此妹君の御腹は生給ひし秀次あり依て秀次を關白猶子になし給ふ扱織田長重羽柴雄利  
 天野佐左衛門雄光富田左近將監知信四人の早三州吉田へ下る是二月廿二日之四使酒井左  
 衛門尉忠次につきて懇に此事をかたらへ忠次も關白殿思召悉よしして四使を携  
 て吉田御旅館に参りしう秀吉が使又來るうとて御氣色以外の忠次いや今度の御上洛の

事催し給ふにいなす天下万民の爲にいな御縁組の事仰参らせ給ふとにいなす神君暫く御  
 思慮廻らされ然らば先づ其使に對面せんと四使を御前に召出さる下総守進出て全く天下万  
 民安堵の爲にてい得ば關白御縁を結ばれんとこの事とて逐一演説す神君つらく聞召天下万  
 民のためとあればいなむべきにあらずされと我上洛の所望あり關白殿同意し給ひ縁を結  
 むべしと仰らる雄利承り關白左様の事もいんと推察し淺野彌兵衛を尾州まで差下し置た  
 り此者を召し讒し給ひるべしとす神君笑ひせ給ひ關白殿夫程思慮を勞し給ふべしと思ひ  
 ざりしありさらば其彌兵衛を召寄すべしとて其日四使を旅宿にかへし豊せられ清洲に  
 参りて浅野を召れたり翌廿三日に淺野長政清洲より此所まで十四里の所を午刻に馳  
 参る神君御對面有て御所望の三ヶ條を御書面にあらされ長政に示さる此御書面の御右筆神尾  
 庄兵衛筆取て記す第一關白妹君に此上男子生れ給ふとも御嫡子に立らるべうらす又長九  
 君を以て大坂へ人質に遣はさる事あるべうらす又もし方一御逝去ありても御領五ヶ國に  
 關白殿御手出しあるべうらす長九君を扶助して御家督とせらるべしとの御文言長政讀てお  
 いたゞき月見し御詭御尤至極せり殿下に於ても毛頭違心有さむくは幸に殿下も某に渡し





新



越れし起請文あり御縁組の事御許容あらば差上り様にと付られしとて懐中より關白の起請を取出して忠次に渡せば忠次取て御覽に備ける所其起請の此御方より御所望の三ヶ條と  
 同じ文言にて右三ヶ條一々相違あるまじとて太小的神祇に盟ひ厨文を加へらる神君にも甚  
 御感あつて御縁組定められ長政いそぎ其旨大坂へ申送神君直に岡崎へ渡らせ給ひ廿九日  
 濱松へ歸らせ給へば源吾彌兵衛も濱松へ参り蒲川天野の早々太坂へ歸る關白此由聞召悦大  
 うたからず晦日に源吾彌兵衛を御饗應濱松にて積樂を催さる宴會にして織田源吾目出  
 度濱松の音のさゝんさと小歌をうたふ長丸君も御出座あり源吾彌兵衛に對面し給ふ關白よ  
 かの妹君四月に差下し給ふべし早々納采の御使参らせ給へとの事之依て本多平八郎忠勝  
 此御使承り三月五日濱松を立出て十一日に上着すれば茶屋四郎次郎宅を旅宿とせらる程も  
 なく殿下ならせ給ふと聞へければ平八郎も思ひよらず急ぎ出て平伏す關白やがて渡らせら  
 れ長久手以來久しとて對面せり汝其時わづかに小勢を引具し我々大軍へ對て軍を挑みし忠  
 心誠勇我甚感る故其節諸將等汝を取こめ討取んといひしを我あかちらに留たるの汝が主人  
 を我が智とし天下政務の相談相手にせんと思ふが故之徳川家人に知行金銀のやりもどる

まじ其方の天下の名物あれは名物を取らせんとて京極黃門定家卿小倉莊の色紙(一説この  
 度のぬきもとりのあへずの歌こといふ)相州貞宗の脇差を賜ふ此時天野三郎兵衛康景も参り  
 ければ高木貞宗の刀を賜ひ早く濱松へ歸り婚儀を沙汰すべしとの事にて兩人の暇賜はり立  
 歸る此程關白の京に聚樂の館を造營ありて結構花燈を盡されける四月十日に聚樂の館よ  
 り朝日御方御發興あり御供の女房百六十餘人警衛の聲の淺野彌兵衛津田四郎左衛門富田左  
 近將監瀧川儀太夫伊藤太郎左衛門此伊藤の御かたの乳母子とぞ信雄よりも御送として織  
 田源吾羽柴下總守飯田半兵衛をそへらる道路に是を見んとて遠近より走集り見る者堵の  
 とくなり濱松よりの御迎として酒井小五郎松平主殿助内藤三左衛門三宅惣右衛門鳥居忠兵  
 衛高力與左衛門柳原隼之助久野左太夫三州堺西野迄出て迎へ奉る廿日濱松へ着せ給ふ兼て  
 關白より御沙汰により御興を柳原小平太康政が家に寄せられ御衣裳を整らる供奉の男女  
 もみな支度をあらためて御入興あり御興渡の淺野長政御興請取り酒井河内守重忠にて合番  
 の御式滞る方なく行われ供奉護送の人々善美を盡して饗應せられ清水平左衛門山本千右  
 衛門の姫君の執事として濱松に残り其余の人々の皆歸洛す廿二日に御所あらはし御祝

(所露顯の御式といふ)東鑑に見へし名目(長丸君にも御母子の御對面有り酒井河内守はじめ御家老みな拜し奉る御祝に猿樂催さる此間長丸君の御母上と御孟あり淺野長政御酌し伊藤太郎左衛門御伽の役す酒井左衛門尉本多平八郎にも御孟たまひる淺野伊藤兩人の此御祝終て歸洛すけふの御能の爲とて京都より猿樂共あまた下向せしめらる又長丸君御小姓衆へ關白より奈夏晒の帷子摺箔の帶一宛下さる夫より下扈人同朋衆迄若狹帶の帷子をかつけ給ふ五ツ目七ツ目の御祝毎に猿樂興行變應善を盡し美を盡し花やき賑ひしき事ども之濱松よりの御祝儀の御使として柳原小平太康政廿一日出立し廿六日に着京して富田左近將監知信が家に旅宿す今度も其夜富田が家へ夜ふりく關白渡らせ給ひ明日對面すべしといふとも早く逢たければ只今來りたり汝先年小牧山陣の時我方の諸將へ廻文を送り我を惡逆無道と罵る其時我甚怒り汝が首切て來らん者への恩賞望にまうせんと觸れしが今汝が主人と縁を結びたれば汝が精忠を大に感ず此後妹がとくれく頼むぞと仰られ歸り給ふ翌廿七日康政聚樂へまうのぼれば關白の青符衣に立烏帽子にて對面し給ひ康政を厚く褒せられ暇給ひり康政の濱松に歸りける(柏崎物語編年大成記)

北條父子黃瀬川御會盟の事

神君の關白家と御縁定めしうへ小田原の北條方へ仰遣はされ御聲の新九郎氏直へいまだ改めて御逢もあければ今度御對面遊ばされ度よしをも仰らる氏政氏直承り此方よりも此事を參らせ度思ひしうども黃瀬川を越へ給ふと御同意有るまじく思ひ其事延引す川を御越なされ御來賀下さるべしと小田原よりも使を添て參らせたり神君聞召何りくるしるべき川を渡りて參るべしと仰らる酒井左衛門尉夫のいかに左の北條が旗下に降り給ふに似たりと神君左様なる位争ひ無川なりと少しも御心よめ給はず御婚禮前三月十日黃瀬川を越て渡らせ給ふ北條の黃瀬川より東に新館をもふけ北條一門并關八州の宗徒の群衆集す黃瀬川といふの伊豆駿河の境に北條の元來伊勢家なれば禮義作法嚴重あるべしとて御供みな長袴を着せしめられしに北條方の皆草袴を着しければ兼て御用意ゆへ早速み草袴に改らるうくて氏政へ緘二百反虎豹皮五枚ご、猩々皮二間盛家の刀一文字の太刀長刀南蠻象眼の鉄炮氏直へ國俊の刀吉光の脇差を遣はさる氏政よりの鷹十二連馬十疋雄劔二振を奉る氏直自身御興迎に出らる御酒宴の半神君興に入らせ給ひ自然居士の曲舞をかきて給ひ左衛門尉

も醉よそに乗のりじ例れいの海老えびとくひを舞まふを見られ氏政金の與斗つ付菊一文字の刀貞宗の脇差を授く  
 左衛門尉是を手に取り松田尾張守に向ひ是見られよ加藤幸海老をすくひ得たりといへば氏  
 政氏直父子始め一々笑ふ歸らせ給ふ時御所望しよぼうにて山角紀伊守御送おんきやうに參る沼津三枚橋迄いた  
 らせ給ふ時紀伊守を召て氏直を遣やはすれば今いまの北條家に心置事なし堺目の城しろを掃捨はらひすつべしと  
 て見る前にて城の堀ほりみな打破らしめらる紀伊守も忝かたじけなくあしと謝しやうし奉り歸て其由よしはれば氏政  
 父子悦大方ならず七月十七日にいたり真田安房守昌幸まのぶ叛逆はんぎやくを捨置給ふべきにわらずとて御  
 出馬いでうまあらんとす依て北條氏直も大軍にて加勢せらるべしと聞ゆ今度の真田も是非滅亡めつぼうと見  
 へし所關白しよかん頼りにといめられし故先このと御延引あり(原書に)此事を載せず今落穂集  
 柏崎物語大成記家忠日記による

大廳岡崎下向付神君御上洛の事

關白家と御縁を結ばれし上の御上洛有るべきかと群臣ぐんしんに議せらるる所酒井左衛門尉關白奇  
 計けい森智深もりちかも猶其心計こころけいり難し御上洛然るべからずとすせば群臣各是に同じ皆御上洛を留め奉  
 る依て五六月に及びても御上洛の沙汰さたもあし關白の三遠の地ちに問者もんじやを入置此上にも御上洛

あくは三河守殿御身に災あるべきかと流言りうげんせしむれば三河守殿御生母おんは萬の局大よあげか  
 れ密ひそに村田一九(後に永見志)と云を具して都に登り給ふされども此事神君の少しも驚給  
 はず三河守の人質にんしつに送りしにわらず秀吉が懇望こんぼうにて秀吉が子に遣はしたり秀吉が子を秀  
 吉が殺さんころに我わづかる所ところあらずと仰られ御心を惱なやし給ふさまにもあらねはいよく關  
 白心を苦しめ又羽柴下總守雄利を岡崎に遣はし今の御縁も結ばれたれば何の御うたがひか  
 いのん其上に關白九州征伐せいぼくの事思ひ立給へば是も軍議ぐんぎせられん事を希ねがひるかたよく御上  
 洛りやくあらまほしけれ且かつの都あたりも近年靜謐せいひつにて何事も昔に復かへする様御覽せられ御心も慰なぐさめ  
 給へどすむ神君聞召先まより申けしとく織田殿の時我等上洛して名所舊跡皆一覽めいしよきよせきしたれ  
 ば今更都戀こゝろしき事こともなし鷹を臂ひしに犬引いぬひて野のくれ山やまくれ獨ひとりくらす此たのしみ何事なにこともか換かぬ  
 べき今度縁を結びしとて我上洛せば禮らいの往來かうらいを尊たがふとかいふとわり關白殿も爰こゝに參向まゐし給  
 はずバかあふべからず然らば是も國家こくがの煩わづらひ互あひの財費損さいひえんあつて益えきなし依てまづ延引ひきかす夫と  
 も汝強しやうてすむるの關白何ぞ仔細しじゆある事にやと仰らるれば雄利返おんりし奉る詞ことばもあき拜辭はいじして  
 都みやこにのぼり此由よし申けるに關白聞給ひ扱あつ徳川とくがわいまだ疑心ぎしんはれ兼かると見へたり我又工夫くふうすべ

して雄利を歸へさる雄利信雄に逢ていつはてしなき和睦のあつうひあの猿めの物に犯ひ  
 たりと耳語しとぞ其夜深更に及び信雄雄利兩人急に召れて聚樂に參る關白伊勢染の小袖を  
 着ちがしにして左の手に脇差を下げ右の手に紅染の細帯をたぐり持給ひあがら座に着給ひ  
 夜中あがら呼出す事別儀にあらざ徳川是非とも上洛せぬべ叶ぬ謀をこそ得たれと仰ら  
 る信雄夫のいうある御工夫ぞとすけれの我等が母大廳を證人として差下さば徳川よも否と  
 のすまじと仰けれは兩人承り是の奇々妙々御尤至極と感服して退出と舍弟秀長卿是を聞凡  
 母を人質として人よ渡すの匹夫も恥る所なりなせ天下の大軍を以て北越の上杉と牒し合せ  
 一戦の雌雄を決し給へざるやと涙を流し諫らる關白いやく大行の細瑾をかへりみず徳川  
 如き勇智の名將を味方に引付てこそ宇宙を包擧し八荒を并呑すべけれ戦はずして敵に勝り  
 良將の上策とて其後關白自筆の書簡を以て秀吉今度九州を征伐せんとすれば是非對面し  
 軍謀密策の議を承たし美濃迄も來賀を希之若又上洛もあし給へし秀吉大望何事う是に志う  
 んや依て老母大政所を其地へ下ししへば心遣ひあく御上洛下さるべしと慰勸のともも之妹  
 君の御方へを自筆の消息もて懇に頼み進せらる神君此頃甲州御巡視に渡らせられしに

此書簡參りて御被覽あり八月廿六日淺野彈正少弼長政參り天下泰平万民安堵の爲なれば御  
 上洛下されたしと演説す酒井忠次へも種々詞を盡し事をうたるふ爰において神君も又群臣  
 を召あつめられ御上洛の事を議せらる忠次すけるの秀吉心中積計り難し若うの人御上洛あ  
 きを憤り大軍にて攻下るとも京家の者共が戦ひの様心にくき事いはず御上洛の事思召と  
 まらせ給へと諫む神君篤と沈思し給ひ御家人共のす所みな忠次に同じく尤以て神妙といふ  
 べし然りといへども本朝四海の亂既に百有餘年に及び人民一日も安からず然るに今世靜な  
 らんとするにのぞみ東西また軍をこつて人民多く亡び失ん事尤不便之罪あく失はれんもの  
 どもの爲我一人かひりて討れん何方ゆゑしき事あらずやと仰けれは忠次も左程迄思召定  
 められし上の何事をかすべきとて退きたり神君天下まろし召さるべき御徳万人の爲に御身  
 をかへ給へんどの御詞に顯れたりと後にぞ世人思ひ知りしと成り(藩譜)依て神君御手筆の  
 御書簡を以て九月中に御上洛有べき旨仰遣はさる關白悅斜ならず十月四日關白執奏にて  
 神君を權中納言にあげ給ふ十五日に神君岡崎より渡らせ給ひ大政所の下向を待せらる大政  
 所地驛に着給ふ十八日之松平主殿助家忠御迎に參る廿日岡崎城に着給ふ此時本多作左衛

門重次神君よりけるの京都に内裡上臈の老たる者あまた有と聞ゆ秀吉殿様をたばからんと思ひ何方の老婆を大政所にこしらへて越れたりしも知るべからず爰の大切の御分別所にいと諫奉る神君尤きり然らば北方を迎へ進せしと仰らる北方の五六日も過て御對面有べしとかねてい定給ひしが早し岡崎へ御越有て御母子御對面有べしと仰せ遣はる北方急がせ給へとも御支度に隙とりて廿日の夕方に岡崎へ渡らせ給へば大政所かくと聞給ひ御興の戸明るを待兼給ひ北方御興よりあり給ふて其儘抱付て御母子とも涙を流し給ふ是を見る女房達御母子の御心の内思ひやられ涙に咽はざる者なし皆是を聞傳へて初て安心す神君の廿一日岡崎を御發駕あり今朝大政所に見へ給ひ井伊直政本多重次に大政所を懇に守護し奉るべしと命せられ今晚吉田に御泊あり井伊直政一人を召てひろくに仰下されし今度信雄丹羽五郎左衛門蒲生飛彈守堀久太郎長谷川藤五郎織田源吾等内と我等に一味の搦詞を送るといへども夫に心ゆるす我にあらざ今度京にて秀吉表裏のふるまひあらば我の早し京都に於て東寺へ取籠るべし秀吉急に寄來る事叶ふまじ遅くも三日の間に濱松へ聞ゆべし其時の汝が屬兵一万餘人廿備とし酒井榊原り殘しおく備其外松平一族御旗本備とも廿

備とし尾州佐夜を回り千種越近江の日野より瀬田へ出て一概に押破り八坂邊に屯し酒井が屬兵一万餘如意が嶽北長良山へおし登せし秀吉もたまらば大坂へ逃行べし其時追討する程ならば秀吉も桂川を越させまじと御詔尤隱密之(柏崎物語閑談)濱松城留守の石川日向守に命せらる廿二日に熱田廿三日勢州四日市場廿四日關地藏廿五日土山廿六日石部廿七日御入洛旅に米穀魚鳥の設け道路橋梁の灑掃みな關白より令せられ御旅館上下の饗應尤花美を極めたり今度の御供へ本多平八郎忠勝榊原小平太康政酒井左衛門尉忠次阿部善右衛門正勝永井傳八郎直勝島居彦右衛門元忠西尾小左衛門吉次牧野右馬允康成其外勇健の輩數多召具せらる京都にて茶屋四郎次郎が家にやどり給へば淺野長政取計らひ秀吉卿并に富田左近將監津田隼人正等も奔走して饗し奉る其時長政参りやがて殿下ならせらる由をすせば神君も餘り卒爾と思召所其夜關白十人計り近臣を御供にて忽然として來り給ひ直に神君の御手をとり今度御上洛有て秀吉に天下をどらせ下され 忝しと御手をいたし長篠以來十二年目にて對面せしとして悦大方ならず持參の行厨取出し酒肴みづから試てまいらせ其後御耳に口よせさしやき給ふは秀吉今官位人臣を極め天下兵馬の權を主宰し四海の豪傑半に過

て旗下に屬すといへどもかねく徳川殿御存の如く秀吉其昔奴僕より出身し織田殿に取立られ今此身に至る事は皆知る所之被官共も皆昔の同僚侍輩ども之故に實々主君と敬ふ心なし近日諸大名集會の所にて對面すべし其時いかにも秀吉諸人に尊敬せん様に御懇に禮儀をかして給はるべし我りかへつて尊大の躰をなすべし此事ひたすら願奉ると御脊をたゞき給へば神君聞召既に御妹にそひ參らせ又かく上洛致すうへはともかとも御爲よきに計らひすべし殊更懇の御詞装りいかへ違背仕らんと返答まじませば關白大に悦び歸り給ふ廿八日關白又夜中に來り給ひ白雲といふ名物の茶壺を提て參らせ打どけてかたらひ給ふ廿九日には又來り給ひ供奉の御家人に配當せらるべしとて黄金三十枚進せら給ふ十一月朔日には時服敷々參らせられ明日は聚樂にて對面す彌尊敬の躰をかされ諸大名の耳目を改め給はるべしと懇に願て歸り給ふ扱五奉行より在京の諸大名諸士へ明日徳川殿御禮あれば各官服にて出仕し官位の次第を守り座班を亂るべからずとふれ流さる二日には諸大名早朝より出仕し烏帽子直垂大紋の袖をつらねて座に列なり五奉行淺野彈正少弼増田右衛門尉石田治部少輔長束大藏大輔大谷刑部少輔所司代前田徳善院は庭上に出むかふ織田大納言信雄は神

君と同じく聚樂に參らる(基業等諸書大坂へ參らせ給ふよしよしするす誤あり編年に記せしとく聚樂にて對面ありしにうたがひなし)關白は上段に座し給ふ新庄駿河守直寄披露して神君より太刀一振馬十疋黄金百枚進らせらる兼て約し給ふとく神君いかにも敬屈して禮を厚く拜させ給ふ諸大名是を見て大政所を質に取て上洛ありし徳川殿さへかく敬禮を盡し給へば秀吉公は實に天下の主まりと思ひ是より關白を敬する事是迄に倍せしとぞ對面あり關白高樓に伴はる神君樓上より四方の風景を眺覽して賞し給へば關白先年秀吉越前金ヶ崎にて既に討死すべき所徳川殿の助力にて虎口を逃れ今かゝる身とありたる此厚恩忘れ難し神かけて弟秀長に存かゆへき心底なすとすされ其後千宗易を召て茶をすゝめ給ひ正宗の脇差三好卿の刀を參らせらる歸館の後淺野長政大谷吉繼付置て御用を蒙らしめらる(柏崎物語落穂集)今夜は秀長卿の亭にて饗せられしに板敷の足音おびたしく聞へけるを御供の輩聞て大に驚きすはや大事と騒動して亭中よ亂入せんとひしめく(大志關東にはいまた車戸といふはさし故に御供の輩其音に驚くとあり)大久保新五郎忠隣制しとむ是を聞給ひても關白三河武士の忠義剛直を感せらる又京都御滞留の間徳川殿には猿樂を好なり

として度々能を催さる其比秀長卿長政内々上しは毛利浮田あといへる諸大名の眼前にて關  
 白の陣羽織を御所望ありて今々我等かくていへば此後殿下に陣羽織は御着せすまじと仰ら  
 れ然るへしと之神君其旨心得いと御返答あり其後毛利浮田はじめ諸大名群參の所に關白赤  
 地に桐唐草をぬいたる陣羽織を着して出らる毛利浮田長曾我部等みか側に侍座しけるを御  
 覽し其羽織を拜領せんと仰らる關白是は我等軍川の品と宣へば家康かくて侍れば今より  
 殿下に甲冑の着せすまじと仰らる爰於て關白機嫌斜めらず秀吉果報者之能き鎧を取て  
 我等に軍のさせまじとすさるぞとの給ひ陣羽織を脱て神君も着せ給ふ其後諸大名みか退散  
 するを見給ひ關白神君に向給ひ彼等供を小勢に召つれよとすても兎角に多勢になり我等が  
 醍醐の清水へ行にも人数二万う三万附添ひ迷滅すとして大に笑ひ給へば神君も殿下御威光限  
 りなき事と敬屈し給ふ此事五十日程が間四國九州へ聞へて關白殿へ徳川殿父子君臣の如く  
 親まる此上の桶突者天下に有るべうらずと舌をふるひて恐れけるとぞうくて供奉の輩を叙  
 爵せらる酒井左衛門尉の譽の名されば從五位下に叙しても名り改めず本多平八郎の中務大  
 輔榊原小平太の式部大輔阿部善右衛門の伊豫守永井傳八郎の右近太夫内藤新五都筑與左衛

門の布衣の侍と成る此後一度御上洛有べき爲聚樂近邊に第宅を營造せらるべしとて秀吉  
 公の仰より秀長卿の家司藤堂與左衛門高虎奉行し造營す徳川家より伊吹一右衛門を留め  
 勤番せしめらる又近江の守山にて馬草場十万石參らせんと有しを固く辭し給ひ三万石請取  
 給ふ左衛門尉にも櫻屋舖を賜へる馬草料をも授けらる扱大政所も御對面を急せ給へば徳  
 川殿に早く御下向有べし且大政所御歸洛の時井伊直政を御附給へるべしと仰られ御暇  
 乞濟ければ十一月五日京都を出給ふ此日又正三位にのぼらせ給ふ十一日三州岡崎へ御歸城  
 ましませば御家人の手に不及百姓町人迄悦事限りあし是より先き岡崎にて神君御上洛  
 の後大政所住ませ給ふ御殿の四方に山のとくに柴薪を積重ねたり大政所に付添し女房達大  
 に驚き是のそも何故あらんと不審する所に井伊直政参りければ女房達の薪は何の爲かく  
 おびたいしく積れたるぞと問ければ直政某はかつて知らざる事と答其後も直政は毎度大政  
 所の御機嫌を伺ひ御菓子御肴など時々参らすれば大政所はじめ女中達もみか井伊殿へと  
 て奔走す本多作左衛門は女房達へ詞をかけし事もなく荒々しくのみふるまひしが此薪積置  
 しは京都にて秀吉公惡き舉動ありと聞へば忽に此薪に火を放て大政所を始め女中みな焼



殺さんとの作左衛門が計策なりと聞て大政所をはじめ女房達本多を惡鬼のとく思ひ胸をひやし作左衛門を憎みけり神君御歸國ありければ大政所をもさまゞゞ變じ給ひ歸し進らせらる御送りにば殿下望の如く井伊直政ぞ参りたり十八日大政所歸洛まじゞゞ秀吉公悦び給ひ熱田まで御迎に参り給ひ久まき羈旅の勞をなぐさめ給ふ大政所は岡崎に有し間井伊本多作左衛門兩人我等付添ひ守護しつるが直政は年若なれども情深き人にて折々我等が機嫌をも訪ひうさを想め時々くだ物着など進らせて懇なる事共ありき作左衛門とかいふあられなき田舎侍は情あきふるまひし我住所廻りに柴を山の如く積おいて都にて不慮の事もあらば此柴に火を放て我等始我召つれし女房たち一々燒殺さんと用意し日夜に高聲して番人共油断すなど罵り立ち立るうとまじき恐ろしき命ありとも思はざりしと恨かこち給ふいつにかはら山三河土が忠義かなど感ぜらるさて井伊直政出て拜しけるにいくつに成ると問はせ給ふ廿六歳と答ふ關白聞給ひ徳川がよく見所ありと見へて我等が母へ年若な其方を付置れた長久手にて亦鬼と呼れた万千代よなまゝ上京せよと仰られ關白の大政所打つれて聚樂に歸り給ふ扱直政をばさまゞゞ變應せられ石川伯耆守數正を相伴にくへらる直政の石

川をばたど白眼で終日一言も交へず其後又茶を賜りしにも伯耆守を相伴にめされたり其の時も直政の始終一言も詞をうりさず他の者に向ひ彼者の徳川普第の家老にひ今何の面目あつて面をさらす彼の誠の人而獸心といふべしとにがり切ていひければ數正の赤面して黙然たり人聞て皆直政が豪強を感じ數正をば爪弾してあざけりたりたり大政所の頼りに作左衛門事死刑流罪にもと恨りこち給ふにより秀吉公も詮方なく作左衛門上京の事の御遠慮下さるべしと仰遣はさる依て重次事の取立あされ難く終身五千石にすぎず其子飛彈守成重が時に至り越前丸岡の城主にあされ万石の列に加へ給ひき十一月廿五日新帝御即位あり此七日先帝正親町院御讓位あり新帝御位を繼がせ給ひし之後陽成院と申奉りしは是より關白秀吉公の十二月朔日太政大臣は昇り給ふ此殿下草間奴隸より身ををこと給ひし事故氏姓更に詳あらず織田殿平氏あればものづら其身も平氏を稱せられしが大臣にのぼり給ひし時より近衛家にたより藤原と稱せらる今度長上の宣下ありしより勅旨を請て始て豊臣氏と稱し給ふどりゞゞめづらうに昔にも後の世にも例あるまじき事共なきて神君の殿府を御居城に定られ吉日なればとて九月十一日御移徙御祝儀有て再び濃松へ歸り給ひしが今度御上

洛はて、此歸國の後修築を急がれ成功をせしむるに十二月四日俄に御移りあり歳暮の事なれば御家人等の家を引移すに及ばず翌春ふいたり引移りし中に大久保新十郎忠隣一人の衆に抽んで、年内より移りしとぞ濱松を直に土岐山城守定政等勤番す濱松に元龜二年辛未より今年迄都て十六年御在城ありし之駿府の今川家代居城ありしが氏真没落のとき焼立られ跡うたなくありしを今五ヶ國の本府と定められ去年の春より經營ありて此時漸く成就有し之（大成記家忠日記柏崎物語編年〇原書大政所御送の時松平右衛門太夫正綱旅中雜事役を勤むとす正綱慶安元年六月廿二日七十三歳にて死する時今年天正十四年わづかに十一歳之正綱何程才幹ありとも十一歳の幼童いうてり、る事命せらるべき尤あやまり之仍て削り去れり）

關白九州軍注進の事

其頃關白秀吉公より津田隼人正を使者とし駿府御移徙を賀せられ太刀馬鷹等進らせられ其上に先も仰進らせられしとく來年の早し九州征伐のため出軍すべし北條氏政其慮を伺ひ軍馬を動うさんうと思へども徳川殿駿府御在城の上のさらし心に煩はざるもし方一畿内邊

にて姦凶の徒共非望の企せんにもあてり井伊本多副原等の勇將一兩人差登せ京都大坂に殘し留る軍兵共を指揮し退治させ給へるべし抑今度九州征伐思立旨趣の嶋津修理太夫義久數世の勇威を震ひ大隅薩摩日向三國に割據し近年筑前筑後肥前肥後豊前の國に至るまで悉く討從へ其上豊後へ兵を出し大友が領地を襲ひ奪ひんとす大友左衛門督義鎮入道宗麟が嫡子豊後守義統力を盡し防ぎ戦ふといへども其勢微にして勝事あたらず依て上洛して嶋津が逆意のさまを注進し秀吉公九州御征伐有時の先陣を義統に許し給ひ、今より永く豊臣家臣僕とならんよしを請ふ關白尤なりと聞召さらば大友が加勢を遣はさんと仙石權兵衛秀久長曾我部土佐守元親其子彌三郎信親先銀西に發向し駿下の出陣迄の夢し手を出す可らずと命ぜらる依て仙石長曾我部父子豊後に下向し島津が方へ書簡を送り義久の其身の武勇にほこり天命を知らず朝寇を恐れず普天の下に住かから皇威を威如にし恣まゝに近國を侵掠し人民を苦しむ不臣の甚しき是より大なる物ありし速に押領せし國を返納し上洛して皇威を仰ぐべしとの事あれば義久大に怒り罵りけるに全く義久が領する國のみな是義久年頃千辛万苦して切取所あり何の恩ありて猿冠者めに避渡すべき片腹いたきや條こそ奇怪なれとて其

書を枝葉命弟中務大輔家久に命じ二万餘兵を引具して急ぎ豊後國に發向も大友が城す所より攻落さしむ仙石權兵衛是をき怒に堪はず大友義統と一同に長曾我部父子を伴ひ戸次利光が戸次の城の後卷す十二月朔日寄手を戸次川を越て島津が大軍と戦を交ゆ長曾我部が嫡子彌三郎信親達兵すくつて二千餘騎眞先かけて突て入り主従殘らず討死したり依て大友長曾我部が軍勢大に亂る土佐守元親の我子の討死をも知らず敗走す家人竹内新介桑名太郎左衛門引返して討死すれば大友方にも十河民部大輔存保并に矢野田宮を始め若干うたれ豊後守義統府内の城にもたまりかねて龍王の城へ逃入れ仙石長曾我部も軍を退て陣を取る毛利右馬頭輝元兼て大友を救へしとの仰により山陰山陽の軍勢を催し豊前國へ押渡り島津が勢と挑み戦ふ今度寄手大に利を失ひしのかねて島津戰んとするとも必手出しすべからず島津をつり留て關白川馬を待べしと仙石權兵衛くれと仰を請ながら無謀の軍して其罪尤輕からずと關白大に怒り給ひ仙石が所領讃岐國を沒收せられ明春のみづから殿下征伐せらるべし三十七ヶ國の軍勢廿万餘を催され糧米の三十万人の用意馬の三万疋の用意を命ぜられ其物奉行の石田治部少輔大谷刑部少輔長東大藏大輔下奉行の小西隆佐建部壽徳吉田清右衛門宮

本長次郎 承はり十二月朔日此旨國へ觸渡されし旨演説す神君聞召九州の事の殿下御出馬いんへの平均何の疑がひうあらん北條が父子干戈を勤うす事の思ひもよらずよじや不慮の舉動するとも我等かくて以得バ大井川より此方へ手をもちさへせやべうらざるもや近國畿内よりある姦賊蜂起すとも某まかり向て踏潰し以へし更に御心煩はさるべうらざと御返答有つて隼人正をバ返されける(栢崎物語編年九州記)

鎮西合戦付本多廣高功名の事

天正十五年壬亥二月朔日嶋津征伐の爲畿内近國の軍勢九州に發行す先陣既に門司赤間ヶ關に到着するに後陣のいまだ兵庫見陽野にさへたり諸軍漸く饑寒を著せしよし聞へければ關白秀吉公に二月朔日京都を出陣し給ふ攝州大坂より御船に召さる北の尾ヶ崎蘆屋高砂室の沖南の淡路給嶋ヶ磯四方三十餘里の海上前後左右船艦をならべ舷をきしり數千艘の御供船に旗旆舟印を春風にひるがへし珠簾翠幕日影にかいやき金鼓を鳴らし棹唄を奏し既に御船川口を漕出ればたゞ大形の海道たに春の見るめゆりしきを所の名にめふ難波方角組蘆の春風に浦波霞む淡路しまわいとばるうに打ちうら紀路の連山蘆屋の沖殿下をはじめ

御船に供奉の輩もわくわくなぐめに程もあく長き春日も暮行ハ和田の御崎を今宵の御泊山陣の御祝に船中四座の猿樂舞曲を奏し盃數めぐり船共皆かゝり火を燐ハ海上明らかにして晝にとちらず明れば生田有馬山須摩も明石も取づくにうける見る目になぐさめて三月十五日に赤間ヶ關に着給ふ毛利輝元假殿を爰に設て山海の珍味を盡し風流を極め饗し奉れば君臣みな長閑ある海山の眺望風煙の佳景に感じ歌詠む人もあり又阿彌陀寺にて安徳天皇をばじめ平氏の人々の影像を御覽じ關白かくぞ思ひつゞけたまふ

波の花ちりにしあををことごとく

むろじあぐらにゆるし袖哉

壽永の春の哀さと思ひやり給ふ情深と扱赤間に増田右衛門尉をどいめ門司に丸毛三郎兵衛城戸十乗坊をどいめ森勘八同兵吉に舟船奉行を命ぜらるやがて豊前の地に渡り給ひ馬嶽の城を本陣となさる三月廿九日關白みづから馬上廿騎計りよて秋月筑前守種實が功臣芥田悪六兵衛が籠りたる岩石の城を巡見あり翌四月朔日丹波少將秀勝と大將とし大手の方ハ浦生飛騨守氏郷擲手の前田肥前守利長馳向ふ谷大膳小野木總殿助軍監たり京勢始ての城攻あ

れば殊更勇み進んで精力を盡しける浦生が手より關の小半(浦生孫左衛門)眞つ先きに乘出し難なく先登し其外小姓那古屋山三郎浦生四郎兵衛高木助六神田清右衛門前田が手より河原兵庫助太平右馬允坪内次左衛門も奮戦して高名す徳川家より軍中御尋問の御使に参りたる本多豊後守廣孝此時來り合せしが大手の寄手に馳加り門を破りて高名せしうハ關白大に感じ給ひて徳川の家人の壹人として獲の利ざる者なしといへども汝ハ別て逸物こそ感ぜられ金鐙の脇差羊皮の羽織を賜ふ三河守秀康卿今年十四歳關白に具してあつしけるが今日先登せんと岩石山の半ぶく迄登り給ふ程にはや城ハ落て悪六兵衛首を延て降参す秀康卿合戦にあひ給ひぬとて落涙し給ふを佐々内藏助成政見て流石徳川殿御子ありと感じたるを關白聞給ひ三河守勇猛の志ハ此秀吉に似たるなりとて笑はせ給ふ筑前國大隈の益留の城にハ秋月が父宗全入道籠りしが岩石の城落たりと聞て城を捨て秋月の古所山の城へ逃入る四月二日關白本陣を大隈に移さる秋月の城にハ秋月一族其外豊前豊後筑前筑後肥前肥後の國人共二万五千餘騎籠り居たりしが京勢の猛威破竹の如きに恐れ城兵追ふ落失ければ秋月今の頼み少くあり筑前守種實父宗全と同一潮髪染衣の身と成り降人にぞ出にける關白助命仰く

だされければ秋月父子悦の餘り累代の重寶奈良柴といふ茶入を獻ずりて秋月實滿岩屋室  
 森赤司等の城を京勢に避渡す依て薩州の嶋津順て降參の後秋月に賊部の城をだまひぬ秋  
 月既に降參の上の筑後國中に謁議するものありりけりかくて軍勢を二手に分て其一方の  
 舍弟秀長卿を大將として蜂須賀阿波守家政長曾我部土佐守元親黒田如水其子吉兵衛長政宮  
 部善祥坊繼潤頼井武藏守政直尾藤甚右衛門知宣其外毛利小早川はじめ四國中國の軍勢すべ  
 て八万余騎の豊後國より日向にうへり薩州に攻入べし殿下の旗本七組畿内東山北陸山陰山  
 陽の大軍淺野長政木村常陸介生駒雅樂頭を先手とし惣勢廿五万余騎四月五日筑前秋月をた  
 ち越たまふ此日立花左近將監宗茂參陣す立花の去年より最初に御味方に参りし事なれば去  
 年以來籠城の功を御感あつて薩州の御先手を蒙り大に面目をほとこしぬ爰に筑後國高良彦  
 山といふの神功皇后の三韓を征し給ひし時武内大臣と功をあさじくせられし物部勝唯進す  
 ありち高良玉垂の神をいつき祭りし靈山にて山中尤險難の地之依て一山の六衆社人其險阻  
 によつて要害を頼にしつぬに朝憲を蔑如よし武命を恐れず近國の凶賊を獲て折し一揆を蜂  
 起せしめ諸方を侵掠むるよし之是捨置へうらすとて富田左近將監奥山佐渡守を大將として

彦山に向ひせ先門前を放火せしむ山中衆徒社人大に恐れ罪を謝し誓書を捧げれば是を赦し  
 て殿下彦山に御陣を移さる同十一日龍造寺山城守政家筑紫上総介廣門參陣す十二日十三日  
 壹岐對馬の國人有馬波多大村松浦五嶋の輩皆參陣す龍造寺も立花と同く先陣を命ぜらる殿  
 下の猛威草に風を加ふるとく見へにけり先手淺野木村生駒等のはや肥後の國に攻入て關の  
 城を取めこむ城主大津山河内守三日々間の防戦しけれども遂にかまはず城を開き降參す先  
 手の諸軍の彌進んで菊地山鹿小代高瀬邊までせめ入れば有働隈部等の城も退すに降參す  
 殿下十三日に南の關に着給ひ此城に堀尾茂助を定め守らせ先手の熊本城も攻掛る此城  
 主城十郎太郎も城を開きて退散すれば爰に淺野長政を定め置始の程の上方武士を一措か  
 て見んと山谷所へ屯したる國人一揆も此威に辟易退散すれば宇土顯家を追散し宇土城を  
 ば加藤虎之助清正に守らせ八代熊庄も退散するにより八代ハ籠嶋左衛門太夫正則熊庄の岡  
 本太郎右衛門に守らせられ殿下の宇土城は滞留わつて高札を立られ九州三嶋の國人等前非  
 を悔て後眞實に忠勤せんと思ふ徒に助命のうへ懸命の地を授くべしとの事成りまうば此  
 程山林溪谷に身を隠し集り居たる者共雲霞の如く御陣に參謁し涙を流し蘇生の恩を感じ

ける先手既に薩州千代川まで攻入れれば殿下にも五月四日大平寺へ御陣を移さる此處に京泊とて大濠あり爰に糧米若干分ちわたへければ其地の町人まで商賈にぎひ悦事限りなし千代川に舟橋を架し往來の自由を得せしめ堤を築き堀をほり旌旗をおびたいしく千代川風に吹なびうし軍威日の昇るごとくういやけり(九州記柏崎物語)

耳川根白軍付島津降参の事

秀長卿の黒田峰須賀を先陣として四月二日豊後表へ進發しける所島津中務大輔家久の去年よりして豊後の府内に城郭を搦へ二万餘騎にて守りしに京勢大軍にて押寄ると聞へたれば家久の府内を引拂ひ日向の縣へかへり薩州へ引とらんとするを秀長卿に八万餘騎大友義統が出したる佐伯權頭を案内者とし日向表へ打入に端城ともいふ處を開て退むる直に高城財部兩城を押寄仕寄竹東殿しく付て日夜隙なく攻にけり其時宮部善祥坊の耳川を越根白に砦をうまへ龜井武藏守木下平太夫垣屋隱岐守福原右馬助等と一万五千騎にて嶋津が出張りの口を押へたり四月十七日朝島津兵庫頭義弘使を送りよさせける兩城の守兵等が助命を救し給へらば城の明て渡さんとのと宮部善祥坊の此使の者のさま不審といひさき今夜

攻寄んどの計畧ならんと心付しうば人夫を近邊の山へ遣ひし竹木を切取らせ柵をふり乾堀二三間堀廻し手の者共に物の具させて敵の來るを待ちけたり案の如く今夜亥の刻島津兵庫頭義弘の二万餘騎にて根白の砦へ押寄たり善祥坊のうねて期したる事なれば一番餘と名乗て木戸口に走り出て突戦すれば手の者共も皆名乗けりて高名す義弘元より勇將あり手づから大長刀を提眞先に進めば樺山平田伊集院あどいへる勇兵とも面もふらず柵に付て攻取ふ善祥坊時分によきぞとひうへの綱を切て柵を堀の上へ押倒す嶋津が兵共柵下へ押付られて死する者八百餘人されども義弘是を事どもせず諸勢を指揮し死人の上を乗越て攻入程に夏の夜はや明て十八日の朝とい成りぬ雙方の鉄炮矢叫の聲秀長卿の本陣に聞へければ耳川を渡り根白の砦を救へんとすされ志を尾藤甚右衛門馬の轡にすがり義弘が今日の猛勇武田勝頼が長篠のうへり口にさも似たり決して卒忽の御舉動あるべからずと諫む藤堂與右衛門高虎一人手勢計りにて川を渡り宮部を救ひ戦へば黒田如水其子吉兵衛長政も進み來り村上彦右衛門を先へ走らせ唯今秀長卿の六万騎後詰するぞと呼はり跡より黒田父子栗山備後後藤又兵衛を先手とし川を越て討てうゝる秀長卿家人羽根田長門守も千餘騎にて川を

越突てりゝる小早川隆景も井上伯耆遠浦兵部を先手としめめきさけんでりゝる爰にて嶋津が勢九百餘人討死し義弘が甥三郎次郎忠親も踏どいまり奮戦と義弘も諸勢散々に討れしうべ詮方なく根白の圍みを解て近邊を放火したりけり猪の如くわれ廻り薩州さして落行ける黒田宮部小早川等の追討して鹿兒島まで付入にせんまからは義弘をも其道にて討取べしと秀長卿へや送れども尾藤達て秀長卿を諫めて兵を出さねば諸將も本意なく引取る頃高城財部も落城せしかば小早川の大隅へせめ入秀長卿黒田降須賀等はいよく鹿兒島さして飛向す日頃の鬼神をも搥くべき島津勢の惣大將修理太夫義久の肥後の八代邊に出張して京勢を追拂はんと武容をめぐらしけるが根白の戰敗北して義弘家久も鹿兒島迄逃入たりと聞ば力及ばず鹿兒島に引入て一族集り評議をこらしけるが五月初殿下既に千代川迄押詰給ふと聞詮方盡てぞ見へにける關白秀吉公元より反間の詭計を巧に仕給ふ事故去年よりして本願寺門跡光佐毘叢上人を薩州へ下し一向専修の法義をもて國人を教化せしめられしに國中の武士も農民商戸もみち法談に師依して島津が催促しても人數更に進まず其上家老の伊集院右衛門入道幸侃父子ハ八万石領し五ヶ城を預る程の大身なるが此者いつの程にか秀

吉公の計略に陥り内通したれば早く天命に應じ關白家へ降参ありて忠久以來奕葉の社稷を失はぬとを計らせ給へ天に違ひ時にさかひ叛賊の名を取て先祖の祭を絶し給はんや尤以てひが事ありと再三諫めたり義久年頃大和歌の道をも嗜み細川幽齋立旨法印を師と頼みしとも關白知り給へば幽齋をもひそかに鹿兒島へ遣はされ種々理を盡し降参をすめらる義久も今更詮方なく降参せんと評議を決し幸侃を使とし秀吉公へたよりしける義久數年の罪遁るゝ所なきといへども殿下寛仁の御沙汰にて助命せらるゝに於て一族永く殿下の臣僕と成り天に誓て二心をいだくべからずとすける秀長卿よりも福地三河守を添て金吾秀秋にたより殿下へうくと訴へしに關白幸侃を召て義久數年王威を恐れず九州に殿辱す其罪尤輕からず然りといへども鎌倉右大將家以來四百餘年運綿の舊家を滅すに忍びず殊更の仁政をほどこし薩摩大隅日向の本領舊の如く安堵せしめ義久々近年押領する肥前肥後筑前筑後豊前豊後六ヶ國收公し一族僕従悉く助命すべしと仰けれ幸侃大に悦び立陣りかくとす鹿兒嶋城中皆蘇生せし思ひをなご五月七日義久剃髮し圓頂方袍の姿と成り弟兵庫頭義弘中務大輔家久家老伊集院幸侃新納武藏守をはじめ各大平寺の御陣に來り拜謁し今より義久の隱居

龍伯と名改め家を義弘に譲り永く關白殿下の御恩天地と同一仰ぎ奉りて世々忠勤怠るべからずとぞ謝しにける殿下氣色うるはしく義久汝が罪科の墨染の妻に赦し朝頼卿以來奕葉の子孫を斷滅するに忍びず本領安堵せしむと仰けれ龍伯入道はじめ主従頭首再拜し殿下曠世の洪恩を謝し退ける義久が弟左衛門入道歳久の降參せざりしうへ關白跡路の後細川幽齋を以て義久に諭して歳久自殺せしめられしとぞ(九州記開談柏崎物語)

案ずるに原書此條につきて秀次卿大將にて日向を攻られ同國山崎の城にて秀康卿夜々りの高名を賊たり大三河志も同じ然れども日向表の戦ひ耳川根白高城財部等にて嶋津降參の前後に日向に進發せしよあらず大隅へも島津降參のち關白親征ありし様に志るす皆妄説之島津降參の時日向も大隅もみな安堵せし國となりいうてまたされに手遣し給ふ事あらんや

九州平均諸將分封の事

豊臣關白秀吉公の武蔵水の下きにつくが如く沛然として禦ぐ者なく九州既に平均すれば軍功の諸將等に各封地を分ち給ふ先薩摩大隅并日向二郡の嶋津が安堵しければ伊東高橋秋月

も日向の内にて安堵の地を賜ひ肥後一國の佐々内藏助成政に賜り陸奥守と改む筑前一國に肥前二郡の小早川隆景にたまひ龍造寺政家の肥前の内本領安堵し豊後の大友が舊領されば其儘下され豊前六郡の黒田父子二郡の毛利登岐守筑後下三郡の立花左近將監上三郡の毛利藤四郎秀包一郡の筑紫上野介廣門其外斑々の輩の數ふるに違わらず高橋紹運去年島津が大軍にうこまれちつともひるまず龍城し城を枕に討死したるを御感有て其子彌三郎統增(後に立花主膳正直次と改む)召て筑後國三池郡高橋の地給ひり叙爵して高橋主膳正と改む又丹羽五郎左衛門長重の今度も日向の國に於て家人共軍命をそむくと有とて先に給ひりも若狭國(一説に近江舊領二郡)收公せられ加賀國松任の地に移さる僅に三四万石之是長重が豊臣家に深く恨を合たるものもにて若狭國の淺野長政に賜ふ是の九万三千石あり(藩譜)尾藤甚右衛門知宣耳川根白の戦ひを兵庫頭義弘が鹿見嶋へ引取る時秀長卿追討せし義弘家久兄弟一人の討取べきをわながらに秀長卿を諫て軍を進めず軍機を失ひしむ其罪輕くらすきやつめ所領奪ひ取れとて忽に讃岐の國を收公せられ尾藤の浪人し宮部善祥坊其時の働勇々しうりければ感狀を賜ひり生駒雅樂頭親正の讃岐國を賜ふ阿蘇の宮の社人等も常に王



命武威を蕞如よし國中の群盜を集め近國近江を侵掠するよしあれば是をも攻らるべしと有りしを聞て社人等大に恐れ是も彦山とあなしく罪科を謝して誓書を獻じければ是もゆるされ殿下の九州二嶋の政務沙汰終りて歸路お赴給ふ御歸路の筑前筑後邊みそなひし給ひんととなれば龍伯入道一族家人を引具し太宰府迄御送りしこゝに茶亭を新造して種々馳應も旅中を慰め進らす殿下天満宮造營を命ぜられ六月七日博多に着陣し給ふ箱崎八幡宮社内に本陣をすへられ諸大名皆假屋をしつらひ旗差物を立あらし浦風に吹かひげ數千の兵船海岸をめぐり夜の篝火を焼つらぬ白晝にとならず爰へと更山海絶勝の風景なれば廿日餘り御滞留と遊興を催さる殿下社頭にて

千年をもたへみ入たる箱崎の

まつに花さく折にめはばや

八日よハ千宗易利休を召て茶宴を催されて後連歌一折とて幽齋法印發句のうまひるべきよしなれば

神代にもこえつゝ涼し松の風

幽齋支旨

雲間に遠し夏の夜の月

關白

仄かにも明行そらの雨はれて

日野新大納言

箱崎の松原にて納涼の遊せさせ給ひけるに歸らせ給ふとて松原に名残思ふ心つかまふつるべしとわれハ支旨

松原にとまり鳥の聲をき

うらやまれぬる歸るさの道

むかしハ此所泉州堺にもおどらぬ繁昌にて商戸十万余と聞へしが近年大友と龍造寺と年々の戦争にて兵火に焼れ悉く荒廢せしを憐み給ひ石田治部少輔長東大藏大輔小西振津守等奉行に命ぜられ昔の如く町割をあし市店を營むべしとて金銀もまた給はれば土人等歡林の聲巷に滿て其繁昌大かたならず七月朔日箱崎を立給ひ宗像に着陣三日豊前小倉に着せられ關の泊にて毛利右馬頭輝元一獻をさへげて千鳥の太刀を獻じければ殿下悦ばせ給ひ宵二頭を賜ひ忠光の刀を下さる大友も爰にて瓢箪の壺を獻ず四日より六日迄風のために滞留し給ひければ支旨

秋とふく風や關の渡泊り舟

と發句を奉る猶風荒けれバ周防山口邊遊覽し給ひ藝州嚴嶋の社頭に參籠し給ひ種々の報賽  
 行ハれ三日滯留せられ爰より又御船にて廿一日大坂へ歸陣着岸ありければ公武大勢御迎に  
 參る聲雲霞の如く不日の大功をぞ賀せられける是より先徳川家の御使本多豐後守廣孝ハ太  
 宰府より御暇賜り行平の太刀黄金十枚授けられ秀康卿軍中隨分の武勇諸軍皆感稱す其外  
 九州平均の旨委細に徳川殿へ演説すべしと仰らる同月廿二日其旨駿府に歸參し申上れば神  
 君も御悅ありて七月十四日駿府を御發駕八月四日御入洛關白御對面ありて九州平均のと賀  
 し給ふ八月八日神君從二位權大納言に昇り給ふ長九君駿府にて御元服有とて從五位下藏人  
 頭に叙任し給ひ即日侍從に御推任武藏守兼補せらる皆關白執奏し給ふ所之又關白名の一  
 字を進ぜらり長九君是よりして秀忠君との名乗給ひし之十一日神君京を辭し給ひ十七日駿  
 府へ御歸城あり十二月廿八日右近衛の大將をかけ給ひ左馬寮の御監に補し給ふ是鎌倉室町  
 以來將軍家の外是に任補し給ふとあし尤無双の光榮といふべし此頃關白殿下の徳川家へ松  
 下嘉兵衛吉綱を下さるべしと請給ひ京都へのぼせ從五位下石見守とあし所領數多授けらる

(潘譜一乃石柏崎物語三千石大二三河志同じ)是殿下其昔吉綱が父遠州頭陀寺に住しける松下  
 嘉兵衛之綱が家の奴にてあししける故なるべし世人松下家をも取立てたまはずバ殿下もと  
 沉寃賣の與介といふ名が削られぬ故なりと評しけるとぞ(藤孝九州常記九州記柏崎物語藩  
 譜閑談)

校三河後風土記卷第廿三終

正校 三河後風土記卷第廿四

聚樂行幸用意の事

天正十六年戊子台徳公に正五位下に昇らせらる是月五日之關白太政大臣豐臣秀吉公の九州二嶋既に平均し關八州をのぞきて皆掌握に歸し威風四海にかゝりやき尊故並々ならず何ぞ敬慮をも慰め天恩を謝し奉り幸に天下の諸大名會集して威をさしはさみ誓盟をなと子孫長久の計畧をあたひやと思ひ立給ひ室町將軍家房跡を尋て天下後世に盛名大譽を残さばやと奏聞に及ばれける當今の天正十四年十一月廿五日賚算十六歳にて万乘の天位につかせ給ふ陽光院の御子なりしが父の宮早くうせ給ひしより皇祖正親町院皇統をうけつがせ給ふ所王徳いみじき御事とされバ殿下一昨天正十三年の春より内野に御所構造せられ四方三千歩四圍の築地石垣山の如く鉄柱銅扉の高樓飛閣金葉珠簾日影に輝き雕鏤の玉虎融風に嘯き金龍の瑞雲に蟠る天下の寶玉奇貨を積貯へ珍木名花を植渡し秦の始皇の阿房漢の孝武の建章も是にハ過し目を驚らす結構四海の花麗を極たり猶大坂より大艦數百艘淀に置て金銀錢穀珍器奇玩數も限らず運漕し日々車五百輛役夫五千人の定にて道も去めハ持運ぶ事夥

し更に儲の御所の檜皮葺端の間興寄粉壁藩棟あたりもかゝやく計なり庭上の舞臺左右の樂  
 屋後宮永巷歌庭諸局百工心を碎き丹青巧を盡せば目馴ぬ事を見耳馴ぬ事を聞て世人驚く事  
 のみあり抑行幸昔關白家例の先躰多といへども今度の北山殿應永五年室町殿永享九年  
 の跡をば追ひれんとすされど亂世打ついき何事もすたれ來りければ風箏牛車の制度も今  
 智者まれなるより接家花族の説まろくにて爭論更にやむ時なし前田德善院立以奉行し  
 諸家の記録を搜索し有職故實の達者を集め衆議を折衷し漸々其議は去天正十五年十二月の  
 末に及び定めぬ依て駿府へ御使して兼々用意せられし行幸の注も漸く治定せられぬ今年は  
 是非少行はるべし其時には徳川殿にも御上洛有べしとの御事之徳川家よもこは曠世の盛典  
 なれば普天の下に朝恩を蒙る者冥加のため必上洛仕べしともし何事にては仰下さるべきあ  
 らば力を盡しつかまつるべしと御返答有て御使をば歸し給ふ京都には陰陽頭に仰て日時  
 の勘へを奉らしむ卯月十四日然るべし勘進しければ駿府へも又中村式部少輔御使として行  
 幸日時既に定まりぬ急々御上洛有べきよし仰進せられけるより神君にも早々御旅装を整  
 らる(原書此時大樹寺御參詣の事あり御禮等諸書又更に見へず今是を刪る)三月朔日駿府を

發興し給ふ御供は井伊兵部少輔直政本多中務大輔忠勝柳原式部大輔康政平岩七之助親吉本  
 多豐後守康孝を初とし御旗本の健士若干供奉したり同月十八日御入洛有ければ殿下大に悦  
 ひ給ひ博多藏幸頭水指小壺小鳥天目羽帚茶抄等天下の名物に精米三千俵を添て進せられ  
 十九日早々聚樂に於て饗應様々あり行幸以前に井伊兵部少輔直政大澤兵部大輔基宥ともに  
 從五位下の侍從叙任し酒井與四郎忠世右兵衛太夫に成り大久保新十郎忠隣治部大輔にあり  
 平岩七之助親吉主計頭に成り岡部長次郎長盛内膳正に成り牧野新次郎康成右馬允に成り鳥  
 居新太郎忠政左京亮にあり菅沼小大膳定利大膳亮になりともに従五位下に叙す本多廣孝も  
 豐後と稱せしめと叙爵は此日同じくゆるされたり(柏崎物語基業行幸備考系)

行幸付諸大名盟誓の事

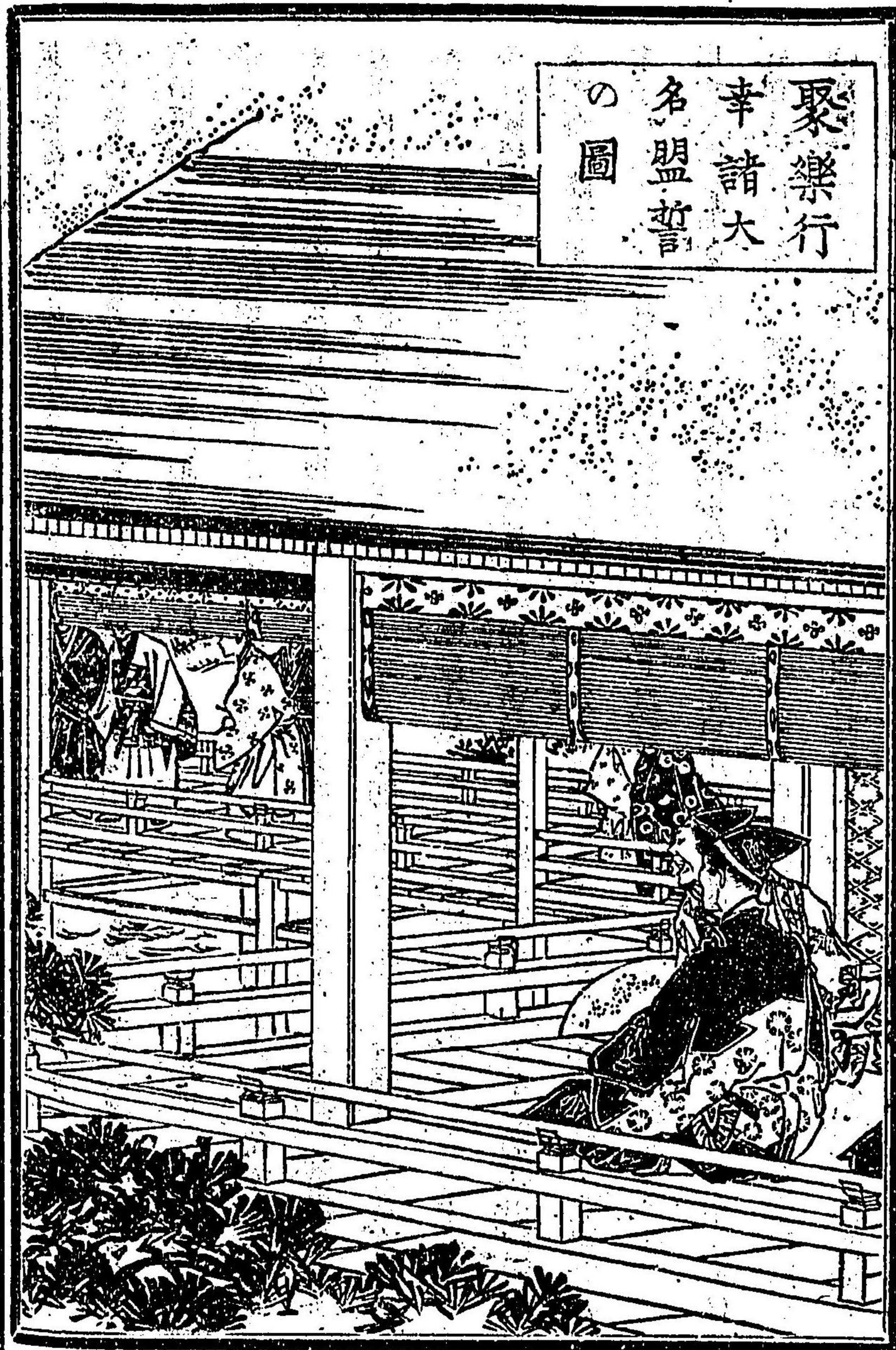
既に行幸天正十六年四月十四日と定りしうば當日禁庭に奉行職事悉具したるよしを奏す  
 やぐて主上(後陽成院御諱周仁)南殿に出御あり御袍の麴塵を召さる長橋の後廷道にて關白  
 御務をとり給ふ陰陽頭返閉を勤む園司の奏鈴の奏等例の如し殿下笏を鳴らし給ひ勅答のよ  
 しを皆給ふ御劍の頭の中將慶親朝臣御草鞋の頭辨光房朝臣風箏の御階の間に寄て左右の大

將御綱以下例の如く勤らる四足御門を北へ正親町を西へ聚樂まで十五町の間辻園の武士六千餘人襖に烏帽子にて勝皮太刀を持って道を差はさみ踰躰す折ふし和して清といへる卯月の雲晴渡り瑞風惠日日出度祥を顯ひたり行列の一番烏帽子着の侍百人二行に列す其次國母准后女御の御輿を始として大典侍局勾當内侍等凡車輿五拾餘丁皆下簾あり御輿副百餘人御供兼姿さどさす見へて花やきたり其後少し引下りて塗輿にてあひしける六宮（八條武部卿知仁親王）御方伏見中務卿邦良親王（後に邦房）九條左大臣兼孝公一條左大臣内基公二條左大臣眼實公菊亭右大臣晴季公徳大寺内大臣公維公飛鳥井大納言雅春卿四辻大納言公遠卿勸修寺大納言晴豐卿大炊御門大納言經朝公中山大納言親瑞卿白川神祇伯雅朝王等各隨身烏帽子着馬副布衣類の雜色笠持等を具す前驅左の宮小路右衛門佐秀直松木侍從宗隆冷泉侍從爲親正親町少將秀康柳原宮内權大輔資淳甘露寺權介經遠勸修寺權介光豐公御門左馬助久信民部卿侍從秀次施藥院侍從季隆橋本中將實勝西洞院左兵衛佐時慶唐橋才任遺藏人式部大丞秀實阿野侍從實政冷泉侍從爲將侍吉田侍從兼治大澤侍從綱光廣橋侍從庭田侍從重定鳥丸侍從光廣日野并資勝葉室藏人并頼宣三條少將實條五辻左馬頭元仲五條大内記爲良次に

近衛侍從某左の園少將基繼六條中將有親四辻中將季滿右の四辻少將隆憲水無瀬少將氏成飛鳥中將雅繼二行に列す其次に貫首万里小路頭辨充房中山頭中將慶親其次大將左の鷹司大納言信房卿隨身烏帽子着布衣馬副雜色笠持相隨右の西園寺大納言實益卿從者上に向じ其次伶人四十五人安城樂を奏す其次風箏前後駕興丁次に六位外記史以下役人共扈從す御後に近衛左大臣信尹公（初信基又信輔三藏院といふ）諸大夫布衣侍烏帽子着隨身雜色笠持從ふ次に織田内大臣信雄公從者上に向じ次に鳥丸大納言光宣卿日野新大納言輝資卿久我大納言教通卿駿河大納言家康卿大和納言秀長卿持明院中納言基孝庭田中納言重道卿正親町中納言季秀卿廣橋中納言兼勝卿坊城中納言盛長卿近江中納言秀次卿菊亭三位中將季將卿花山院宰相家雅卿三條宰相公仲卿吉田左兵衛督兼見卿高倉右衛門督永孝卿備前宰相秀家卿（和泉守直家子）其次關白太政大臣秀吉公乘輿前驅馬上二行に列す左の増田右衛門尉福原左馬助長谷川右兵衛尉加藤左馬助古田兵部少輔糟屋内膳正早川主馬助池田備中守堀田圖書助中川武藏守伊藤丹後守高田豐後守小野木總殿助眞野藏人頭時田相摸守安成兼津守一柳越後守平野大炊助溝口相摸守矢部下野守服部采女正赤松左兵衛尉石川出雲守栗林正忠中川右衛門大夫



聚樂行  
幸諸大  
名盟誓  
の圖



宮部肥前守木下備中守市橋下總守九鬼大隅守生駒主殿頭瀨多掃部頭天野豊後守尼子宮内少  
 輔多賀大膳太夫芝山監物稻葉兵庫頭富田左近將監前野但馬守右の石田治部少輔大谷刑部少  
 輔山崎右京進片桐主膳正脇坂中務少輔佐藤隱岐守片桐東市正生駒修理亮服部土佐守高畠石  
 見守小出播磨守石川伊賀守松浦讃岐守時田若狹守寺澤越中守村上周防守青山伊賀守明石左  
 近將監山崎志磨守垣屋隱岐守南條伯耆守河尻肥前守岡本下野守牧野兵部少輔古田織部正別  
 所主水正新庄駿河守奥山佐渡守峰屋大膳太夫柘植右京亮津田隼人正木村常陸介等其次雜色  
 三十人其次に隨身六人胡篋を具す左の森民部大輔野村肥後守木下左京亮右の前田主水正中  
 島左兵衛尉速見甲斐守其次に布衣侍朋録をひして三行に列す左の一柳右近中の石田空頭  
 右の小出備後守其次に奉替の牛二疋欄持番持貳人牛童兩人髪を下げ眉を作り赤の水干を  
 着し牛よの紅絹に纏物したるを着せ牛面を掛角を金箔を以て飾り淺黄の糸香を紅緒につ  
 けたり是の古例に無事と雖風流に設られしとかや其次に車を引番持笠持烏帽子若五百人  
 三行に列す次に加賀少將利家安濃津侍從信包丹波少將秀勝三河少將秀康織田侍從秀信金吾  
 侍從秀秋御虎侍康義康長川東郷侍從秀一堀北庄侍從秀政池田岐阜侍從輝政浦生松嶋侍從氏

郷丹羽松任侍從長重稻葉曾根侍從貞道大友豊後侍從義統筒井伊賀侍從定次森金山侍從忠政  
 井伊侍從直政細川丹後侍從忠興毛利河内侍從秀頼織田侍從長益前田越中侍從利長峰屋浦賀  
 侍從頼隆京極侍從高次木下龍野侍從勝俊長曾我部土佐侍從元親馬上にて供奉せど各布衣  
 侍烏帽子若馬馴笠したが其外陪從の輩は雲霞の如く一日曠の裝束は五色よ四ツの花鳥唐  
 織物かゝれた浮織物堅文浮文織取目もわやに立出たる表下襲の色目日影に匂ひて三吉野の  
 春の花龍田の秋の紅葉をこぎませたらん様よ優美花麗たどまん方もなく畿内近國の都鄙の  
 男女老少をわかつた行幸の道に躊躇してあかみ奉る既に風箏御車寄に渡らせ給へば右大臣  
 晴季公御簾をかへげ奉り主上ありたゞせ給ふ時万里小路頭辨光房御裾をとりて奥口になら  
 せ奉つり上達部殿上人みな便宜の所にたゞすむ殿下四足の門を入れて程あく殿上を御氣色を  
 とりて退給ふ次に殿上装束東あたらまり殿上人参り給へば各着座あり主上の御配膳は  
 正親町の三條宰相中將卿つかふまつる次に六宮には勅修寺右少辨光豊次に關白竹園接家清  
 華夷臣等には西洞院右兵衛佐時慶五條大内記爲良四辻左中將季滿飛鳥井左中將雅繼六條左  
 中將有親橋本左中將實勝五辻右馬頭元仲之月卿の配膳は水瀬少將氏成土御門左馬助久脩四

條少將隆憲宮小路右衛門佐秀直等勤ける初献の御盃より御氣色あり三献には天盃天酌  
 五献に益香盒七献に御劔を進せらせらるるより御着菓物金銀の作花蓬萊の島に鶴龜の飾  
 を契り松竹の操に習ひ千世万世を祝ひ奉る御酒宴酬にして西庇の御簾をかゝれば庭の  
 遣水流涼しく欄干近く魚の鱗ふり遊ぶも面白し木々の梢若葉の緑ふかく茂れる時に遅櫻一  
 木二木咲残りたるが風に薫れるゆかしきに春の名残したる鶯の聲老たるも哀がり岸の八  
 重山吹の露をふくみ河の杜若ゆかりの色深く波にうつれるさまささから漢帝の上林苑唐皇  
 の驪山宮の風景も是にり過じど人々興を催すほどに夏の日も招き暮そひて音羽山の峰の梢  
 より月花やりに匂ひ出たり主上も殊に感激淺うらず此良夜を如何と打あがめさせ給ひけり  
 關白御氣色うかいひ給ひ御遊を催さる一番の五常樂二郭曲三番太平樂箏の主上の御所作  
 り是に付て一條の古府四辻大納言庭田中納言四辻中將飛鳥井中將も箏をひく琵琶の伏見中  
 書王菊亭右府同三位中將笙の大炊御門大納言伯雅三位五辻左馬頭再發聲の四辻大納言持明  
 院中納言五辻左馬頭

德是北辰椿葉陰一一改

尊尊南西松花色十回

引返し此句を朗讀すいづれ妙なる詞の中にも主上の御爪音殊更優に氣高く殿下も感涙  
 に堪給はず風の涼しく雲晴わたり秋よりさやはき月の砂上の霜うと澄渡る御遊はて御盃  
 猶あまた度めぐり龍顔殊にうるわしかりければ殿下を始めとりくかこみ奉る夜もやう  
 く更行けば殿下退て寢殿に入給ふ母夜の夜のおましの御役またえもいはず心をつくされ  
 ぬ翌朝の上達部とくまうのぼりて朝政おこまひる兼ての御滞留と定られし敬慮も更よう  
 るのしく御氣色われは猶數々の御遊興五日に及ばせ給ふ殿下御裳瀧川の流絶す彌樂にさ  
 え給はん事ども計らひせ給ふ洛中地子悉く末代に至て相違なく應務とし禁中へ納むべし  
 と定らる其令條の文にいふ

就今度聚樂行幸一京中銀地子五千五百三十兩余爲禁中御科所一奉進上之一並米  
 地子八百石之内三百石院之御所に進上之五百石關白領六宮之進上之洛中地子米子  
 米銀子不殘奉進一獻之一次諸公家諸門跡於江州高嶋郡一八千石以別紙之朱印一令  
 配二分之一自然無奉公之輩は爲敬慮一相二叶之一可被仰付忠勤之族一之狀如件



天正十六年卯月十五日

秀吉

菊亭殿

勸修寺殿

中山殿

又神君をはじめ信雄利家秀次家等にも輪命のよしよて誓書を獻せしめ其余二十余人の諸大名にも誓書を奉らしむ其誓書は禁裏仙洞の御料はさらにもいはす宮門跡公卿殿上人料所を妨げ侵奪事有べからず別て關白秀吉公の信否を論せず違背すべからず是に背く者は天神地祇の冥罰を蒙るべしとあり十六日には和歌の御會披露あり

寄松祝

わきてけふ待かひわれや松か枝の

代々の契をわけて見勢部く

關白秀吉公

萬代の君が御幸に馴るれん

みどり木そよき軒の玉松

駿河大納言 家康公

縁たつ松の葉毎にこの君の

ちどせの敷をかそへてと見る

少將 秀康朝臣

玉をみりくみきりの松のいく千とせ

君うさうへんためとあるらん

井伊侍從直政

たちある千代のみどりの色ふりき

松のよひひを君もへぬらむ

此外宮と大臣月卿雲客九十二人の歌ども敷多ければらしつ披露はて御宴あり淵濱折櫃破子かど敷くまいり御興を催し給へば明方近く皆暇給りり退出たり十七日舞樂御覽有て後色くの捧もの金銀珠玉をかざり善盡し美つくし目を驚うさすはひふ事あり十八日還幸

又めてたし其備式びきの行幸秀長卿羽柴中納言秀次卿浮田中納言秀家卿清華せいけの上に列らせらるべき旨勅許しきのよしにて聞きへける（大成記御譜殿上記行幸記）

京使小田原參着の事

豊臣關白秀吉公九州既に平均へいぐんの後のち天下てんか悉みく皆版圖みまに歸きし四海一統しゅう掌握しやくせらるゝ所にひとりたい關八州くわんぱつしゅうのみ相州小田原そうしゅうの北條割據くわつぎよ者ものて其威風ゐふうに老たがはず抑おさく北條けいじょうが系統けいけうを導たづぬに伊勢新九郎入道長氏いせしんくわんといへるの桓武くわんぶの御流みながれにて北條相摸守時政けいじょうより二代だいにの高時入道たかときが子相摸次郎曾孫新三郎行長そうじろうの子にて母の伊勢備中守貞國いせが女あり備中の國に人どあり外戚ぐわいせきによつて伊勢を稱しめす（是其家に傳ふる系圖にある所かくのとし又伊勢家の系圖に早雲の伊勢守貞長孫駿河守貞高さだながが子とす又一説又駿河守盛貞もりさだが子とす是等の説是なるがとし）文明ぶんめいの頃慈照院將軍じしやういん（義政公御事ぎせいこうのみこと）に仕つかへや次の衆しゆうに加くはへられしが程なく致仕ちしして大徳寺龍泉庵だいとくじろうせんあんに塾居じゆうきし應仁三年おうえんの春京都を出駿河しゅんがに來り今川五郎氏親いまがはへ仕つかへまばく軍功ぐんこうをばげみたりき（小田原記に伊勢に荒木山中多目荒川佐竹大道寺早雲以上七人何れ共おどらぬ勇士にて一同に關東へ引矢修行ゆみやしゆけうに下りける早雲の今川氏親へ仕へ伊豆の國を切またがへけるに及

んで六人のものゝ家老けらうとなりしと見べき）明應元年三月今川より富士郡下方ふじのくにの庄をさづけ伊豆駿河の境興國寺きこくじの城を守らせける同二年九月上旬豆州龍山の城を攻取せりとて彼城かのしろにうつり住其上堀越御所すみのり（義政將軍舍弟政智伊豆の北條に住せられ其子茶々丸ちやくまるの爲に弑ころせらる其時早雲茶々丸を切亡ころさる）を攻落せりおして豆州一國まめしゅうを并吞へいどんし此時より伊勢を改あらたて北條と稱しめし同四年二月十五日上杉管領かみの所屬相州小田原の城主大森信濃守實頼まねよりを追落おし小田原にうつりて居城いりじやうとす文龜の頃上杉管領顯定あきさだに討勝うて其子左京大夫氏綱うぢのつなより氏政うぢのまさ氏直うぢのちかと五代伊豆相摸武藏上野下野豊房上總下總むつな此八州を押領おさし武威ぶゐを關東かんとうにふるひ更に朝憲あさけんを恐れず武命ぶめいを憚おそららず天正十六年五月關白秀吉公より妙音院みよねいん一國軒津田いつくわん津田ついで正富田ただとみ左近將監さしんを使つかして小田原へ下し普天ふてんの下率したせう土の濱ひらに有あることさら若干そくばくの國くにを押領おさしながら終つひに一度も上落あせざ朝聘あそへいの禮れいをささず人倫じんりんの大道だうだうを知らざるに似たり急いそぎ參落まして罪つみを謝あやすべしと仰下おほさる氏政承うぢのまさり仰おほの應承おほりぬ氏政近年多病うぢのまさによりて國軍こくぐんの大事だいじの委まかしめ給たまはる子氏直うぢのちかへ附與つたりと雖なども近年きんねんの内うちに八州はつしゅうの政務せいむを定め上落あせんとす所妙音院みよねいん強しやうて攻せけれバ氏政うぢのまさ不得え止事とどし然しからバ極月ごくげつの必かなし上落あせんとすより三使さんし堅かく其詞そのことばを難たがはずまじき旨約しきやくして小田原を辭こし

駿府へ立より關白の御説及び氏政父子返答の趣をす上て歸洛す(北條系圖小田原記)

小田原征伐濫賜の事

秀吉公小田原征伐を思ひ立給ふとあながち氏政父子八州を押領しあがら上落もせず聘禮行  
あはざる事を怒らせ給ふのみにもあらず去る天正十年織田殿明智光秀が弑逆におはせ給ひ  
し後甲信兩國空國と成りぬしは徳川家より本多百助に命ぜられ守將河尻肥前守を補佐して  
國中亂を鎮むべく仰遣はされたるに川尻癡心をもつて百助を殺して逃んどしければ國人等  
かね／＼徳川家御仁徳に服したる事故忽に川尻を討殺す此時甲州のはや徳川家御領たる  
べきを北條氏直國人の内通を得て甲州へ出馬し若神子にて百日に及び御對陣の所氏政が弟  
美濃守氏親は其昔駿州今川がもとよて神君と深く交り結び進ぜられし舊好により和議を  
扱ひ甲信兩國は徳川家御領と定め上野一國は北條が所領とし其うへは徳川家姫君を以て氏  
直の北方とし永く一家の親みを結びし約にて其後姫君小田原へ御入興有て目出度御和睦と  
しのみし後北條は既に郡内は進ぜたり上州の内沼田は徳川殿被官の眞田安房守が領して未  
だ北條が手に入らず早く眞田へ御下知有て沼田を引渡し給はるべしとて催促度々に及ぶ依

て眞田へ追々替地を下さるべき程に沼田を北條へ授くべしと御下知あれども眞田其命に隨  
がはず沼田は我等武功を以てかく切取たる地之容易に北條へ渡さん事思ひもよらずさりな  
がら信州川中島は上杉景勝押領の地あれば某手柄次第切取すべし是を替地に下さるべし  
やと念ふ乍去此頃は又秀吉公と御和睦以前あるにまた景勝とも矛盾に及ばれん事いかん  
り畢竟まづ此節は沼田を北條へ渡し替地は追て下さるべしと仰られしが眞田終に承服せ  
ず徳川家より大久保鳥居平岩等をさし向られ御追討あるに及び眞田の秀吉公へ内通し上杉  
より加勢を得て是を防ぐ(眞田昌幸の是より先秀吉へ内通したり依てまづ命を拒みた  
るとし夏日記に見ゆ)秀吉公其後徳川家と御和睦有りて今度妙音院宮田津田等を小田原に  
御使とし上洛の事仰下されしに御返答の詞いぶしく疑ひ給ふ神君の氏直の御掣の事故さ  
ましくと御取成有て美濃守氏親を使として上洛し罪を謝せべきに定めしうへ徳川家よりも  
案内として柳原式部大輔成瀬藤八郎を差遣らる氏親急ぎ上洛し八月十五日聚樂へ登り拜謁  
し當年中の民政上洛すべし然るに上州沼田の地の兼徳川殿より渡さるべき約定の所眞  
田安房守今に彼是と難進してどか北條の手に入らずいへば何卒殿下御威光を以て眞田へ招

田領を氏政方へ引渡すべく御下知給ひりきん沼田領へ渡し給ひらば氏政早し上落し拜謁し今迄延引の罪を幾重にも謝し奉るべしと氏規辨舌さのやうに申演たり秀吉公聞召徳川と北條の地境の事ハ我々のつて知らず後日に地理に詳ある家臣をのぼせて委細を訴ふべし其上にて指揮すべし氏政氏直の早し上落し恩を謝すべしと仰られければ氏規の有難しと厚く謝してぞ歸國せり九月に至り北條より板部岡江雪齋をさしおぼせ沼田領の事を委細に訴ふ（江雪後に秀吉公に昵近し板部を削り岡と稱す一本より根見又板部岡とす）殿下にて種々弊を達られし沼田の内奈久留美といふ所の眞田が代と墳墓の地あれば愛をば眞田方へ残し其餘のとくく北條へ下さるべしと仰下さる江雪齋難有しと御請し然らば氏政父子明年十二月迄にのきつと上落仕へしとすて歸りけりかくて天正十七年己丑はうつりぬ京にハ殿下の御寵ふかき淀殿の方いつつたならぬありしけるが彌生廿七日男子生れ給ふハ幡太郎殿と名付て殿下掌の珠と名ばしめしづき給ふ此淀殿とすはむかし浅井備前守長政の子にて織田殿の爲には御孫之殿下御悦の余り六月五日には府庫を開て年頃收貯ありし金銀錢帛敷を盡し親王上達部殿上人諸大名に分ち給ふ世に開白の金賦りとして今の世迄

219480

人口に増減するは是なり又其頃東山の太佛を營造せらるゝとて天下の巨木大石を召集めらる徳川家よりも富士山より大村を捜索して進らせ給ふ凡そ一木の費金千兩にあまれりとぞかゝる事にまきれて沼田の事も延引して秋にもありぬ七月廿一日富田左近將監津田隼人正を殿下に下し徳川家へ譲せられ徳川家よりも神原康政をさしそへられ其命を傳へしむ今度眞田昌幸も異議なく承服し奈久留美を残して沼田領一圓に北條方へ引渡す江雪齋出て請取沼田をば氏政の弟安房守氏邦に授けたり氏邦が被官に猪股能登範直といふ者あり猪股小平六範綱が後胤ありしが近年氏邦に屬して北條被官たり此猪股極めての田舎侍をのが主尺より外恐しき者なご思ふ無骨人にて沼田領の内奈久留美を眞田が持とまし置事只口をしく思ひ後難をまかへり見ず奈久留美へ押寄て眞田が番に付置たる鈴木左近を遣出し其地を押領す眞田は聞て大に怒り急ぎ其事を京都にうつと秀吉公以外に憤り給ひ既に去事納源高田津田等を使者よ下しける時十二月には上落せんと返答しなから今年に至り沼田を請取後も上落せずかまつさへ私に奈久留美を攻取る事以外の重罪たり兼てより誅伐せんと欲へども徳川家の謀者あれば是迄寛宥せしむ此上はゆるすべからず速に追伐を

加ふべしと仰らる北條父子めくと聞て大に恐れ存難左馬助康昌を京にのぼせ氏政父子早速上洛せんと用意する所去頃より氏直所勞により心ちらず月を歴たり快氣次第上洛して歸じ事るべし奈久留美を押領の事全く氏政父子の知る所にわらず邊鄙の家人公儀をわきまはず無骨の舉動して殿下の御不慮を禦る條恐入ては速に眞田へ返じおとふべし殿下一視同仁の寛宥を願奉ると陳謝すれども殿下怒り解やらず左馬助を禁獄して氏政への更に責問の條目とのうらさる(柏崎物語基業)

秀吉公北條父子の事

秀吉公北條父子表裏の舉動を大に怒り給ひ數傳の條目を小田原に遣はされ北條父子を誣責せらる其文に言

條々

一北條事近年甚如公儀不能上洛殊於關東一任我意其精之條不及是非然間去年可被加御誅罰所 職府大納言家康卿依爲三線者一種々願望之間以條數被仰出以得者御請に付可被成御赦免即美濃守罷上御禮上上事

一先年家康被相定一條數家康表裏の條々上上間美濃守被成御對面一上は境目等之儀被問召一屆有様々可被仰付一問家康郎從差越し得と御仰出の處江雪差上徒家康與北條一國切之約諾の處何如と御尋の處其意趣の甲斐信濃中城々の家康手柄次第可付付一上野中は北條可被付付之由相定甲信兩國は即家康被付付一沼田の儀は北條不及自力一劫て家康相違儀成寄事と左右北條出仕迷取之旨上上殿と被思召一於三其儀の沼田可被下下去上野の中眞田持來知行三分二沼田城に相付北條へ可被下下三分一眞田に被仰付の條は其中に有て城と眞田可相抱の由被仰定右北條は被下下三分二の替地自家康眞田に可相渡の旨被成御究北條上洛可仕どの一札出以其節被指遣御上使沼田可被相渡と被仰出江雪被通下一以事

一當年極月上旬氏政可致出仕の旨御請一札進上上之以因被被差遣津田軍人正富田左近將監沼田被渡下一以事

一沼田要書前取以上の右相任一札即可被上上被思召の所眞田相抱いなくなるみの城

を取表裏任以上の使者は非可被成御對面一儀以彼使雖被及生害一助命返遣の事

一秀吉若輩の時孤と成て信長公屬一藤下身を山野に捨骨を海岸に碎干戈を枕とし夜半に驟風にあきて軍忠を盡し取功をはげまると然に自中頃一蒙君恩一人に名を知る依て西國征伐の備被仰付一對大敵一爭一唯雄一刻一明智日向守光秀以無道之故奉討一信長公一此注進を聞届彌彼表押寄任一存分一不移一時日一令一上洛一逆徒光秀伐一願報一恩惠雪一會稽一其後柴田修理亮勝家信長公の厚恩を忘れ國家を亂し叛逆の條是又令一退一治之一訖一此外諸國叛者討之降者之近之無不屬一藤下一者上就一中秀吉一言の表裏不可有之以此故一相一叶天道一者我子既擊一登龍揚鷹之慶一成一捷梅一則關之臣關一萬機之政一然所氏直背天道之正理一對一帝都一企一奸謀一何不蒙一天帝一哉古一臨一云巧離不如此拙越一所詮一普天之下逆一勅命一雖早不可不加一誅伐一來敵必携一節旄一令一進一不可一劄一氏直者一事不可一廻踵一者也

天正十七年十一月廿四日

朱印

北條左京大夫とのへ

按ずるに此文詞家忠日記夏目日記等に異文に作る今伊達家に傳ふる所るかこのごとし諸條余錄に載ざる所る當時の書面目を失ふはざるもの之仍て今は余錄の文をこゝに收むる

氏政此條目を得て披見し弟陸奥守氏輝にむかひ是見られよ秀吉といふ猿面郎が身の分限を知らずかゝる過首の奇怪さよ元來尾州にて土民の子之遺州の地士松下嘉兵衛が奴僕となり杖履つかんで脚隨したる身が其身才覺衆に越たるにや又は前世の果報や織田信長が直參と成り木下藤吉といひて手を下したる高名はあけれども智謀かしく戰場にのぞみ度々勝利を得て信長に取立られ西國の大將にせられいづも羽柴筑前守と成り所々の大敵を打靡け信長が明智が爲に殺せられし世の騒ぎに乗じて毛利と和談し加勢を乞て切て登り主人信長の仇を報ずるを名として光秀を仇亡し信長の子孫を守立るかと思へば信長の子信孝をも討て織田家の老臣柴田に腹切らせはや天下をものか物とし土民の身を以て關白太政大臣にのぼり四海を并吞せんを無惡をばしらす日本開闢ののち未嘗有の事といかに決

季の東世あるとも天照大神春日大明神鎮護してあはもます神國にのみする無道人永く世を保  
 つて有々けんや秀吉天運盡て關東に攻下るはみづから滅亡を招く者に見よく長陣じて兵  
 糧つき兵糧たゆむを見すまじ我朝練したる大軍を以て一戰に退拂はんは輩の中の物を取  
 りもいどやすし昔平維盛等が頼朝卿を退討せんためはるく京より下り水鳥の羽音に驚  
 き退歸りたるに同じと瓜彈してあさみ笑ける關白は明春必北條退討有べしとてはや諸國  
 へ軍令を下されけり

來春關東陣御軍役の事

- 一 五畿内可為半役事
  - 一 中國並四國は同可為四人役事
  - 一 自坂到尾州一可為六人役事
  - 一 北國者可為六人半役事
  - 一 遠敷三甲借此五國者可為七人役事
- 右軍役之通用意不可有油斷來春三月一日秀吉令出陣者之仍如件

天正十七年己丑十二月日

秀吉在判

長東大藏大輔政家を惣奉行として下奉行十八年内より諸國代官所の米二十万石請取來春早  
 く船に積のせ駿河江尻清水の邊へ着岸し彼地に藏原若干構造して積蓄又其外伊勢尾張三  
 河遠江駿河五沙國の糠米を金三万兩にて買入是は直に小田原表へ運漕すべしと觸渡さる是  
 より先に大谷形部少輔吉繼を殿府へ使せられ(落穂禁此使を大谷とす夏日記には端午石田  
 三成は使すぞあり)北條氏政父子年來朝廷を蔑如し朝聘を終めず殊更關白殿下を欺く事度  
 々々依て追討せんとせらるゝといへども氏直は駿河大納言家康の御聲たる故首刻るに忍び  
 ず追討証引せらるゝ所彼等細細の舉動をなして不臣の所行既に顯はる今は朝敵第一  
 らば明春は殿下出馬して氏政父子誅せられんとす猶高懸を承はりたしとの事之神君此  
 旨聞召北條父子朝命に挑みず逃犯の罪尤重し某も度々氏直を諫る所氏直の領事すれ  
 ば某氏政朝敵にして更に某が詞を用ひず氏直も某が所を領掌すれども父に違ひ某り詞  
 々の難りもども難めるゝと此上にも氏政洗非を悔て歸順の志を顯しなば某幾重にも  
 殿下實亡の御妙法を願はんとしと思へども氏政もらに愚昧の心を改悟せず不臣の志を決した

りて見えぬ私わたくしの縁ゆかりを以て天下てんかの公法こうぽうを曲まがむとの天命てんめいを恐れざるに似たり今の兎角うしかくの事論じろんすべきにあらざる某領國手寄あつちのての事なれば三遠駿甲信五ヶ國軍勢を以て御先手を勤むべしと御おん意旨いしに及およびければ大谷吉繼おほやぶきちく畏おそりて立歸り其旨そのいしをけるにより關白大に悦よろこ給ふ神君にも十二月初日駿府を出いきたし(編年十一月廿九日に作る)九日大坂に着つけ給ひ此時關白大坂にありしければ小田原征伐の御軍おんぐんを以て終り十二日京都を御發おんはつ給ふ有つて十八日駿府に歸らせ給ふ酒井宮内大輔家次さかゐのみやうだいほふけを奉行しやうぎやうとし三遠駿甲信五州の軍勢明春早はく走集しゆしゆるべきむね令しんせらる(此條配裏日記譜錄餘錄其業編年)

小田原城中軍議の事

天正十八年庚寅正月二日相州小田原城中にて北條氏政氏直父子始め宿老ども會合して政事始評定をすなはしける是毎月二日十七日の兩日評定の式日なるが故に今日の集會せる宗徒といふ伊勢備中守定宗大和兵部少輔晴親松田尾張守憲秀同肥後守憲範山角上野介定方小笠原清盛守長範山角紀伊守定勝芳賀伯耆守綱可安藤豐前守正季板部岡江雪齋入道等之各評議しけるの扱も主君御上洛なきことを關白憤いらいり給ひ當春は必征伐あるべしとて去

年諸國へ檄文を下され數万の大軍催もよほせありて三月初日には京勢出陣なりと關老の説かまびすし夫に當家は油断して箱根山大井川等の切所をたのみ防戰の用意もせずも關老の説のとくあらんには當家の危急存亡の秋之急いそぎ會議をこらざるべしとて京都より諸國に頒布せられし檄文の寫並に國々より糶米運漕の風説等迄悉く演説す氏政氏直是を聞ていまだ詞も出ざる所松田尾張守は居丈高に成なつてやけるは各のすさるる所も一理なきにあらず去いながら當家は京よりはるくの遠國しかも箱根大井川の險難を要害とす獲冠者が不敵の業恐して狼りに東征を思ひ立たども是蟻螂が蜂といふ者之昔も平相國清盛が頼朝卿義旗を揚給ひしを討亡さんと嫡孫三位中將維盛に十方餘騎を添そて下されしに富士沼の鳥の羽音に驚おどりたり又建武年中にも足利等持院將軍(尊氏)の事(新田義貞と牟橋)に及び義貞關東へ攻下られ路々の取替打勝れ既に箱根竹の下迄攻寄られしに竹の下の取替大敗してやうやく京へ遊登りぬ是偏に地の利を得たるのみならずむかし國の強弱を論ずるに日本國を以て關東八州に對たいしたる八州を以て武藏相模に對たいすと言今八州は皆當家の御分國地の利兵の剛強凡日本は肩を並らぶる者有べからず後面即上方の關兵に勝ほこり其利に乗じ當家の堅



甲利兵雲泥万里の相違をしらずも、猿而郎攻下らば此方は小冠者原に棒一本授けて口々に差向ば更に不足はあらざるべし、又軍糧を駿州迄運漕するとは聞ゆれども、其庶實分明ならず、某が察するに猿而郎詐謀を第一とすれば、斯の如く風説を言ひせて北條父子驚きて上洛せん、其時上洛延引を罪にし、八州の地を削り旗下に屬せんとの謀略と、憲秀が見る眼相違有べからずといふ、伊勢備中守是を聞憲秀すさるゝ所いささよく聞へし、得共某所存の是に添なり、秀吉が事聞及ぶ所の如きは、うりそめにし、出せし一言を變せずとこそ既に九州征伐の軍勢も三十万と承はる定めて、今度關東發向も大軍のとさるべし、山河の險阻をたのみども、大軍に切所あり、野山も海山も一面に押寄、防禦の術あるべうらず、其時敵の生取と成るゝ攻伏られて降参せんより、只今先非を悔て罪を謝し、徳川殿を頼み、幾度も禮を厚く仰解れ、本領安堵なぞ、うなりるべき、徳川殿の仰い秀吉も違背せずと承る幸に、氏直公の御覽君の事なれば、徳川殿もなぞう愛憐し給ふ事なかるべきも、し徳川殿一向に扱ひ給へんに、此事成就せずといふ事あるべうらず、夫ども是非京勢を待て一戦せられんとならば、氏直公の小田原の本城をうため給ひ、氏直公に御出馬あり、松平周防守が守る沼津の城を攻取て、御本陣となされ、美濃守氏

規陸奥守氏輝、兩將を先手とし、富士川を隔て敵を引つけ、一戦し給ふり、又三嶋に御旗を立てられ、黃瀬川を隔て草加原まで取詰て一戦を持給ひ、む時に(夏日記)敵の長途をへたる、勞兵所々に駈惱まされて、敵より和睦をうけしめ、ん、此兩様御思案有て然るべしとすければ、一座の輩皆此議尤なりと同意するを見て、尾張守頭を振て大に怒り、伊勢がさるゝ所の大軍を恐れ、味方の地利兵の強弱をわきまへざるに似たり、又九州の軍と、播磨の軍を一同に論せん、思慮淺は、あらざるや、古語にも天の時、地の利にまうす、地の利、人の和にまうす、とこそ聞へたれ、九州兵多しといへども、國々割據の將士分れて、方々又暮時、是を棟梁する、良將あり、其故に九州の兵、不和なれば、戦に望み勝べき利なし、主將備り將士多しとこそ皆一人の命令を守らば、猿而郎が奸智詐謀を巧に用ゆとも、たやすく平均のちも得べうらず、東國の是も異さ、八州の主將の北條殿、御一人、八州の將士の皆御家人、是和兵なり、地の利、日本一の山河の險固を得たり、是人和地利とも、九州の軍と同日の論ならず、又今更徳川殿を頼まんも、口もしき事ならずや、徳川殿の被官とありし、眞田を逆心させ、沼田領をば、此方へ乗取て、其替地をば、徳川殿より出さしめし、皆北條家の仕業なり、かくの如く仇せし事をすて、身の難儀を通れむと

す拂て座を立や君臣とも各鹿角いふ者もなく其日の評席の退散せり

山中並山籠城用意の事

此後小田原城中防戦のといひ出す者もなく茶會連歌の集會に大宮人も暇ある春の心ゆ  
たけしと昨日日影けふの春雨何心なく日を送る間に秀吉公はや京都御出陣の風説日本中の  
軍勢が只今押来ると足本より鳥の飛立たる如き騒動斜めらず宿老頭人とぞ集り先日松田が  
大言の實の忠告とも思われず敵とやいへん味方とやいへん戦にも防戦の用意こそ肝要なれ  
どて伊勢山角小笠原等の者共氏政の前に出ていまだ君にのまろしめさずや秀吉大軍にては  
や京都を進發あるよし風説専らあるに味方緩くとして合戦の用意もなく事既に急なれば切  
所々に新築を設も暇もあらずせめての是迄の城くへなりとも軍兵を籠置れ敵を遮る術  
なくてはあなふまじ速に御下知を加へ給へとせせば氏政父子俄に驚き防戦の評定あり  
先箱根山中の城にはむかしこの關所跡代山崎といへるを取入て要害を設て山中はもとより松  
田尾張守が甥松田左兵衛太夫清秀此年頃守りしが今度上方の大軍を引受て防がんには清秀  
が小勢にてあふふへからずとて相州耳繩の城主北條左衛門太夫氏勝に間宮勘定前守好高朝倉

能登守景澄を差添て加勢とせらる此氏勝は左衛門太夫氏繁が子にて母は氏康の女なれば氏  
政が爲よは甥なり正月廿日氏政父子は氏勝好高景澄の三人を召出し今度京都より秀吉大軍  
にて攻下るとの風説専ら山中は京勢手寄の城あれば最前に防がてかなはぬ味方の持城故  
尤大事の城之氏勝さらびに兩人を加勢とす随分堅固に籠城して軍忠を勵むべしと益をさ  
し氏勝に兼氏の刀好高に國吉の刀景澄に同作の脇差を授け氏政重ねて三人へ令しけるは汝  
等三人數年の武功は今度山中の一擧に有りかまへて油断すべからず守將松田清秀は小勢な  
る故汝等三人加勢とすよく忠戦あるべしとあり間宮好高進み出て君聊も御心を勞し  
給ふべからず某命のある程は城を敵には渡すべからずと詞涼しく拂て退出す朝倉能登  
其席をば退出し遠侍に出て列座の諸士へ高らかにすけるは北條數代の御運も末に成りぬ今  
いはや滅亡近きにあらざるべし山中城は要害も淺間に壁も全からず大軍を引受て防ぐべ  
き地にあらざる所へ一族舊臣等を遣はしていたづらに討死せしめらる今更やて詮あき  
事ながら北條家の政事近年は非道のみにて百姓町人迄上を怨み歎く者若干之是皆松田尾  
張守が讒佞を氏政御父子信用し給ひて政道混亂するが故とされば北條を亡す者秀吉にあら

ず松田が所爲なり惣して其家滅亡の時至れば謀臣君寵を得て政權を弄び忠直の臣罪を蒙り遠ざけらる故に家格古法に次第に廢れ新苛政の追々増益す近く今川氏眞の三浦右衛門を頼して其家を破り武田勝頼の長坂跡部を愛して其國を失ふ是等のみな我等眼前に見たる事之今松田が行末も思ひやらるゝ事之先日伊勢備中守がやける諫のゆゑしき忠言あるを松田説破して時日を延引し今此期に及び俄に砦を補理し城壁を修理するの賊を見て繩をきひ敵に逢て矢を矯るたどへの如し我山中に籠城するとも生死いかにともさだめがたいたし義のわたる所死を一途に決し存亡を天運に任せんと高言して退きたり二月十六日に上州館林の城主北條美濃守氏規を小田原に召寄て氏政父子對面し今度豊臣秀吉大軍にて東國に攻下の事虚説にあらざ氏規の豆州韮山に籠城し敵の鋒を挫き衝を折る謀略を頼入所之當家の安否此時之ひたすら氏規の智略を倚頼する外なしと懇に命じける此時氏規聞て御誕承まはりぬ只今迄益なしといへども氏規先に上洛して和睦の契約とのへたり其時早々上洛有て先祖早雲千辛万苦して漸々切取給ひし國々を失ひざらん御計畧專にせらるべきに説諛佞姦の松田尾張が無智無謀の詞のみ信用し給ひ忠臣を遠ざけられしなりる危難に及び

たりせめて伊勢備中が詞を用ひ給ひ徳川服一向に頼み罪を謝し給ひ加程の事も及ぶまじき之近年軍國の大事松田一人に委任したまふ故將卒士民迄怨憤をふくめ合戦に臨はりしき事いひまじきなり去あから氏規が身に於て其人数にいひのねども正しき御運枝北條氏を穢すうらみの存亡を社稷どもにし某が一命わらん程韮山城を敵の馬蹄にかけまじくしと切て退けば天晴ゆゑしき武將かなど見聞聲感せぬ者なかりけり

小田原勢持口配分の事

北條安房守氏邦の武州鉢形（原書にの氏邦小田原籠城す家忠日記夏日記等にの鉢形之）此氏邦の氏康の三男童名虎壽丸是より先武州秩父郡岩田天神山（一名井戸）の城主藤田右衛門佐重利上杉管領の旗下成りしが上杉亡し後北條に屬し本領安堵し虎壽丸を養ひて新太郎氏邦と名乗せたり氏邦後に安房守と改め養父重利死し居城を同郡横瀬の根古屋に移す此所畠山二郎重忠隱生の地にて城下の川を産川と云重忠が産湯に用ひし故の名とす此所要害第一の地あれども深山にて村里を隔て便りあしければとて長尾爲玄入道が取立たる小倉郡鉢形の城を再興して爰を居城とせしうへ今度も鉢形にて防戦せんと家老井上三河守

正氏黒澤上總秋則嶋村近江三上外記以下軍兵數千籠置又猪股能登範直が弟に小平太範宗の  
 秩父梁瀬の後虎ヶ岡の城を守りて大手なればつぶら良田村を堀切て柵をふり塀を塗り要害  
 嚴しくまふけ秩父山中の内日尾城に誣訪遠江に郷士を添て守らせ根古屋の城に渡邊監  
 物淺見伊賀守其子左馬助に守らせたり此城より甲州より山傳にての直道なれば徳川勢甲州  
 の手寄とて一番に押入事あらんかどて最初に人數を籠用心專ら堅固之北條が本城小田原に  
 俄に入州の人數を呼集惣搦の外に乾堀をほりまゝし其上に土居を築立橋に門塀まで  
 其便に從て心を盡して修築す扱持口の番手の先宮城野口へ東野山室岩崎の三城主松田尾  
 張守憲秀（宮城野口家忠日記宮城に作る）武州松山城主上田上野介朝廣（政康入道安閑齋  
 が子）上総國万喜城主土岐右京大夫頼春下総國小金城主荒川豊前守國清同東金城主福嶋  
 伊賀守勝廣同相馬城主芳賀伯耆守綱可安房國の正木庄兵衛弘正以下其勢都合一万三千餘人  
 湯本口へ相州の千葉新介重胤が幼弱故名代として原式部大輔胤成上総刑部八千餘騎下總瀨  
 原城主椎津隼人佐行憲關宿城主篠田中務大輔政豐等竹鼻口（一本竹浦）へ武州八王寺城主北  
 條陸奥守氏輝（一本氏忠）是へ氏康次男之同忍の城主成田下總守長氏弟左衛門佐長忠一族佐

渡守長綱肥前守長照相州常麻城主常麻豊後守同又十郎下野壬生城主壬生上總介綱房下總皆  
 川山城守廣照其勢都合一万五千餘人又齋田口の武州岩槻城主太田十郎氏房に諸方の勢二千  
 餘騎添て守らしむ此氏房の氏政の三男之太田美濃守資正三樂齋入道が養子として岩槻城を  
 守りし之久野口をも同じく兼たり小瀬口へ下野國佐野城主北條左衛門佐氏忠千七百餘人に  
 て守る氏忠の氏康が五男にて佐野修理亮宗綱が家を繼し之早川口に河州戸倉上州 麻橋  
 笑輪三城主北條右衛門佐氏光（諸書に氏康に作る系圖氏康といふは見へず右衛門佐といふ  
 の氏光之）二千三百餘騎にて守る此氏光の氏康が六男之相從ふ難には上州倉賀野城主倉賀  
 野左兵衛木部城主木部宮内少輔白井城主小見小四郎免取城主高瀬純伊守等八百餘騎之小田  
 原城の北條五代九十餘年の在城遠兵四万五千餘騎佐倉羽田市川藤清高井小幡等の軍勢を取  
 入て糧米玉藥等用意尤厚し其外八州の城に軍勢を籠置後詰の散兵瀬連漕の計策何に  
 不足き又互相の海白に下田に清水上野介正令江戸攝津守朝忠を籠田子の皆へ山本信濃  
 守に守らせ駿州善徳寺の北條七郎氏孝に内藤大和をそへて守らせたり此氏孝の氏政の四男  
 ありりとのとくの手配り整ひ京勢恐るへ足らずと待居たる形勢後の知らず先勇く敗ぞ見

えけるされども關東にも安房の里見左馬頭義康其外常陸の佐竹野州の宇都宮結城等の内  
京都に通款し殿下御下向あらば殿功を勵まむと待居たり(基業編年)

長九君御上洛付關白出陣の事

長九君(白徳公)の御事(一)いまだ關白御對面なれば小田原御進發以前に御上洛あるべしと  
て此正月三日駿府を出給ひ従ふ輩の井伊直政酒井忠世内藤正成青山忠成之同十三日御入洛  
おれば關白悅給ひ御迎として長東大藏大輔を參らせらる十五日長九君の聚樂にわたらせ  
らる時に御歳十二之關白御對面有りて御悅斜めならず尼孝花主に御扶持すべしとて奥殿  
へいさぎのれ御衣服御佩刀迄新に改て召うへしめ關白みづから御手を引て表へ出られ大納  
言に成長の子有りて万事おどなく悦入以田舎風を改め都ぶりに致うへす大納言無待  
兼らるべし早し歸國すべし大納言正直ある人にて幼き者はるくと上洛させらる其實の  
實に送られしと見たり我輩も疑念なし何ぞ實を用ひんやとて直政はじめ供奉の輩へも  
黄金時服賜りて暖下さる直政等大に悦び人々打つれ長九君を護送し十七日京都を發し廿  
五日駿府へ着にけり是より先き神君北方朝日姫君大政所御不豫の事によりて都へ登り給ひ

聚樂の館にわたらせ給ひしがおもく惱み給ひ此十四日かくれ給ふ御年の四十八とぞ聞へけ  
る殿下東征の前されば其事秘して表へ仰出されず程へて東福寺に非り參らせ南明院殿と  
證し奉る(文照院殿の御代正徳五年御供料五千石よせ給ふ)此程神君に長九君早く御歸  
國ありしうら關白我が領内諸城を借られんとの心あるべしと仰られ本多佐渡守同作左衛門  
に命ぜられ御領内諸城を掃除し道橋を修造させ給ひけるが果して三日過で關白自筆の御書  
を以て諸城を借給ふべしと請れける爰に於て人々御賢察神の如しと感じける關白此度相州  
北條征伐のため關東へ發進せらるゝとて三月朔日參内あり久しく絶たる古例をもちし節刀  
を賜り給ふ又出陣の連歌百韻興行あり發句の紹巴

關越へて行末さびく護り給ふ

斯て五畿南海山陰山陽北陸近江美濃伊賀の軍勢追々に發向す都合其勢廿二万余騎とぞ京都  
聚樂の留守の毛利中納言輝元卿大坂の留守の大和太納言秀長卿尾州清洲の小早川中納言隆  
景卿三州岡崎の留守の吉川藏人廣家と定めらる織田内大臣信雄公も神君もさき今度御出陣  
おれば其城々の西國軍勢に守護させらる吉川依て本多作左衛門より城を誦取て守る其外東

海道城々より皆上方勢を籠置かる二日(編年)關白京都を出立たまふ其さま殊にめぐらりも  
 り齒を黒く染作り髭をうけ黄金作りの大刀を帯て馬にのらるその外軍装の花麗尤諸人耳  
 目を驚りす貴殿男女見る者堵の如し三日近江の八幡山に着給ふ先陣近江中納言秀次卿駿  
 州蒲原に着陣す神君にの是より先二月十日駿州蒲原を御出馬あり長丸君も伴ひ給ふ三遠駿  
 甲信五ヶ國の軍勢二万五千余人今度へと更軍令十三ヶ條仰出され教令尤嚴重なれば道中  
 人民の煩ひなし先手にはや由比倉澤邊へ着陣し十日に伊豆境駿州長窪の城まで御動座あ  
 り此猛威をや恐れけん豆州戸倉の城を守る北條右衛門佐氏光々軍勢又泉頭の城を守る大藤  
 長門多目某類々激を守る大石越後等皆々城を捨て小田原へ逃歸る關白の三月十日に三州吉  
 田に着陣せられ爰にて徳川家より種々の響應行はる十一日此所を進發せられんとありし  
 に御家人伊奈齋藤忠政連日の雨ゆへ晴を待つて御出馬あるべうもやとすければ殿下開召軍  
 法に前に川有て雨降時渡らざれば後に渡る事難しと聞ゆ汝が思慮いふんと問給ふ忠政承  
 り夫の小軍の事なるべし大軍暴雨を犯して川を渡さんとするに人馬溺死少うるべうらず敵  
 是を聞て十人を百人とも風説せば敵の心に勇みをつけ味方の心應ずる事ある者ことや殿下

大に感じ給ひ徳川家はのよき人多しとて三日滯留せらる十九日既に關白駿府の城に着給ふ  
 所に石田治部少輔三成ひそくに殿下の御耳に口よせ徳川の北條と縁者なりいなる密計あ  
 らんうもはかり難し其城へ泊り給はんの謀拙に似たりといふ殿下忽に疑心を生じまば  
 らく遲滞せらる淺野長政大谷吉次聞て是の勿躰あし徳川殿に於て更に詐謀あるべうらずと  
 色と取なして府城に入参らす山海の珍善を盡し美を盡したる御響應にて殿下も大に悦給ふ  
 神君の長窪城府城におりして殿下に御對面有て廿二日に歸り給ふ殿下廿三日清見寺に着  
 陣あり廿七日に又長髭を作り金作の太刀誠希代の姿にて沼津三牧橋迄着給ふ先手の諸大  
 將御迎とまて浮嶋夕原迄参り謁すべし尤從者數輩の益なれば各小性四五人花やかに出  
 たせ参るべしと有けれども俄の事故風流を盡しがたく衣裳の粧ひいふにも異形に輕を專  
 らせせし廿八日に關白諸大將を具して敵地の要害を巡見し給ひける氏政父子定て大軍  
 にて駿豆の境に打て出烈しき防取あるべきと思ひの外更に出軍の形勢もあらざるいふ様  
 ぶらき計畧ある事やと諸將不審しけるが兎角今度の長陣なるべしと評議す關白關召我も  
 左様に思へとも徳川大納言に當時比倫なき軍慮の知識定て衆人に越へたる計畧あるべし

其軍議を聞んと神君を招き給ふ諸大將是をき、徳川殿古今すぐれし智略の名將たりといへども此城攻の計略に於て、別に思慮有べきにあらざるとさしやき合て居たる所へ神君わたらせ給へば、關白大に悦び今度城攻に於て徳川殿の智略指南を願ふよし宣へば、諸大將も徳川殿いりある奇計をす出さるゝやと堅唾を吞で待居たり（夏日記基業柏崎物語）

正校 三河後風土記卷第廿四終

正校 三河後風土記卷第廿五

神君御軍零付浦生馬賊の事

天正十八年三月廿八日豊臣關白秀吉公相州三枚橋草加原邊巡見あり諸大將を召集め今度小田原城攻の軍評議の其中へ神君跡よりあかしまじければ關白大も悦給ひ大納言に幼弱の昔より海道一の弓取と其名を得られし名將まとしてや數十年の武功を積んで今の日本に肩を並らふる軍容の智識此城攻の計略を指南あるべし承りたしと宣ふ神君聞召抑北條家早雲以來數代の弓矢老功の者あきにあらず昨今兩日の内に早速討て出一戦を遂へべき事なるよ今に於て兵士一人も出されば此後とても出戦すべからず城兵にはや奇手を恐るゝと見へて此跡ならば此方より惣軍を三手に分て一手は韮山一手は山中を攻んに於ては我持城を攻られて後備せざる者はよもいひじ必小田原より討て出べし其時残る一手を以て戦ひしめらるべしと仰ければ關白大に感稱せられ北條後詰せば此手の徳川殿を頼み進らすべしと仰らる神君聞召いふにも某請取すべし九年以前甲信の境にて北條が三四万の人数に某一方の兵を以て對陣し七月より十一月迄の間に終に一度も勝利を失はず然りとはいへども敵の

地戦じりも無双の輪祖を便りとしひりある計略せんも計りたし某も仕損じせよ二の  
 手の勝利を御分別あるべきこと仰らる關白高らるに打笑ひの二手の秀吉浦合たり徳川殿を  
 一番進ませ秀吉二の手を手に於て日本いふ迄もなし大明朝鮮に攻入ども恐ろしき  
 事なしと笑ひ悦び給ふ關白重て韮山山中兩城を攻んに北條後詰に出ざる時如何と問給ふ  
 神君聞召其時兩城中是非一城の攻落へし其勢をゆるめずして我等の手勢を具し山中の古  
 道と匿て小田原近郷酒匂早河邊へ出張し陣を取まき北條に屬する八州城の通路を押へ  
 隔つべし其時殿下の惣軍勢を以て小田原へ押詰給ふべしと仰らる關白聞給ひ酒匂筋に敵城  
 になしやと尋らる神君鷹巢足柄新庄とて三城有り仰らる關白其城如何計らひ給ふや  
 と問はるれば必逃去べしと答給ふ其證據如何と問給へば先年武田信玄二万餘の勢にて  
 小田原近邊へ攻入し時さへ皆逃去したまはして殿下の大軍を見ば風を望て逃去べしと答給  
 ふ關白もしも勇將勤辛にて立籠り逃ざる時如何と宣へば神君夫れ某望む所の大幸之速  
 に押寄攻落へし九年前の對陣の時も五六百の人数にて手間も入らず築井の城を攻取て守將  
 内藤周防を討取關本の城にて大道寺を追落しぬ彼等が弓矢手際知りぬきていへば某が自身

向ひんに恐るゝ事少しむなしと答給ふ關白いよく感心し給ふ是を聞諸大將誠に殿下常  
 と徳川の軍慮の智識と仰らるゝ事御尤まりと感ぜぬ者なし關白其夜の沼津に歸り給ひ  
 又諸大將を召て韮山山中の地圖を以て虚實を料り利害を辨じいよく神君の仰に隨ひ明  
 日二手に分てまづ山中の寄手の近江中納言秀次卿を大將とし中村式部少輔一氏田中兵部少  
 輔吉政堀尾帶刀吉晴山内對馬守一豊一柳伊豆守直末三万五千餘騎堀左衛門督秀政木村常  
 陸介重茲丹羽五郎左衛門長重長谷川藤五郎秀一の日金峠より南方に出て山中寄手の羽取た  
 るべし徳川殿の北方山中古道より押て後詰の勢を請取て働らるべし韮山の寄手の北畠内大  
 臣信雄公を大將とし浦生飛騨守氏郷峰須賀阿波守家政福島左衛門太夫正則細川越中守忠興  
 中川藤兵衛秀政森右近太夫忠政生駒駿岐守一正戸田民部少輔勝重三万餘騎早く攻寄人数損  
 するとも一旦に攻落すべしと夜中も福原右馬允直高を以て諸手へ觸渡さる其頃浦生氏郷の  
 是迄熊毛の棒を差物とせしが佐々成政が三階菅笠の馬印に收めんとこゝ關白聞召成政の信  
 長公の御家にて無雙の剛者と世に知られし勇士あり彼が馬印おぼるげにゆるしがたしと  
 うへども氏郷に於て苦しうらす今度の小田原征伐一段に勇を顯はすべしとてゆるされた



り是の關白出陣以前京都にての事ありしが氏郷の大に悦び我今度東國に下らば戦功乘に超  
 ざらんに討死すべしと思ひ定め書工を呼寄て平生の肖像を繪がせ香華院に納めける町  
 野左近繁行が妻の氏郷の乳母なりしが是を見て驚き涙を流し君の今若く盛りの御程あるに  
 ちと御影を寫留御寺へ納め給ふぞやいまのしき事とすければ氏郷打笑ひいやとよ我今度  
 必死討死を心掛て出陣すも東國にて討死せば幼稚の子供父の面影をも見知るべからずと  
 思へばかく我影を寫留る之汝のあがらへて我子供等成長せば此よし告よとすされしに乳母  
 のいよく涙にくれて其勇志を感じける尤關白も聞傳へ給ひて感稱せらるゝ事淺からざり  
 しとぞうくて氏郷の所領勢州松坂に下り軍勢を催促し出陣に及び殊更軍令を嚴にしたるに  
 蒲生家重代の重寶鯨尾の兜を持し者汝愛を去るべからずと示されける其場を違へて外へ移  
 りければ氏郷大に怒りみづから彼者を討て捨たり是を見て士卒取栗して大に恐れ此後都て  
 軍令を犯す者なしされば今度若干の大小小田原出陣の途中行列正しく國民惱みななき徳  
 川殿と氏郷二手に超し者あしと目付の輩がらより關白へ上しとぞ是より先北條より使に  
 登せし石巻左馬助康昌とハ關白出陣の節伊豆境迄送り歸し氏政父子不逞の罪誅をまぬうれ

ずよりて關白節刀を賜はり征伐あるよしを告しめらる(大成記家忠日記蒲生軍記基業編年)

山中落城の事

明れば三月廿九日寅の一點に近江中納言秀次公先手堀尾田中中村一柳等沼津を發し箱根  
 山中さして押出す山中城に松田左兵衛太夫清秀援兵の惣大將北條左衛門大夫氏勝を初と  
 して問宮豊前守好高朝倉能登守景澄其外池田民部丞推津隼人正佐藤左衛門尉栗本備前守山  
 下兵庫助同源三富田豊後守山岡左京亮片山大膳亮手始の軍なれば各用意して待設く其中に  
 も問宮豊前の正月廿日小田原城中にて討死せんとす切て爰に來りければ其詞を替じと嫡孫  
 彦次郎とて今年十五歳あるを召て我の思ふ仔細あるにより今度討死と思ひ定たり汝の是よ  
 り小田原へ歸り氏政卿御父子と存亡を共にしもし幸にながらへば我苗氏を相繼し忠勤を  
 勵むべしとすける彦次郎聞て是の仰ども覺へず某よしや他國よりとも祖父の大事と聞時  
 の急ぎ馳來るべき身が幸に御側に有あがら祖父の討死するを余所に見て城を落る事いへき  
 や願くハ一所に討死して老たる祖父の死手の山三途の川の道老るべせんといふ好高聞て涙  
 を流し柝檀の二葉より齋しといふ古言あり汝少年なれども其魂凡庸ならず汝此城を落て

僧どもあれといふにのわらず好高討死せし後氏政公御父子行末うしろめたければ汝小田原に歸り氏政公御父子に近侍しかなぬ時ハ主従同く討死せよとの事なるぞ只今こゝにて我ど共に討死せんより遙にまさりし忠孝兩全の道なりと教訓しければ彦次郎力なく涙と共に立別れ郎等熊坂六郎夕子の十六歳あるを具して小田原へ歸りける松田右兵衛太夫清秀も討死と思ひ定めけるゆへ松田尾張守憲秀方へ一封の書簡を送る其文にいふ

某以之僅之小勢引請敵之多勢得利事難叶雖然徒非可落城覺悟一穢御苗字上者一向討死と相極候但於子孫相續者偏貴容願入候恐惶謹言

三月廿一日

松田右兵衛太夫清秀

松田尾張守殿

かくの如く申送り今の心冷しく討死の覺悟を定め待所に今日寄手大軍已刻より押詰て惣大將秀次卿城の西山の高みに備を立中村堀尾田中一柳山内等の西の岱崎より寄かゝる丹羽堀長谷川等の南方より押寄る關白秀吉公の旗本計り召具して秀次卿備のうしろなる山に登りて城攻の様を見物し給ふ寄手三方より竹把を付て堀に埋草を投入し攻寄る城兵虎口を

請取て矢炮を飛せ石弩を發し透間もあらせず防げば寄手手負死人數知らず關白木下美作守を以て中村式部少輔へ下知せられし爰より出丸迄の十町程も有るべし今少し陣を寄せて仕寄の根小屋をかへしとありしを式部少輔が家人渡邊勘兵衛其主人に向ひ只今の御下知の何事にやと聞て扱予けるハ彼出丸の此所より谷峽多く隔たれば儘に見分がたし其馳向て其地勢を物見し出丸の形勢急に乗取べくいハ味方を招くべし其時ハ早御人數を寄らるべしと契約し勘兵衛鳥毛に大半月の指物し七寸計りの黒駒に黒鞍置て打乗只一騎乗出し城より一町計りときたに馬を立て城の跡を伺見るに普請も淺間にて出丸纒に三十間も有べし程よく働くとも敵五六人ならてハ籠るまじと思ひ打出す鉄炮の音を考て彌小勢と察し勘兵衛小高き所に乗上げ扇子を以て味方の勢を招く式部少輔一氏はを見手勢を引連地煙を立て渡邊が馬を立たる山の下迄來りしうハ渡邊勘兵衛ハ一氏が馬前に來り仕寄を付る迄もなし只一旦攻に成るべしと云ども一氏危どや思ひけん更に承引せず勘兵衛爰の某にまうせ給へとて成合平左衛門塀兵右衛門高屋助八郎吉田武左衛門等と共に城に乗入渡邊新左衛門亦井久左衛門も馳付て鉄炮にあたる關白此跡遙に見給ひ鳥毛の指物の中村が家人

と見へたり捨てても一万石の授けべき者あり惣攻の具吹べしと下知し給ふ諸軍此其の慶をき  
 一同に攻かゝる城兵の中に間宮豊前守好高の兼て討死と定められ少しも騒々氣色もなく  
 七十有餘白髪を振亂し大丈夫老ての益壯成るべしと寄手大勢の中へ馳入て奮戦す此勢  
 に辟易して寄手四方に逃散たり寄手一柳伊豆守直末時に四十五歳擲手より攻登り一番に  
 堀を乘らんと進む所に鉄砲にあたり堀より下ふ打落さる續て武藤庄五郎安西傳藏小西吉兵  
 衛等も一所に進み鉄砲にあたり討る渡邊勘兵衛の借崎出丸に馳入て三の篋戸を取かたむ一  
 氏少小性立の龍臣中村小才次今年十六歳才智ありて中村が家政にも預る程の者なりしが家  
 老殿内匠助と同く進んで小才次武具を着せば身重くして働自由ならずと狸々緋の羽織を  
 着し堀を乗時腰の番を敵に切られ腰より上の城内に落腰より下の堀下に落たり一氏此時こ  
 ゝまで馬を進め來り此跡を見て落涙しあがら何うの少しも怖ふべき只平せめに攻落し小才  
 次が幽魂に手向て忠死に報んと馬を馳れば家人中村市助矢野和泉長野六郎次郎等主人にお  
 くれじと出丸に攻入間宮豊前守借崎三丁余りの所を寄手を突立打散らし取ての返し戦ふに  
 討るゝ者若干其子式部大輔源十郎從兵百余人何れ劣らず勇戦せしが大勢に取籠られて父

子主従枕を並らべて討死す其時木村常陸介(一本福嶋正則とす誤なり今其業による)家人大  
 崎玄蕃稻葉内記等馳來り老づくと篋戸に付かくる寄手擲手へ廻る頃大手より打出す鉄砲  
 の煙湧く成るにより渡邊勘兵衛起立て篋戸を乗越所城兵三丸へ引取二階門を堅固に抱しり  
 ども寄手門脇を押破り三丸へ亂れ入城兵爰にもたまりかねて二丸へ引取所を付入にして二  
 丸をも押破る城兵乾の方より鉄砲を打ちくる勘兵衛矢切より内を見れば敵三百計打群れ堀  
 上へ引上しりバ勘兵衛敵にをし續き込入中村が家人渡邊藤兵衛瀧孫作殿内内匠助坂井太郎  
 兵衛馳加はり木村兵今井角右衛門等數十人もはせ來り共に城兵と突戦す青木新兵衛の大親  
 懸たる敵二騎突伏て首取本陣へ持參して實檢に備ふ關白御威ありて當座の恩賞に金錢の賞  
 首を解て賜へりしとす徳川勢の井伊兵部少輔直政を先手として其一番の松平周防守康重其  
 次の牧野右馬允康成其次の本多中務大輔忠勝等が人数古山中路の峻難を凌ぎ箱根の方へお  
 し廻る山中所々堀切有て行なやむ所甲州より召れし黒鉄の者共暫時の間に道を作りて進み  
 行(落穂集)小田原城にての氏政父子山中の合戦覺束さく思ひ斥候のため山上郷右衛門諏訪  
 部民部右衛門を遣はしける此輩の山中城の東の山上迄來り山中の方を見渡せば北の山と谷

徳川勢一騎打につゝきたる勢の數万騎と見へ南の方日金峠よりの長谷川堀木村が勢山林の木の間にあびたゞしくつゝきたり山上諏訪部兩人此形勢を見て如何様此跡にて今夜中に此大軍小田原迄押通ると覺へたり我々歸路を取切られて後悔するとも甲斐有べからず急ぎ是より小田原へ引返し此旨氏政公御父子へ上其用意すべしとて廿騎計の者共指物さしつれ山上を乗返す關白の此時侍騎におゐして此跡を見給ひ城の自落して城兵の逃去と見ゆるぞ諸勢一同に攻寄て乗取べしと下知し給ひみづから大鼓を打て旗本に鯨波を上れば諸勢一同に陣を合せ南方より向ひし堀長谷川丹羽が勢も押寄雲霞の如く四方より攻立る中村勢のもどより先登の事なれば眞先に本丸を攻込む惣軍もつゝき押入にぞ壇上に引取て暫く防ぎし城兵も皆討れ城の守將松田右兵衛太夫清秀池田民部丞権津隼人正行方輝正佐々藤右衛門栗本備前守山下兵庫助同源三山岡左京亮富田豊後守山中大炊介間宮將監片山大膳はじめ究竟の輩將卒五百餘人各よく戦て或は討死し或は自害して死けるとぞ哀なれ渡邊勘兵衛の成合平左衛門を遣ひし主人中村一氏が馬印を取寄せこなたへ越ひへとて請取て本丸の角矢倉に押立て中村式部少輔一番乗と呼ひりしに實に勇く敵を聞へける此後關白中村

が當城の魁功を稱せられ唐織の羽織を給ふ中村の渡邊勘兵衛を召て今日殿下の襦袢を装りしに皆汝が手柄よまる所ありとて蓮正院と名付し鹿毛の駿馬を授けしとぞ北條左衛門太夫氏勝朝倉能登守等も討死せん覺悟にて本丸に支へけるが數万の寄手終日の戦に疲れ餓餓せしにや本丸への攻入んどもせず倉庫を打破り酒食を取喰ふもあり財寶を奪ひ前後不覺に争ふ間日も黄昏に及べば氏勝を始弟新八郎新次郎朝倉能登守森三河守堀内日向守等みそりに城を落たりしが彌生のつもの夜のときされば暗き闇に敵知る者もあらず心閑に小田原をさして落行けるが韭山城の幹火を案内者の川上彦兵衛を始として小田原と方角を見あやまり伊豆の方へ落行けるが次第に道を失ひて山路に迷ひ行なやむ氏勝此時武士の身死すべき時に死せざるの必取を蒙るといふ氏勝山中城にて死すべき身が此所迄逃出て道を失ひ難兵のために生捕とならば恥の上の恥なり所詮此所にて自害せんと佩刀に手をかけしを朝倉能登守始め弟の新八郎も新次郎も走り寄刀を押へやうと練じり凡軍の習ひ勝敗の天運に北條家の存亡此一城に限るべうら小田原無雙の堅城に八州の勇將勁卒充満したる事あれば未頼みなきにいめらざり先愛を落延て後日の忠戦を期せらるべしと様と誠しうべ氏

勝陣てさりととも何の面目有てう小田原へ参るべきと此所にて主従十八騎鬪切て久野の方  
 を廻り相州耳繩の居城へ籠りたり朝倉も此時入道して大也と改め號せしとぞ山中城既に落  
 ければ渡邊勘兵衛主人一氏にすけるの今日の軍の一旦攻の事故諸軍も悉く疲れたり敵虚  
 を伺ひ夜討をうくるあらば味方狼狽して敗北すべし是より見ゆる山林の茂みよついき平地  
 あるべければ今晚其所へ御陣をうつされ旗旗を立並らへ用心有て然るべしと諫ければ一氏  
 尤と領掌し平地に出で陣取しうへ關白の本陣までも奥ゆかしとぞ見へにける徳川勢の今  
 朝より古山中嶮阻を攀登り箱根にいたらんとするに山中の落城の煙見ゆれば城中より逃出  
 る敵を討取れと先手を進められしに青山虎之助物見に遣はされしが敵に逢て討死す松平周  
 防守家人阿部河内岸上五左衛門黒田仁平次敵兵味方なりと偽て逃んとするを坂東聲あり  
 と聞得て突落す是を見て敵大勢來り河内を討んとす河内が從兵生駒藤六主人を救て其身討  
 死す河内の手を負さぐらまぬりれたり牧野右馬允康成稻垣平右衛門長茂が兵とも敵の前路  
 と逃て二百餘人が首をとる箱根山の東海第一の嶮阻北條家頼み切たる要害なれば徳川勢  
 の機夫の通ふ苦の細道を兼く知し召して御下知ありし故墨墨屋嶮を難なく大軍押進む山中

城の逃兵等ハ新庄足柄兩山へりらうして逃入れバ退付て攻立られ新庄を守る遠山左衛門景  
 政足柄を守る依田大膳師治も城を捨て小田原へ逃入れバ殘兵も皆退散す鷹巢の城兵もこら  
 へうねて小田原へ逃歸る井伊が手の近藤登之助秀用其外甲州土屋一條先方の徒追討して敵  
 の首若干討取松平周防守牧野右馬允が手にも討取所數多之兵部少輔直政思ふまゝ追討して  
 箱根路より小田原表酒匂川まで押付て春風に井の字の赤旗翻る堂々整と陣を張てぞ居た  
 りける

葦山城初度軍の事

豆州葦山城の寄手の北畠内大臣信雄公を惣大將にて相従ふ輩ハ蜂須賀阿波守家政福嶋左  
 衛門太夫正則蒲生飛騨守氏郷細川越中守忠興稻葉右京亮貞通中川右衛門太夫秀政森右近太  
 夫忠政戸田民部少輔勝重生駒諷岐守一正等都合其勢三万五千餘騎稻麻竹葦の如く圍みたり  
 此所の守將北條美濃守氏規ハ天性智謀深く弓矢の道を専らとし信義篤く士卒を憐む事子弟  
 の如く能衆をなづけて北條一家の名將たり加勢に横井越前友盛小札修理介元重北條喜太  
 郎氏盛波多野勘解由左衛門經貞小野寺善九郎貞綱根布川太郎次郎廣瀬源兵衛小笠原十郎左

衛門大石四方之助定顯三浦與一右衛門石卷新五郎康景工藤次郎三郎祐光箱田新四郎玉井彦  
 七分部七郎兵衛其外都合二千九百十二人各究竟の勇士みお氏規が令を守り手足の如く従  
 服して二心なく防戦す殊更氏規の強弓の射手あれバ手の者共にも二人張三人張の強弓射手  
 ども多うりけり何れも城中の鏑矢籠搔捕等取集めて矢束を解く矢倉の上よりさしつめ引つ  
 め射出す矢の雨のふるにとからず敵の寄手の香の子を打たるとどく立圍みたれば一矢に二  
 人の射倒とも浮矢の一つもあかりけり又鉄砲の上手共塙矢挾間を請取て大筒小筒を懸並ら  
 へ玉込早く打出しければ楯を徹塵に打碎き鎧を連し兜を打ひしぎける程に寄手忽に二三  
 百人討れたり此時浦生が勢にての浦生左文郷可鉄砲にて眼をうたれ血流るゝ事瀧の如しと  
 いへども自身鉛玉を掘出して猶進む人皆大に驚歎す又明石左近太夫の天狗が嶽に懸登り忽  
 もに此城乗取んと競ひ進む城將美濃守氏規時分のよきぞと選兵千餘人引つれて城戸を懸と  
 押開らせ大波の寄るが如くどつとあめきて突て出る明石夕兵は是に突崩され瀧の谷へま  
 り落され散るに敗走す左近太夫も既に危く見へける所に福島左衛門太夫正則此跡を見て明  
 石うたすお續けや者共と下知し福嶋勢横合より打入て只一もみに懸落さんと金鼓を鳴らし

陣を作れば寄手の惣勢三万餘人陣を合せ口のの堀際迄あしつめ攻寄埋草にて堀を埋め楯の  
 邊に燒草積て燒落さんとしたる所城兵士居矢挾間出し堀の内より弓鉄砲雨霰の如く射出し  
 打出す寄手の忽千百餘人射られ打れ色めき立つて皆攻口を引退く美濃守氏規の福嶋が横  
 合にかゝる勢を相手とし前後左右を指揮し追つ追れつ猶戦す城兵小笠原十郎左衛門横井越  
 前守孰も大功の剛者氏規の指揮に應じ戦ひ疲れし福嶋勢を追討すれば福嶋勢たまりかねて  
 引返す氏規思ふまゝ寄手を追拂ひ長退すなどわけ貝吹かせ十八町口より開くと引返し本城  
 へぞ入にける敵も味方も氏規が勇烈を感せぬ者ころまうりけり關白も今日謹山の寄手千三  
 百六十餘人手負討死ありと聞召此城一旦攻にせんとせば寄手多く損ずべしといふ向陣を嚴し  
 くかまへ連卷して夜討の用心すべきこ小田原へ攻落さば其城の攻すとも降るべしと下知  
 し給へバ寄手の諸將遠く陣所をかまへ折る遠攻にこそ日を送りけれ(小田原記浦生軍記編  
 年)

徳川勢攻二破宮城野等諸口の事

四月朔日徳川勢の御先手として井伊兵部少輔直政小田原へ押詰る其一陣へ松平周防守康重

引續て、柳原式部大輔康政大須賀出羽守忠政小笠原兵部大輔秀政岡部内膳正長盛佐野口方宮城野口に攻入たり小田原勢を守る第一の宿老松田尾張守憲秀上田上野介朝廣原式部大輔胤政土岐右京大夫頼春荒川豊前守國清福嶋伊賀守勝廣芳賀(一本塚賀)伯耆守綱可正木庄兵衛弘正等一万三千餘騎にて守りける然るに徳川勢に攻付られて松田尾張守此日頃の荒言にも似ず忽に巻り立られ逃るどもあく匂どもなく蜘蛛の子を散す如く跡をも見ず逃走る上田上野介始め原土岐荒川芳賀正木等々兵をも戦んとすれども井伊直政を始松平康重柳原康政等手先をまくり中を破てかけちらす是を見て徳川勢のうらより大久保七郎右衛門忠世同治部大輔忠隣鳥居彦右衛門元忠酒井宮内大輔家次石川左衛門太夫康通菅沼新八郎定盈同大膳亮定利阿部伊豫守正勝奥平美作守信昌等一同突てり、れば小田原勢右往左往に逃散じが爰うしこゝ追詰られ討るゝ者數知らず討取首數八十餘級寄手破竹の勢にて宮城野口を押入れ、此猛威に辟易して小田原勢の一防もせず湯本竹浦齋田久野早川等の口々を守りたる大勢皆散々に逃出し小田原へ逃入る本多彦次郎康重の天王口を押破り勇を顯す神君の討取首ども桶に入て渡邊半藏をして關白の本陣へ送らせ給ふ殿下其魁動を感せられ自書

を以て慰勞せられ其首共箱根峠に棹結渡し、集首にして物始よしと悦給ふ(大成記編年)此頃伊賀國下田の城の北條より清水上野介正令(基業信久)江戸攝津守朝忠に六百餘騎添て守らせけるを關白の船手大將九鬼大隅守嘉隆大船をまた乗付て攻けれ、清水江戸も防兼て城を捨逃去る同國田子の誓の山本信濃守常任守りし、徳川家船大將向井兵庫助正綱舟にて押寄向井矢疵を襲りし、うごも終に山本を退出し、誓を乗取同國阿蘭の誓の梶原備前守景宗三浦五郎左衛門茂信守りし、是も本多作左衛門重次に追落さる駿州善徳寺の城を守りし北條七郎氏孝内藤大和等も是より先に徳川勢に追落されて皆く小田原へ逃歸る(原書に下田田子阿蘭等の事皆山中城攻より前に有て三月の事とす誤之基業編年によりてこゝに收む)關白の徳川勢宮城野口以下の諸口を攻破り陣を進めらるゝ、注進を聞て追く大軍を進め足柄箱根の山中新道を作らせ湯本の眞覺寺に本陣を定らる小田原城中の氏政を始め將卒共に翼ある者知らず凡八倫として箱根足柄をたやすく越來る者よもわらじと油断して有ける所宮城野口より諸方の口々皆攻破られ關白の大軍既に湯本まで押寄らるゝと聞て大に驚き、騒ぐ事限なし氏直の敵に城下まで押寄られ居候せん、後世迄の恥辱なりいと城兵を悉く

引拂て畑石橋迄も出張して雌雄を一戦に決せんといひけるを股肱羽翼と頼む宿老松田尾張守憲秀いつしう京都へ内通し何うな關白殿下へ奉公振をせんと思へば氏直を練めけるの今勝誇たる大軍に味方の困兵を以て戦を挑まんに百に一も利あるべからず先年上杉謙信武田信玄が攻寄し時も先君氏康公潜龍の計畧を帷幄の中にめぐらし給ひ城外へ軍兵を出さず堅固に城を守り給へば敵の攻日の長陣に糧盡て退散す其時に城より出敵を退討して利を得たり此度の西國中國の軍勢多ければ長陣に氣を屈し糧米盡て疲るべし其處に乘じ討取時の勝利疑なしと詞を巧に抑留されば氏直出陣思ひ留り八州の軍勢空く城中に手を束ねて月日を送りたり小田原勢城内につぼみたる後の寄手の諸將皆險隘を越て木を伐捨巖を鑿て城下に通り郭外に充滿し殿下旗本に九州嶋津大友中國の毛利勢左の浮田中村堀尾山内等長曾我部加藤の船手に陣取徳川勢の井伊本多大久保酒井榊原を始として又東南の浪邊の里見長谷川池田脇坂等西南に開る陣を並ぶ海上は而楫取楫うきつれて船艦に旌旗立たる數万の兵船漕運て海上俄に平地の如く帆影に山々も見へわかぬべうり夥しき形勢あり折ふし卯月の始なれば山時鳥一聲二聲本陣近く音信しうべ關白

鳴たてよ北條山のほとゝぎす

と口すさみ給ひしを敵調伏の御撥句とて陣中もてはやし感稱と其頃秀次卿の徳川家の陣の後に備らるべき軍令なりしに血氣の秀次其令を破り前陣に進まんとせられしを見て井伊榊原遮りといめてこゝの兼て駿河大納言備場には何人の御軍勢なれば押て前に進み給ふにやといふ秀次卿の家人吉田修理亮進み出是の近江中納言の人数なり中納言殿下の御下知にて先陣に進みい道を開て通すべしといへば榊原高嶺に打笑ひ殿下の仰によりて大納言當城の先陣に進み既に宮城野口より諸口を攻破り陣する所今何故に殿下先陣を引替給ひんや押て通らんとといふ者の狼藉あり討とめよといふまゝに本多小笠原内藤酒井永井等が兵士迄追々に馳集り既珍事に及ばんとするを見て吉田修理介除なき事と思ひけん先手の兵を引つれ早々に引もどす神君此さま御覽あり村越茂介山本帶刀兩人を御使として秀次卿へ仰つゝいされけるの年若の大將先陣御所望の似合しき御事之某わざと備を退き先陣譲りすべし去ながら敵城の程近く敵の主戦地理を熟知す味方の客戦不知案内侮り難くは兵書にも載に及んで敵に近き山下に陣取事ありれと戒たり是の中納言殿御一人の事にてもあし味方の



一將利を失ひ後度の合戦致にく、い物之殿下の御爲に以得バ愚意飾らず進せしと仰遣  
 へさる秀次卿心中に、且恥且怒るといへども軍令に背き殿下に御怒りわらん事を恐れ其上  
 仰遣のさる、所一と道理のわたる所いなむべきにあらねば御詫至極に以某最先より軍令  
 違犯せん所有にあらず先手の者共過失なれば御不審あるべうらう殿に付付べしと返答して  
 引下りてぞ備らる其後關白諸大將を眞覺寺の本陣に召集て酒宴ありしが神君の御盃を秀  
 次へ贈り給へどわり胸腹を三ツ出され大納言の意にまうせ若し給へど仰有ければ神君其一  
 を取て若し給ふ關白又其一を取て秀次に授らるべしと有けるゆへ神君其一を取て秀次は若  
 させ給ふ其時關白秀次にむりわれ其方今よりして勇烈信義とも徳川殿を學ぶべしと宣ひ其  
 後殘る一ツの胸腹を取て中村式部少輔一氏に纏頭給ひ軍功を賞せらる(小田原基業編年)  
 台徳公取場御見物付由良老母の事  
 四月二日關白の小田原の向に當る松山に登り小田を眼下に見下し味方の大軍海山林整一面  
 に旌旗を立並らへ整と堂とたる威勢を見給ひ心中大に悦給ひ神君を招き給ひいか此大  
 軍の有様を長丸に見せ給ひ然るべしと仰ければ神君畏れしと御請有て早し其旨仰遣りされ

しかば台徳公急に甲冑召て秀吉公本陣へ至り給ふ御供に大久保新十郎忠常十一歳にて志  
 たがひたり秀吉公台徳公の御手を取て所々を見せ給ひやがて小具足一領取出し自身若せ參  
 らせ秀吉が武運にあやからせ給へど歸し給ふ(大成記)其時内藤三左衛門信成甲州常光寺の  
 誓より人数を引つれ徳川家の御陣に參る秀吉御覽じ何者ぞと問給ふ神君我家内藤三左衛  
 門と申者にていと答へ給へば久しく其勇名聞及びたりとて信成を召て胸腹を下されける又  
 内藤彌次右衛門家長金の半月の指物にて組士五十騎計り引具し御供せしを秀吉公御覽有  
 て其名を問給ふに馬上に弓を持ながら駿河大納言近習の者内藤彌次右衛門と答たる武者振  
 勇し敷を秀吉公稱美せられ狸の糞掛し鉄砲三十挺を賜ふ(内藤兩人の事原書に見へず  
 今基業編年によりて加ふ)扱秀吉重て神君を招き給ひ敵城既に眼下にあり小田原滅亡必定  
 せり北條滅亡せば關八州の悉く徳川殿へ進らすべし敢て相違有べからずとて益軍容を請  
 れける神君其恩言の厚きを謝し給ひ其上にて仰ける、此城無雙の嶮阻に八州の人数をこめ  
 數代の居城兵糧玉薬も潤澤に蓄いへば味方大軍を頼みても容易に攻落さん事かなふべ  
 からず味方の軍勢數多手分して關東の城々を攻降る者に、案内させ従へざる者を討亡と

秀吉の陣に  
徳川長九  
戦場見物  
の圖



後詰する事もかならず兵糧運漕も得ず城中次第に疲勞して降人に出るか戦死するか二の  
 間を過べからず要害の一人の十人に向ふと今五方餘の城兵に寄手三十万餘敵に比し  
 へいまだ不足せり寄手の堀を越へ壘に登り堀を乘らんとするに城内より矢砲にて防ぎし  
 時十人の寄手を只一人にて防ども七八人の殺すべし此故に切所の一人の十人にあたるべし  
 とす此地の寄手の向城を堅くかまへ夜討の用意し兵糧攻にまじ給ふべし其内に城内に  
 も心を變ずる者ありて必其内亂るべし是取かはずして勝の術あらん兼て前田利家上杉兼  
 勝毛利河内守秀頼真田安房守昌幸松平修理太夫康國小笠原右近太夫貞慶等に（貞慶が事諸  
 書に見へず夏目記并系圖より加ふる者）命ぜられ中山道より關東筋へ攻入て城々攻  
 るよしなれば更に別義のいまじけれと猶又八州へ御人數あまた分遣はされ城々早く攻落し  
 然るべきりと仰けれは秀吉公聞給ひ徳川慶軍器のいつに替らぬ事あがら此計略こそ殊更感  
 する所とて石田治部少輔三成木村常陸介重茲淺野彈正少彌長政長束大藏大輔政家大谷刑  
 部少輔吉繼其外七組の番頭先手物頭等そへて八州の城攻に遣はさる依て徳川家よりも本多  
 中務大輔忠勝鳥居彦右衛門元忠平岩主計頭親吉等を加勢として差立らるかくて關白の湯本

眞覺寺より小田原の西南笠懸山に要害よしと本陣を移され是も城内松田尾張守が内通ある  
 ゆへとぞ（大成記編年）俄に大木を伐拂ひせ石垣を築き所々に櫓をあげ悉く堀をうけ壁を  
 塗て其上を一夜の中に杉原紙を以て張たれば白壁俄に出来たるを翌朝より至り城内の者ども  
 是を見て愕然として大に驚き仰天し實に秀吉の神なるべし始て當國に下り此要地を知て一  
 夜は白壁造付たるぞと歎息して居たりけるさればにや此所の今の世道も石垣山と名を變  
 じけり爰に上野國金山城主由良信濃守成繁（國繁の子）其弟下野國足利桐生の兩城主長尾但  
 馬守長末の弟澁川相模守義勝兄弟三人共小田原の催促にきたるひ三百六十餘騎にて籠城す  
 此由良兄弟が老母の名高き女丈夫にて先に天正十一年正月に北條氏直の由良長尾兄弟をた  
 たりて小田原へ招き置其留守へ北條安房守を天將として大勢押寄せ攻けるに此老母はの  
 口惜き事ありと家人共に下知し烈しく防戦して小田原勢を追散らす小田原勢散々に敗北し  
 終に和睦を取結び兄弟城へ歸りたり老母は此故に今度も我子共が北條の催促に應じけるを  
 快しとせず其留守に有て前田利家上杉景勝等が上州松枝の城攻ると聞て家人を出し前田上  
 杉に加勢して京勢の味方も其身肩に八字の縋をそへみつゝくみたる老の身此取争の巻とぞ

もせず孫の新六郎貞繁を伴ひ家人柳井四郎右衛門大澤美濃根來三河縣近江森隼人一族矢  
 橋鳥山等を具しはるく小田原へ來り御本陣へ參りける關白大に悦び給ひ早速對面有て  
 汝か子共三人は朝敵北條が催促に應じ小田原へ籠城仕たる罪の天誅まぬかるべうらすとい  
 へども汝女といひ其上年若き身にもあらず人戀を出し碓水口の先手に加へ松枝城にて忠  
 戦し只今嫡孫を携て是迄參る忠勇義操尤以て神妙といふべしとに先手子共等も北條  
 の奸計に陥り小田原を擧と成りし時汝老女の身を以て金山桐生の兩城を堅固に抱へ北條の  
 大軍にうごまれながら城兵を指揮して寄手の大軍を退崩したりとい兼開及ぶ所之汝が忠  
 實に追ひ嫡孫を取立て遣へすべしと宣ひ厚く引出物してうへされしうは小田原落城後由  
 長長尾澁川兄弟が所領の没入せられしうと老母の忠操を稱美有て嫡孫新六郎貞繁に常陸  
 卯宿にて五千石賜われり(坪号老續記基業編年)

酒匂伏兵阿部正吉武功の事

四月五日關白寄手陣場を定められけるう豆州の薙山城の北條美濃守氏矩勇略卓越して毎度  
 寄手の大軍をうけなやます所寄手向城をかまへ遠巻してありける所に北條内府蒲生飛騨守

稻葉右京亮中川右衛門太夫細川越中守等召寄て小田原口に備じり福嶋左衛門太夫峰須賀  
 阿波守の薙山を押へしめらる其中にも細川越中守に關白の前備早川口松山の諸將懸望  
 すといへども汝を待て他人に死さすと仰けれ越中守大に悦び土俵竹把を以て仕寄をつけ  
 松山を取寄たり關白又八州の諸城に小田原への通路を斷絶せんが爲徳川勢の中より武功の  
 輩を撰み出し酒匂川邊の林間所に伏兵を設けしめらる爰に大須賀五郎左衛門康高が子今  
 の五郎左衛門忠政といふ其實の榊原康政が惣領ありしが康高が外孫たる故を以て其家の  
 名當年むつか十歳之今度康高以來所屬の勇士坂部三十郎久世三四郎範助太夫瀧美源五郎築  
 漸左太夫等後見して忠政を陣中に御供させたれ榊原大須賀兩家の屬兵等所に埋伏して  
 敵をまつ今日武州鉢形を出立したりと忍の者が注進に榊原大須賀兩家の兵幸の事と三  
 百餘人を三隊に分ち酒匂の川邊薙野にかまりとす(深林殿間に伏兵を設く是をかまりとい  
 ふ)康政が手より鈴木藤九郎伊藤鷹助前島庄左衛門江坂次郎太夫同四方之助等忠政が手よ  
 り瀧美源五郎築漸左太夫等埋伏して待居たり爰に康高が鐵阿部左馬助正吉の伊藤守正勝  
 が二男にて生得健氣の若者早う雄ざれば是を同道せば卒忽の働あるべきかと皆此事を

左馬助に深く隠しけるを左馬助聞出し大に怒り所詮先に伏て敵を追散し高名せんと思ひ  
 ければ三百人の味方に先立て深藪の中に埋伏す相従ふ輩より龍龍之助加藤半次郎鈴木角  
 右衛門只四人ぞむかひける頃四月五日の夜丑刻計り(原書三月八日とするは誤之)鉢形勢  
 五百餘人忍びやかに來りけるが伏兵四人の前を半過ると思ふ頃左馬助正吉爰にありと高聲  
 に喚り五百四人の道をさへぎり會釋もあらず突て入る殘る三人の健者もどつとちりひて突て  
 めぐる其頃月の宵より山の端に入て暗さのくらし道の見へず鉢形勢の思ひよらざる事なれ  
 ば大に驚き敵三四人との思ひもよるべきあらず狼狽して取のんどもせず右往左往に散亂す  
 其中より四五人取て返し踏留て突てかゝる左馬助鎧を合せ一人を突伏一人に手を負ひせ半  
 次郎の刀をぬきて三人に切てり、れの三人こらへず逃かくるを追詰て首をとる左馬助も最  
 初歸付し者の首を取五百餘人の鉢形勢散らに追らざれば足を亂し柳原大須賀の伏兵の近邊  
 を遊行時兩家の伏兵三百餘人三所か一同に起來りのがさじと突てかゝる爰に鉢形勢の中に  
 山岸主膳助といふ總州一の剛者人に知られし力士と瀧美源五郎鎧を揮て突てかゝる主膳助  
 大太刀を以て其鎧の柄を切落す源五郎鎧を捨刀を以て切てかゝり互に火花をもちも戦ふ所

を前觸庄左衛門救ひんと切てり、り深手を負へは鈴木藤九郎又助來り切結ぶ藤九郎も七才  
 所迄流を繋る主膳助が剛勇向ふ者流を受さるゝあし瀧美源鈴木も既に危く見へける所伊藤雁  
 助築瀬左太夫後より來り助て終に主膳助を生捕ける此取に永井彌右衛門白元瀧美源太夫  
 小笠原三郎右衛門も各取功を顯す健助兵衛の先に御掛氣業にて盤居してあはけるが此時  
 菅沼定利が手に屬し伏兵に加り取功を顯すもたなり大村市瀬重信の討死を徳川家より討取  
 首とも并生捕等を秀吉公本陣に送らせられ軍の次第を注進有ければ關白太は稱美せられ柳  
 原康政に敵狀を給ふ山岸主膳助の剛勇を稱し助命有りて小田原城へ火を放ちべき旨密儀を  
 榮りしより主膳助城内へ恐入し城兵に見告られ禁獄せらる小田原落城後獄より出て終に  
 柳原家人となる又左馬助正吉年若ければ敵の圖をよく見守り一番の伏を起し一番に鎧を合  
 せ一番に敵をとるも伏を能す事今少し遅緩過ぎ鉢形勢太半の城に入れば若くは能く事  
 畢過きの急に敵兵敗走すべからず打勝迄も味方も多く討るべし正吉三事相應の高名ありと  
 殿下御褒詞有ければ正吉の規模皆人うらやまぬ者あし大須賀が屬兵共の左馬助少年若氣に  
 て伏を早く起し大勢敵を討渡したりと誹謗せしが殿下の御褒詞有て口を閉けるとぞ左馬助

此高名により召出され御家人に加ゆる大須賀忠政も十歳の初陣に屬兵共大に功を顯りし御  
威を蒙り目出度例に人替りける八日に城内を籠りし皆川山城守廣照手勢百餘騎を引具じ  
徳川家より降参したり皆川先年より内志を京に通じければ殿下降参をゆるされ徳  
川家へ附屬し給ふ九日に榊原康政ますく酒匂川をこえ城際迄任寄竹把を附る阿部正吉  
同じく城際に進み城兵の鉄砲にあたり流を蒙る(大成記編年基業)

上州松枝并諸城降参の事

今度豊臣關白小田原征伐によりて九州并出羽奥州北國迄廻文を以て軍勢催促せられし其中  
にも加州金澤の城主前田筑前守利家其子肥前守利長越後春日城主上杉彈正小彌景勝の東山  
蓮の惣大將として上武兩州に攻入しどの軍令されば二月十日上杉景勝の三千餘騎を率じ春  
日山を立立し十五日信州海津より着し利家の一左右を待合す前田利家父子の十五日金澤を進  
發し同廿七日同國望月に着陣す景勝も同日海津を立て小諸へ出廿八日追分迄着す利家の一  
日下りに押て行兩手の先手の毛利河内守秀頼信州三組兼真田安房守昌幸松平修理太夫康國  
小笠原右近太夫貞慶桑内者にて(大成記夏日記(都合其勢三万五千餘騎三月二日上州堺碓水

峠に至りたり上州の内にも松枝といへる山の崩を城に構へ尾崎より堀切を重よりに曲輪  
を設く西南の方の中山道の街道なれども道より脇の谷深く切れ谷の流れ急にして城山と谷  
との間一町にも足らざる程にて大軍屯すべし標もなむ同月八日臣刻より上杉景勝の大手の  
大將なれば西の方安中曲輪へあし詰直江山城守兼續真先に備前田利家父子の擲手の大將と  
本丸山先に勢を進めて東の方より押寄北方より毛利河内守秀頼并信州三人衆松平修理太夫  
康國真田安房守昌幸小笠原右近太夫貞慶が勢六千計にて押詰たり南の方のわざと道を開た  
り是城兵の心を一致になすまじき爲にとぞ城主大道寺駿河守政繁其子新四郎政貞(一本新  
太郎)此政繁の曾祖の時北條早雲同伴して關東に下り小田原を創業したる七人の其一人四  
世の間北條麾下に猛威をふるひし者なれば今度も烈しく防戦すれども人毎に頼母と思  
ひけるが父子共兼て坂本まで出張して寄手を待も所寄手の大軍四方を取らむと見ても早  
に引取て城に立籠る(原書に大道寺松枝城にて烈しく防戦し寄手若干耐れたりとあるす  
大成記家忠日記基業成績等の諸書皆防戦せず直に降参したりとのみありて防戦の事のみ  
し)是を聞て沼田領の内名久留美を守りし猪股能登能直の一戦も及ばず城を真田安房守昌

幸が長子源三郎信之にわたり鎌輪の城へ逃籠りしに鹿橋の城主北條安藝(丹後長國の弟)も中川武藏守光重に城を渡し先手ま加り内藤大和守が鎌輪の城兵も城を出て降参すれは猪股爰もたまらず武州鉢形へ赴く上杉景勝の先手藤田能登守信吉木戸源齋村上源吾國清等に大勢をそへて小幡上總介貞政が末弟彦三郎等を籠置し戸澤の奥宮崎の砦を十七日に攻落す前田利家力を勞せずして大道寺を降参させんとバウリ根津松枝城を攻ず遠攻にして日を逃る廿八日に信州浪人依田能登伴刑部等小田原に調議して一揆千余人を備して近郷を亂妨し侵掠するよし聞へければ松平修理太夫康國其弟新六郎康貞早速に馳向ひ白岩に立籠りし一揆原を追散し上州野栗谷に追討し伴刑部三代以下三百八十余人が首切て徳川家小田原御陣に献じければ其首共關白御陣へ進らせらる關白大に康國が功を感じ給ふ依田能登守同右馬助盛繁も小田井加摩須兩砦を籠りし一揆共を攻めし松枝城主大道寺父子さりとせめかくして日數を送る程ならば深谷本庄安中の城より後詰して寄手を退崩すべしと兼て藤も合せしを頼みて有ければ兵氣の次第に屈じ糧米運漕の道の遮られ安中深谷本庄の城兵ども皆城を捨て降参し鹿橋義輪の城兵も敵と成りしと聞へ彌恐れ今の何を頼みに籠城すべ

きと城兵評議を決し四月五日矢倉の上へ人をのぼせ笠を以て矢留をこひ其後矢文を射出し降参を請ふ前田利家兼て露策の如しと悦び上杉景勝も此趣を示し此城要害堅固之力攻にせんとせの味方も多く損ずべし城兵降参を願ふころ幸なれ明日も城を請取大道寺父子を案内として八州の城々早く手に入ん事然るべしといはれしに景勝も尤なりと同心し其望をゆるしければ同十日大道寺が北條累代服心の重臣にて有あまら一戦にも及ばず降入ま出ける淺間もさよと議らぬ者いさかりけり夫より前田上杉兩將の大道寺父子を擲擲として中山道を経て武藏國へぞ打入ける(夏日記編年基業)

武州松山以下諸城攻落の事

四月十一日前田上杉兩將諸軍を引率し大道寺父子を案内者とし安中倉賀野等城々を退落し武州北企郡杉山の城へ押寄前田利家の大手へ向ひ上杉景勝の擲手へ向ひ毛利眞田小笠原松平修理太夫等の軍勢稻麻竹草の如く城の四面を取巻たり此松山城のそのうみ太田道灌が繩張したる名城なりしを取谷上杉家の長臣上田左衛門太夫修輔して難波田陣正左衛門廣宗に守らせしが今の上田上野介朝廣入道兼彌齋が居城たり當時兼彌齋の北條の備促に應じ小

田原に籠城し其被官難波田因幡憲次毛呂八郎山田伊賀直安若林和泉直則金子紀伊家基木呂子丹波友則根岸主計定直山田市兵衛根岸與太郎定仍比企藤九郎原藤右衛門田中嶋右衛門羽生平四郎森兵庫長市右衛門小藤帶刀いづれも究竟の勇士二百騎輕卒郷民を集め二千三百人兵糧玉藥以下不足く籠城したれば是も力攻にて日數を歴へしとて前田上杉兩將評議して大道寺父子を城内へ使し天命利害を説て降參を請ふ事をすめしむ上田元來上杉管領の舊臣たり寡の衆に敵すべからざるの事勢にて詮方なく或時の織田殿へ降參して瀧川が麾下に隨ひ或時の北條に歸順して小田原へ勤仕するとも心より信服するにもわらず今度も北條が催促に應じて案齋齋小田原に籠城するといへども其被官家人共も北條の恩に浴せし身にもわらず氏政が爲よ一命を抛義をあらはさんとも思はず後詰援兵の頼みなき此城に籠り此大軍にかこまれ犬死せんよりも降參し關白家に軍忠を盡し恩賞にあづからばやと衆議一決し城兵の命を悉く助られ御先手に加はり戦功を勵みすべし然るに於ては本丸三丸相共に開き渡しすべし三丸に城兵等が妻子眷族こめ置ていへば是は此儘になもをきたまへるべしと返答す利家景勝城兵のす所尤なりと領軍し彼が所望に隨ひ十六日城を請取小

笠原右近太夫貞慶が人數を分て爰に籠めをき難波田木呂子金子山田二百餘騎を先手とし前田上杉兩大將早と打立て十九日畠山木田の郷を歴て北條安房守氏邦が居城鉢形の屬城四ツ山の砦を攻めこまんす砦に籠る北條勢四百餘人大軍に氣を吞れ早と落去て鉢形に逃歸る日尾の城を守る諏訪部宗右衛門定吉が手の者根小屋の城を守る渡邊賢物正朝美伊賀信忠田野の城を守る三山外記安藤兵庫も城を棄て逃去天神山花熊の兩城も没落し川越の城もこの頃降參すかへりしかば上杉景勝の大道寺新四郎難波田因幡を郷導とし濱海道を歴て鉢形の城へぞ押寄たり前田利家の大道寺駿河守金子紀伊守を郷手よりの郷導として押寄る是より先上州の三ツ山の城も北條方平豐後五百人にて籠りたるを上杉の先手藤田能登守信吉の其相備長井右衛門時信實と調義し攻んとするに忽に降參しければ此所に信實を留めて守らしむ此信實の長井齋藤別當實盛が後胤にて世に此所に住居せしが近年北條がために城を捨て越後に至り上杉に仕けるとぞ(夏目記編年)

天徳寺拔佐野城の事

其頃下野國佐野城(幸澤山と云)の北條左衛門佐氏忠居城之氏忠の氏政父子催促に應じ小田



原に籠城し小瀬口を守る抑佐野城の儀藤太秀郷が後胤佐野小太郎昌綱が居城ありしが昌綱が子修理亮宗綱血氣の若者なり宗綱が時天正十二年十二月晦日の夜に同國館林の住人長尾但馬守顯長がために彦間の城を奪われしを憤り明れば天正十三年正月元日火急に押寄せ其城取かへさん馬強からん若者のついでやついでいひすて、乗出す續く味方一人もあければ彦間の城下まで馳寄て味方の来るを待ける間鉄砲にわたり討死す宗綱女子のみにて家繼すへき男子あければ家臣共評議し北條が威名當時關八州にかいやきけり彼人の一族を一人も許して佐野が一統を繼せよば家の爲然るべしとて老臣等小田原に参り其由請じかば氏政悦斜あらず第五の弟左衛門佐氏忠をして宗綱が父昌綱が弟親氏に歸して佐野庄天徳寺に住じ了伯和尚といひて有しが和尚もとより佐竹右京大夫義直と懇意なりしが佐竹が子を常陸より迎へて佐野が家を繼せんとすけるを佐野が家人大實越中竹澤源三郎山上美濃飯塚兵部等をはじめ宗徒の者共わつて此儀に従はず北條が子を請て家を繼せしかば此和尚大に怒て佐野の庄を立去北國越にかゝり京都に登り新黒谷邊に菴室をむすび閑居せり今度豊臣關白小田原征伐として關東へ發向し給ふ頃此事を聞召關東案内者に召具せられ小田原御陣

にまかりたり然るに關白和尚を召て御僧出家の身とあられしが正しき佐野家の正統鎮守府將軍秀郷の跡滅亡の心苦しく思われざる事あらじ急ぎ野州へ赴き普代恩願の家人等がたらし佐野家恢復の功をはからるべしと仰ければ了伯和尚大に悦び仰の赴き身にあまり忝と思へども今貧僧が一身の所存にて普代舊功の者共がたらしひども末頼母じうらぬ貧僧に一味せんとする者有べしと思われず願くは佐野城乗取たらんは佐野の跡襲あく下さるべしとの腹下の御一行賜りたらんに夫を普代恩願の者共へ拜見させかたらしひんをすければ關白尤なりとて證據を賜りける和尚やがて其證據を携て故郷へ歸りひそりに累代の家人又庄官卿人迄も是を見せてかたらしうら馳集る者共と多りける和尚又城内諸士のもとにも廻廻を遣はしける其文にいふ

抑北條氏政父子者 依背勅命 而關白秀吉公 蒙北條之一族追討之宣旨 引卒二  
 十方騎 而圍小田原城 氏政父子之滅亡者 其在近畿普天之下 卒士之被無非王士  
 爭可不應勅命 其上佐野城者 自足利又太郎忠綱 以來秀郷之末葉 令居住之處  
 佐野家之老臣大實以下之輩 早晩令忘却舊好 以北條家爲主君 非背天理 失

武臣之道今幸了伯蒙秀吉公之仰相催舊臣棄取於佐野城者忽令選俗一  
佐野遺跡無殘可被宛行旨有嚴密之仰證文庶幾所者面々改先非一屬了伯一攻取  
於佐野城可被取立佐野實名於然者各本領安堵者不及申忠實可依功者也  
恐々頓首

天正十八年四月十九日

前天德寺 了伯

佐野老中

と書て送りける此廻文を見て佐野家老臣打寄て評議す時に赤見刑部少輔進み出りける  
天徳寺殿仰越さるゝ趣一其道理あり第一累代の主君といひ舊好といひいりて同心せざ  
るべきと憚る所ありければ一座の城兵津布久峻河飯塚兵部竹澤源三郎山上美濃高瀬紀伊  
小見小四郎を始め二百余騎の輩皆尤と同意せり其時一老の大貫越中一人是を聞居文高に  
延上り凡勇士の道二心あるを以て恥とするにわらずや我其始了伯和尙の仰にしたりのす左  
衛門佐殿を呼取て主君となし奉る既に一度君とあり臣と成りたらん者今危急存亡の期に  
臨み忽心をはるるへさん事武士の本意にわらず面々の勝手次第たるべし我に於ては氏忠

の御爲に討死せんものこと詰の城にどち籠る赤見津布久を始め残る家子郎等どもに伯和尙  
を大將とし舊好の者共郷民共まで三千人計り詰の丸へ押寄ける大貫越中其時櫓の上におが  
りて大音わけ某うゝる小勢にていうてり合戦とる事を得んや命の義に依て輕しとこそ承  
はる是見給へ人よと呼り自身首掻落し死てけり天晴勇しき義士うなど感ぜぬ者いな  
うりしとぞ和尙城に入り此よと小田原へ注進しければ關白大御感ありて北條亡びて  
後佐野の家督和尙に賜ふ和尙關白の御家人富田左近將監が次男を乞請て子とあし父祖の  
家繼がせ修理太夫政綱と名乗らせける（政綱關原の時御味方し三万九千石領しけるが慶長  
十八年大久保忠隣が事に坐して家除る其子の召うへされ麾下に仕ふ佐野肥前守義行等此  
後胤あり）

校 三河後風土記卷第廿五終

正校 三河後風土記卷第廿六

武州鉢形城軍始末の事

天正十八年四月十九日北國の惣大將前田筑前守利家上杉彈正少弼景勝諸軍を指揮して武州鉢形の城に押寄たり大手の方は上杉景勝大將にて難波田因幡大道寺新四郎を案内者として甘粕近江守直江山城守藤田能登守を先手にて南方より向ふ搦手は前田利家大將にて金子紀伊大道寺駿河守を案内者として東方より押向ふ毛利河内守秀照真田安房守昌幸は山田伊賀木呂子丹波を案内者として榛澤野より小別田を歴て寄居山に屯じ荒川を隔て鉄炮を打かくる北方は斷岸にて高さ貳三丈も有るべく屏風を立たるとく荒川漲り流れ淵深く藍を染出すに異あらず渡すべきには船もなく柳すべき跡もなし寄手只遠巻して各堅固に陣を取る夜討の用心して嚴重に守たり城の大將は北條安房守氏邦家人には黒澤上野井上三河嶋村近江築瀬中務花岡修理吉田源太左衛門三上文右衛門高橋平六蒔田彦五郎小園圖書秋山善九郎金尾右馬助藤田左衛門太郎日野次郎三郎寺尾彦三郎大輪主殿八木一族等三百三十騎に郷士勤卒集て貳千七百餘人猪股能登範直も三百餘騎引具して爰に來り守りける同月廿九日迄寄手

只遣悉して鉄炮の迫合に日を送りたる所此東雲に城中より兵を出し二行に列し先鋒三十四  
 五騎の大手杉が手へ討てかゝる此事遠見の者より注進すれば上杉方の雷番は直江山城守  
 兼續泉澤河内之此由聞と直に逆寄して城兵を七八町追討して廿一騎迄討取たり搦手前田が  
 陣は由断して備を怠り居たりしめば陣中大に騒動し雜兵五十人斗り討れたり後に聞に城兵  
 は猪股能登が采配成りしとぞさすが上杉家は謙信の遺法空しからずいづれ軍伍教令嚴整に  
 て他家の及ぶ所にあらず人々舌を振て感心せり(夏日記)五月廿日に城兵又寄手の陣へ討て  
 かゝらんと用意す上杉の先手藤田能登守信吉前夜より其機を察し夜中奈磨山より十五町進  
 て城の直道に深林あるを幸とし伏兵を五段に設て待居たり夜も仄と明りゝる頃城より  
 氏邦が寵臣中村内左衛門に老功の松村豊前を二へ三段に備へ深林より北四五町まで押來り  
 しが老功の豊前左右に眼を配り此所伏兵あらんと推察しければ深林の前にて應を陰にし  
 て急に兵を納んと駿馬に鞭打て馳歸るを見て夫れ逃すなど藤田能登守手勢を下知し追うく  
 れば二陣に續く甘福備後かろく備をくり出しつゝ折にまづくと押出す島村左京が歩  
 卒鹿瀬とて駿足の名を得たる者有しが松村豊前が逸足出して急ぐ馬に三丁討にて追付豊前

を馬上より突落し首をとる是を始として城兵を十町餘追討して首を取る事七十九級何れも  
 上杉が軍法嚴整に勝利を得る事衆にこへてぞ見へにける城内に兼て日尾根小屋田野天神  
 山花熊等の城より後詰援兵來るべきと思ひの外先に此城ども皆寄手大軍なりと聞恐し  
 て守兵悉く逃去りたれば後詰の頼もあく兵糧の次第に乏くなり兵氣大に屈し力盡て予覺  
 ける抑此鉢形城の藤田右衛門佐重利が居城之重利の畠山庄司次郎重忠が次男小次郎重秀  
 より十五代相續し秩父六十六郷藤田十二郷を領し藤田ども秩父ども號しける始の上杉管領  
 の幕下なりしが北條に志たがふよ及んで左京大夫氏康が庶子を養ひて家を譲る是今の安房  
 守氏邦之永祿三年八月十三日重利頼死しければ所領の悉く氏邦是を領と又重利に實子二  
 人あり兄の用土彌八郎重運用土の城主と成る弟の今度上杉の先手たる藤田能登守信吉あり  
 されバ信吉と氏邦との義に於て兄弟の親みなきにあらざり仍て信吉今城中力盡たる機を察し  
 氏邦が家老横地左近へ和議の扱を掛しめば氏邦力盡氣屈したる折から故城中の男女助命を  
 ゆるさるれば城を明渡すべしとぞ答ける信吉よくこしらへて利家景勝にも領掌せしめ六月  
 十五日(夏日記)には十八日とす(信吉城を請取て城兵は悉く前田が先手に加はりける氏邦は

此時青龍寺に入て染衣の姿となり城を開て降人にぞ出たりける是より先き秩父の城を賈取へしと寄手は評議しけれども此城どもは鉢形落城を聞て皆く城を捨てて去去ける(家忠日記夏目記同編年には氏邦は初より小田原に有て鉢形にはおらずとす)

小田原寄手陣中雜説の事

長陣の習ひよて小田原寄手諸陣には誰言出しけるともなく雜説流言さましくなりしが北條信雄徳川殿と城中へ内通し關白本陣を焼討せらるゝと聞へければ諸人大に恐懼して諸陣さ下に政務をも掌らるべき身之殿下の幕下一將之に於て竊に幽憤をふくみ城中へ内通あるまじきにもおらず又駿河大納言には北條氏直と鯉鼻のちなみあれば北條家滅亡せんとをあげき只今迄も事を左右によせて城責を延引せしめられ時の變を待るゝ跡と見へし此間陣中の雜説も據なしとはすべからずいよく御勘考有べくいと申ける古の所謂腐受の惣意といへるはかゝる類あるべきなり流石に明智大度の秀吉かゝる説詭はさらにはとせられず大に笑て只今いかてさるとの有るべき是は定て敵方より離間の計略にていはす

るか又味方に織田徳川兩人を怨る者有て言出したる事ならんとて少しも心にどめられず四月十五日(家忠日記)關白伊達染の小袖は緋屯子の羽織を着脇差斗をさし兒小性四五人斗を具して信雄が陣へおはしや久しく閑談し夫より直に徳川家御陣へおひしたり(天元實記)に秀吉小早川隆景と相談して徳川家御陣へ自身見廻ひ給ふとあり(夜に入るまでゆるくどかたらひ給ひ其後ひそりにの雜説の事仰出され是に定て敵より問者を入れていひしむるう又信雄と徳川殿を怨る者有ての仕業う二の外に有べうらずと仰らる神君聞召信雄の知らず某に於て味方に怨請ん事思ひもよらず是に定て敵より味方へ忍びの者數多入置りたる流言やちらし離間の謀を行ふものならん諸將に命ぜられ一手切又吟味して人別を以て穿鑿めらば味方へまされたる忍の者の忽撰み出さるべし又陣中の商人どもを一に擄取て陰謀し自狀する者の命を助け褒賜あるべしと觸しめられんに必有跡に自狀する者多りるべし第二近き陰謀の此事や上し者を召寄て何者より聞てやたるぞと其先を追う吟味めらば畢竟其根元の分明あらん其事や始たる者を捕て鞫問めらば必敵の忍び成るべしと仰ければ關白尤と感ぜられ本陣へ歸り給ふ今日關白織田徳川の兩陣へ自身おひして閑

談せられしを以て諸人の疑惑散じ陣中騒ぐしうりしに静りける諸人皆秀吉公の明智大度を感じ稱せりうくて秀吉公福原右馬助を召て汝今度の難説の難より聞しぞと尋給ふに木村惣左衛門がすたりといふ木村に尋給へば高田小左衛門より聞しといふ高田の熊谷内藏助がすたりといひ熊谷の堅田兵部少輔が物語といふ堅田の増田隠岐守より承へるといふ増田の南條主税助が語りしといふ南條を召て尋らるれば織田内府の家人今泉新之允竊に某に語りし内府の今度徳川殿と謀し合せ近日殿下御陣を焼討にせられんどの計畧あり此とゆめゆめ他言有べうらずとすけるが隠岐の某が諛故内へ告いしといふ依て信雄の陣へ御使有て今泉新之助を出さるべしと仰下さる信雄大に驚き早速に新之允を生取て關白の御陣へ進せらる是の忍の名人とて此二月尾州にて召抱たる十七人の浪人共の内とて依て片桐市正寺西備中守兩人を奉行にて新之允に問へる、所新之允詞なく屈服すればきびしく拷問せらるゝに新之允其實にたへず白狀せし其實の北條が偷人にて氏政の下知より彼難説をす觸しし某一人にもいはず今度寄手の陣中へ敵より入置忍びの者共數多し某助命仰付られれば其者どもをす上べしとすにより新之允が命を助け一と白狀せしむる所横山民部少輔が手に服

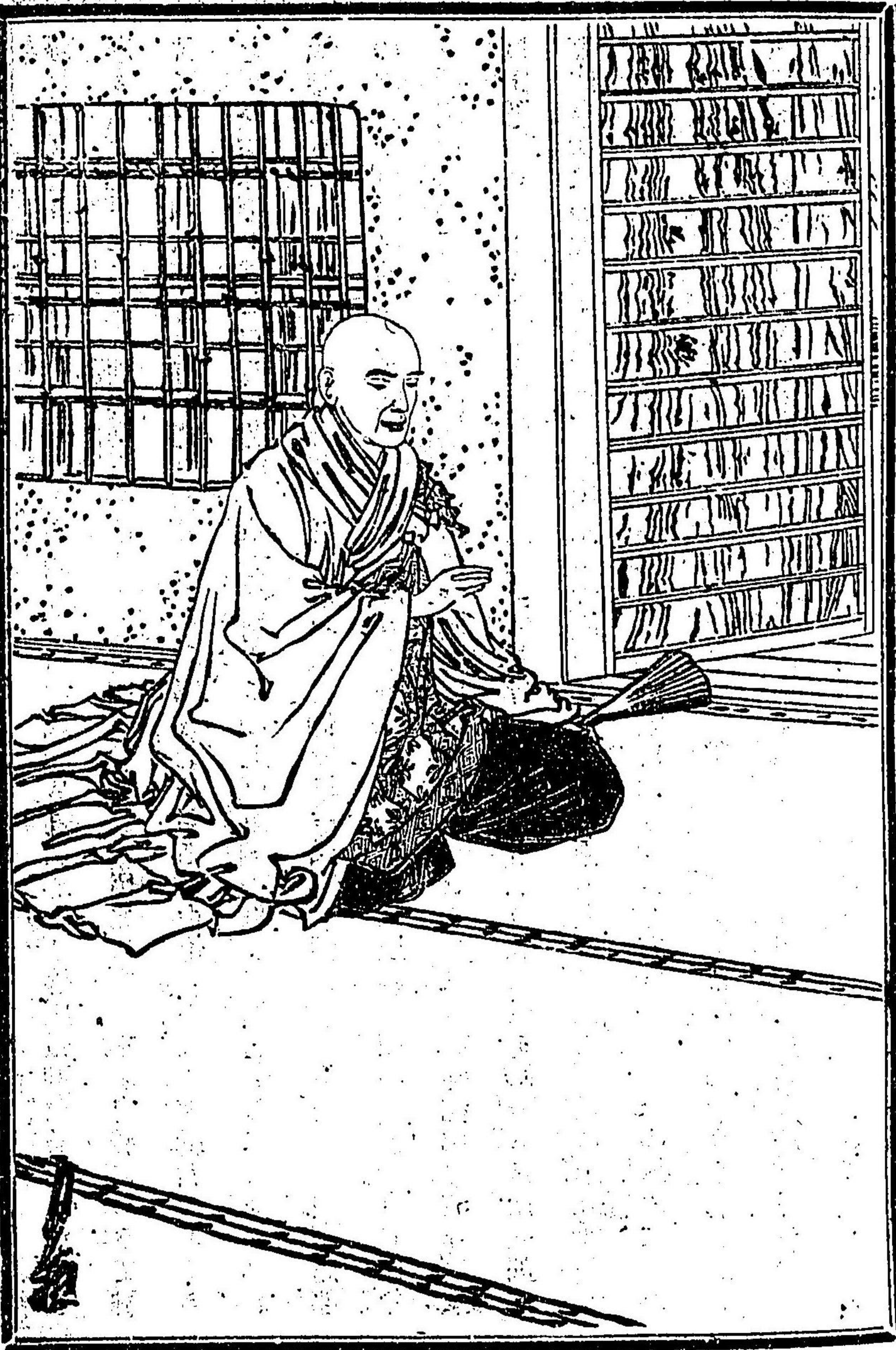
部助作杉谷越後守が手に服部彦五郎筑紫上總介が手み大胡孫右衛門寺西播磨守が手に古市右馬之助多賀出雲守が手に上野喜太郎堀内安房守が手に鬼石清兵衛此村左兵衛尉が手に安藤助左衛門小野木藏殿助が手に白石文九郎等の皆今度の合戦によりて召抱たる浪人にて實は皆北條が忍び共之其外陣屋の近邊に商ひする町人にも北條が忍共入交りて有けるを新之允に人をそへて追ひ召捕ける所十三人迄擄取たり頼て其者共が首刻て大札と姓名を志るし小田原の大手門前に梟首したり又新之允が妻子をば人質に取置て新之允に金銀多くあたへ毎日陣屋を廻らせ商人どもを見せしめければ是より敵方の偷人共寄手の陣中へ入事あたはずして城中謀を失へり

北條氏勝降參付江戸以下諸城の事

關白秀吉公の本陣へ神君を招給ひ關白仰けるに當小田原城を取巻て數日をふるといへどもいまだ城中のみ弱りたる跡も見へず此上いかある手段を施すべき所存を承はりたしとありしに神君聞召て仰けるに今日に至る迄城中より打て出手痛き合戦一度も致さるは城兵困窮せし兆之此上にも北條麾下の東國の城悉く攻取小田を裸城にして攻られば小田原

自然落去すべしと仰らる其時秀吉公東國の城々早く攻取手段のいうに問給ふ夫に手段  
 以べしと一段致させ試へしとて御陣に歸らせ給ふ爰に北條左衛門太夫氏勝の氏政父子の  
 命を蒙り山中城の加勢してむらひしうども山中城を京勢に乗取られ何の面目有てう再度小  
 田原へ入参るべき居城相州耳繩に籠りて京勢攻寄るを待受て一戦し討死せんと心に覺悟し  
 てぞ居たりける然るに北條氏政栗田某を使として山中城を敵に攻取られし氏勝が武畧  
 の拙にのあらず合戦の習ひ勝敗の時運之氏勝が恥と思ふべうらず早々小田原へ來り忠戦を  
 心掛らるべしと申送るされども氏勝の地黃八幡と譽を得たる左衛門太夫綱成が子にてあへ  
 なき敗軍し殊重山中城に於て死せずむなく逃亡せし讒を恥て氏政の命を辭し只此儘耳繩  
 城にて死を待べしと申切て小田原へ來らず栗田歸て氏勝寄手よ志を通ずるにやどかく小  
 田原へ來るまじきよし堅く返答せりと申氏政直大に疑を生じ氏勝を二心ある様にもてな  
 しければ氏勝も又氏政父子を怨るよし聞へしうべ先日も秀吉公より黒田如水を以て氏勝御  
 味方すべしと招くれしかども氏勝の代々北條家の恩に浴し一門の列に加へられ危急に望み  
 義を變せん事を恥てさらに其詞にまたがはず神君りぬて氏勝をばまろし召されば孤城に籠

り討死せん事を憐み給ひ何卒彼を降参させ八州城攻の案内者とせば然るべきとありと本多  
 中務大輔忠勝に此事をばうらへしと仰らる忠勝が被官に都筑彌左衛門松平三郎右衛門兩人才  
 弁の士あれは忠勝此兩人を呼て氏勝伯父に龍達(原書に「了辰とする」誤之今大成記家忠  
 日記にてあらたむ)といふ僧汝等と年頃其交厚しと聞及ぶ汝等の耳繩に赴き龍達によく  
 申命め氏勝に義に拘り先祖の名跡を滅亡せん以外の外不孝之早く天命に隨ひ關自家へ歸  
 順して子孫の後榮を期すべきよし氏勝にさすべきむねかたらへしとぞ命じける兩人の耳繩  
 に赴き龍達法師を呼出し是の城を攻取られ而縛の恥を請て降参するとい事かあり家の為子  
 孫の爲徳川殿仰に從て和睦せらるべし殿下の前の徳川殿よくはからひ給ふなり本領も安  
 堵し耳繩も其儘たるべし御僧よくはからひ給へしと申ける龍達法師徳川殿御旨忝なし  
 と領掌し城に入て氏勝にまかしくと申といへども氏勝山中敗走を恥て死を決したれば敢  
 て此詞を用ひず龍達も諫かねて立かへり都筑松下にかくと告る都筑松下聞て兎角かゝる大  
 事の壹度貳度にての得心あるまじきあり先祖への孝子孫のため御僧大慈悲の誓願むなし  
 からず幾重にも勇士の志を和らげ眞の孝道を教化し給へしとあながち進れば龍達も度



本多忠勝の被  
 官都筑松下の  
 二士僧龍達に  
 説て北條氏勝  
 を隆参  
 せむ





城に入て徳川殿一視同仁の法徳を説諭しけるに氏勝も遂に心解て徳川殿御仁心奉じ謝し奉り人質を献じ其身も剃髮染衣の姿と成りて四月廿一日小田原に参り本多忠勝につきて神君に拜謁す神君御悦有て關白御陣に伴ひ拜謁せしめらる關白悦斜ならず神君のよく人を用ひ給ふ事を感じらる氏勝既味方に属するの上東國の城への招かざるに歸降とべし氏勝にも早く八州平均の功を補佐せらるべき旨仰ければ氏勝も悉く畏る爰に武州豊島郡の江戸城の當時遠山左衛門尉景政居城成りしが景政の先日豆州境新庄の城を守りしに今の新庄を捨てて小田原に籠城す江戸に其弟川村兵部留守せしが景政が姪遠山丹波守直景眞田隠岐守信尹等初より志を徳川家に通じければ四月廿二日江戸城を御家人戸田三郎左衛門忠次にわたし遠山が兵を引拂ふ（大成記に遠山眞田兩人此賞と志て舊領の上五千石づゝたまひしを不足と去て浦生に仕へ眞田は又御家に歸り仕ふと有り）先八州の城々にむかはせられし淺野長政木村重茲等は前田と上杉との軍に従ひ戦はゞ自身の功を立難しと思ひ軍議とやかくと日を送る所關白より森豊前守勝永眞野豊後守頼包を軍目付に遣はされ徳川家加勢本多中務大輔酒井左衛門尉鳥居彦右衛門平岩主計頭等も悉く参着しければ淺野木村

等大に悦び四月廿六日上野へ攻入箕輪の城には松平修理太夫康國人叢を籠置和田（一名高橋）板橋三藏布川藤岡大戸五閑碓氷那波善山上小泉の城々攻落し内藤大和守秋宜が領する武州筑井の城をせめて鳥居彦右衛門が手へ守將野崎牛之助を討取城々降参の兵を先手に加へければ其勢既に三方餘人に及ぶ秀吉公此由關召山崎志摩守岡本下總守を御使とし淺野木村に仰けるは汝等道々の小城どもをば捨置て前田上杉勢と一同して戦功を勵むべしとありしかども淺野木村をはじめ徳川勢本多鳥居等の人々も前田上杉の麾下に屬せば卓絶の軍功顯はしかたしと思へば關白の命令をも用ひずして是より直に上總下總の城々攻落さんと兩總州の方へ旗をむけて進發す爰に不思議の事を評しけるは神君駿府御出陣の時より本多豊後守廣孝菅沼小大膳定利牧野右馬允康成三將は無役に召連らるは何の爲かど人々疑ひ不審しけるに今度二の先備本多鳥居酒井平岩四將を八州の城攻の加勢に遣はされしかば其跡の備明たる所へ彼三將を用ひらる爰に於て先遊軍をして召連られしは此爲なりとはじめ諸人疑ひを解籍を帷幄の中にめくらし勝を千里の外に決する名將とは徳川殿の御事かまど當家も他家もなしなへて威せぬ者はなかりけり（大成記編年基業）

西牧石倉軍付松平康貞武勇の事

上州西牧(基業に)牧野城一本西牧ともあり)の城に北條より多目周防守長宗に大谷帶刀左衛門嘉信をそへて四百餘騎にて守らしむ爰に松平修理太夫康國のもと依田蘆田とて甲州武田家麾下に響ありし下總守幸成が子之幸成武田滅亡後徳川家に歸順し所を戦功を願ひ信州岩倉の城攻に兄弟共討死しければ其軍忠を御感のあまり其子に御諱の一字を賜り御家號をゆるされ松平修理太夫康國どの名乗し之康國既に少年銳氣の大將殊更りく御慈愛深く御一門に連る御恩も何かな報へんと思ひ切て今度北國勢の案内と成り眞田小笠原と同じく前田上杉兩將を擧導して松枝松山始め所の城攻に軍功を立んと思へども此城多くなり

和議の扱と成り降参すればさしたる高名も得がたし夫に去たが兵本迄も武田滅亡後本領安堵の御恩も報へんと思へども是迄はうぐしき軍もなく何ともして忠戦せよと思ふ折ふしなれば康國其旨前田利家にとり康國并弟新六郎康貞と手勢計り貳千餘人にて西牧の城に押寄無二無三に城門際にて燈の取付しとく直堀を乘らんとす多目大谷も兼て期したる事なればまばらりの矢炮を飛ばし爰を専途とふせむけるが四百餘騎木戸を開て突

て出勇を振て寄手を追崩す康國兄弟自身に陥留り力戦す城兵心の矢猛にはやれども大勢大返し取返して返し引包て攻戦へば多目大谷も取こめられて討死す大將既に討れしうば殘兵四方に逃去るを追討して首九十三級を討取利家の陣へもたせ送る利家大に感じ其首ども小田原に送り關白御覽に備へければ殿下より康國へ感狀を賜ふ

上野の内西牧城以下以三計策一落居殊城主多目周防守大谷帶刀成敗の段尤北條親類等歎爰彼可三討果一事案の中ハ彌馳走此時ハ忠節專一にハ委細ハ利家可レヤ也

卯月廿九日

秀吉

松平修理太夫殿へ

五月に前田利家上杉景勝兩將ハ武州本庄八幡山東方深谷以下の城をあるひに攻取或の乗取武威遠近にかいやりす松平修理太夫康國兄弟西牧城を攻取其勢に乗じ同州石倉城に攻寄れば城主寺尾左馬助降参す康國ハ之を請取らんが爲惣社に陣取て有し所へ長根の城主小林縫殿助も降参して康國ハ調せんとて來る其時本多三彌正重前田に屬し寄手に加りり是も惣社邊に陣取て有しが歩卒向を争ひ出て騒しうりければ康國が弟新六郎康貞是を静め

んとて馬引出せ下部共來れと呼べるを聞て小林我身を誅すると心得康國が陣中に文認めて居たるを後より飛掛て刺殺す康國勇銳の若者突れあから脇差をぬいて小林を突く新六郎康貞走り來り忽に小林を討留る伯父依田善九郎も馳來り共に小林をも討て其從者十餘人切て入しを皆討果す（基業に石倉城一木長根城と名を石倉某とあるし一本小林左馬允と寺尾小林を一人とす今の編年に從ふ）此事小田原に注進すれば神君康國が死を憐給ひ弟康貞少年銳勇速に兄の仇討しを褒し給ひ兄康國が遺領悉く康貞に賜り其人數を總領せしめらるぞありがたき（編年基業但し原書に此條を山中城軍の前に收む誤之基業編年等に仍てあらためこゝにのせたり）

蒲生陣夜討の事

五月三日（原書七月二日とす）小田原城中諸將集り軍議しける抑小田原城の日本無雙の要害堅固きも東八州の勇士たて籠りし故に三月の末より只今迄抱え京勢の三十万餘人日夜旦暮に取巻て攻けれどもいまだ崩一重をも破られずされども寄手の随分長陣の用意して日數を送ると見ゆれば畢竟城中兵糧に詰りて果は飢餓に及ふべしといさや一夜討して一方の

敵を追拂ひ味方糧米運漕の道を開くはいかゞといふに大和兵部少輔伊勢備中守等も一同に此儀尤いさや善事は速あるをよしとす今夜打て出べし其用意せよといふ夜討に馴たる兵十三百人計り撰出し其大將は廣澤兵庫助秀信（原書に夜討の大將北條十郎氏房副將は芳賀伯耆守とす誤なり）と定め今夜子の刻北條十郎氏房が持口より打て出蒲生飛彈守氏郷が陣にむかふ蒲生は兼て軍令を嚴にし斥候油断せず夜は毎夜側人を城邊につかはし敵の形勢をうかいはせける自身も晝夜に限らず陣中を巡り怠を戒めけり今夜城邊斥條の番兵伊賀者町野万右衛門衛（原書輪之助）只一人忍び寄て城中の形勢を伺ふ所城内例にかはつて物騒がしければ怪しく思ひ御門の邊迄忍び寄て弓と矢打ちがひもしや城兵打て出は一矢射るべしと鎮守の森の木陰に立隠れ暫時かほど見合て居たる所に案の如く城兵門を開き三四百人皆歩行立にて打出しが先陣後陣と覺しくひじくど立別れ二行に成て備を立る万右衛門是を見て立歸り主人に告んと思ひしが同じくは此夜討何方へ討てかゝるか定て蒲生殿が細川が秀次卿の陣ならん其道筋を篤と見定めんと思ひ靜に待居たるかまじや誰陣へむかふにもせよ一矢射て見んと思ひ敵を少しやり過し樹陰より近様にと詰引詰射たりければ城兵大

に驚き味方の中より後矢射る者有りや又は敵の後より来るにや五月やみわやめもわかぬ間  
 夜是はくどしばらく猶豫して進み兼たり方右衛門ひそかに道をかへ早し浦生が陣へ走歸  
 りかくと告れば氏郷心得たりと近習の者を陣中へ走めぐらし只今夜討の来るぞ早く出合と  
 觸させけれども餘り事急さればよふく驚て眼を拭ながら起出せし者もわりいまだ熟睡し  
 て起得ざる者もわり上下大に騒動す其中に番兵關右兵衛手の者共を下知し面々得物を提て  
 懸合す本陣の宿直は浦生左文同上坂源之允細又右衛門等走り出る夜討の城兵突てかゝる  
 浦生と土方勘兵衛が陣堺の柵を破て討てかゝる鉄炮頭浦生源左衛門門屋助右衛門寺村半兵  
 衛森民部丞弓頭又は浦生忠左衛門梅原彌左衛門敵の持たる火繩を目當にして矢炮射立打  
 立踏留て是を防ぐ氏郷陣所の傍に谷廻り老木鬱々たる所あり敵かからず爰より本陣を犯し  
 伐事あらんと氏郷兼て其用意をなして有けるに今夜果して敵多く此所より亂入せんとす氏  
 郷用意の長鎗打振る亂入する敵を谷中へ突落す跡より来る敵又闇夜ゆへ知らずして突落さ  
 る者數知らず小川平右衛門氏郷の跡を追て走來り大將はいつくぞといふ上坂源之允御大將  
 は爰なりといふ其聲聞て浦生左文細又右衛門も田丸中務少輔町野左近始め其外大勢走集

れば敵は此所を引取りたり此時迄氏郷鏝は着ざりしをみて北川恐るがら是を召給へど我鏝の  
 めいて氏郷は進めしかば氏郷大に悦て其鏝を着したり會津入部の時北川へ一番津川の  
 城を授けしは此時の恩賞とぞ聞ける佃又右衛門は元來大力の勇者先年濃州加賀井の城軍の  
 時十分の戦功顯はしけれども其節名乗らざりし故是を知る者少かりしを遺憾に思ひ常に  
 人にも其物語しけるが今夜は敵と鎗を合する度々左文が上坂を呼びかけて佃が鎗の手を御  
 覽いへど透間なく名乗ければ敵も味方も其聲聞て今夜の佃一人の機にいちじるしくぞ  
 聞へける氏郷無双の勇將銳氣尤盛壯されば夜討の兵の真中をかけ破て馬を飛し蹴散を上  
 坂北川立塞り大將は三軍の司命血氣の勇は士卒のいたす所ゆめく勿躰きしと諫れども  
 氏郷さらに聞入らず彼一丈七尺の長鎗を打振る敵三十餘人自身突伏一人も洩すべからず悉  
 く切捨にせよと下知して逃行敵を追散らす敵の大將廣澤兵庫助兼てかゝる事有べきかと察  
 し歸路二所に兵を伏置鉄炮を打せければ浦生が眞先かけし兵士等此鉄炮に打立られ少し猶  
 豫する所を廣澤兵庫助逃る味方をたゞき廻しもり返せば浦生左文同五郎兵衛北川土佐佃又  
 右衛門待設て鎗を合す氏郷は兵庫助を敵と見て鎗を合せ奮戦するを兵庫助が從兵富永孫右